みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

２．研究および共同利用

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-03-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/00009673

2 研究および共同利用

概観

本館の研究は「特別研究」「共同研究」「各個研究」という３種類の研究を柱としている。

「特別研究」は、2016年度から始まった第３期中期計画・中期目標期間の６年間を通じて、「現代文明と人類の未来――環境・文化・人間」を統一テーマに、現代文明が直面する喫緊の諸課題に対して解決志向型のアプローチにより実施する国際共同研究である。

「共同研究」は、ある共通の研究テーマの下に複数の研究者が集まって研究会などを開催し、共同で研究をおこなう活動で、本館の研究活動の柱の１つであるとともに、大学共同利用機関としての「共同利用」の一環でもある。特別研究が研究テーマの設定やプロジェクトの選定から、その運営、成果の公表まで本館主導でおこなうのに対して、共同研究は研究テーマと組織について、館員のみならず、本館を共同利用する研究者の自主的な提案に基づく。すなわち、館員（客員教員を含む）を対象とした館内募集に加えて、公募もおこなっている。応募された共同研究の提案は、館内募集、公募の区別なく共同利用委員会で審査され、採択される。共同研究会（一般）には、文化人類学・民族学及び関連諸分野を含む幅広いテーマを対象とし、挑戦的で、新領域開拓につながる研究である「新領域開拓型」と、本館の所蔵する資料（標本資料，文献資料，映像音響資料等）に関する研究である「学術資料共同利用型」の２つのカテゴリーがある。また、若手研究者の育成・支援を目的として、39歳以下の若手研究者を代表者とする共同研究（若手）も同様に公募している。

「各個研究」は、教員（客員教員を含む）が自主的にテーマを設定して、個人で実施する研究であるが、館の公的な研究活動の一環に組み入れられている。

2014年度に共同利用に関してその強化を目的とする改革をおこなった結果、本館の共同利用では共同研究の公募、公開の推進と資料・設備の共同利用の促進を強調するようになった。なお、従来から、共同利用を積極的に推進するために、「外来研究員」「特別共同利用研究員」といった研究員制度を設けており、若手研究者の育成支援もおこなっている。

館の研究活動である「特別研究」や個々の研究者による「各個研究」を資金面でサポートするのが、館長リーダーシップ経費と科学研究費助成事業などの外部資金である。前者には「研究成果公開プログラム」という枠組みがあり、特別研究プロジェクト以外の大規模なシンポジウムの実施をはじめ、共同研究や各個研究の成果を公開するための研究フォーラムや国外の学会、研究集会での発表を支援するものである。

しかし、特別研究プロジェクト、26件の共同研究、約70件の各個研究の研究資金を運営費交付金だけから捻出することは到底できない。研究に客観性を担保していくためにも、科学研究費助成事業などの競争的外部資金の導入を積極的に行っている。そのほか、日本学術振興会以外の独立行政法人が募集する助成金や民間の助成団体等による奨学寄付金なども積極的に受け入れている。これら外部資金に付随する間接経費は貴重な研究支援経費となっており、それらを使用した館内の研究環境整備事業が実施されている。なお、館長リーダーシップ経費の「事業・調査経費」という枠組みも同じ目的で使われる。

本館における研究成果公開の主軸のひとつである刊行物に関しては、2019年度には『国立民族学博物館研究報告』44巻１号～４号が刊行されるとともに、SES（Senri Ethnological Studies）No. 101, 102、SER（『国立民族学博物館調査報告』またはSenri Ethnological Reports）No. 149, 150、TRAJECTORIA Vol. 1、『民博通信 Online』No. 1が刊行され、外部出版制度を利用した成果公開も行った。さらに、研究成果を広く市民に公開するための学術講演会を、東京と大阪で開催している。

本館は開設以来40余年にわたり世界の民族と文化、社会を研究し、多様な有形・無形の民族資料とそれらに関連する情報を集積してきた。それらの資料と情報を「人類の文化資源」と位置づけ、同時代の人々と共有しかつ後世に伝えるため、国内外の複数の研究機関、大学、博物館、現地社会と連携しながら研究を推進している。特に2014年度より、グローバルな共同利用デジタル・データバンクとして「フォーラム型情報ミュージアム」を創出し、人類の文化資源に関する情報の発信、交換、生成、共有化を図る「人類の文化資源に関するフォーラム型情報ミュージアムの構築」プロジェクトを立ち上げた。このプロジェクトによって、研究者コミュニティのみならず、文化資源を作り出した現地社会との双方向的な交流も実現したいと考えている。初年度の2014年度は、北米先住民や韓国の文化資源等に関する４件の研究プロジェクトの活動やシステムの基本設計を開始した。2015年度は、台湾原住民や北米北方先住民に関する２件のプロジェクトが加わり、合わせて６件のプロジェクトを実施するとともに、パイロット版のデータベースを作成した。３年目となる2016年度から人間文化研究機構の機関拠点型基幹研究プロジェクトとして位置づけられ、３件の新規プロジェクトが加わり、開発型プロジェクト４件、強化型プロジェクト７件、合計11件のプロジェクトを実施した。2018年度は、４件の新規プロジェクトが加わり、開発型プロジェクト４件、強化型プロジェクト５件、合計９件のプロジェクトを実施した。2019年度は、３件の新規プロジェクトが加わり、

開発型プロジェクト４件、強化型プロジェクト６件、合計10件のプロジェクトを実施した。各プロジェクトが本館の収蔵資料のソースコミュニティなどと協働してデジタル博物館の構築を促進する取り組みを実施したことにより、本事業によって構築されたデータベース・コンテンツの格納件数が、50,142件（936,597レコード）となった。研究成果の公開促進を目的として、2018年度より新設した国際発信プログラムにより、『国立民族学博物館フォーラム型情報ミュージアム資料集』を２冊刊行した。開発型プロジェクトでは、ソースコミュニティの人びとや研究者を招聘した国際ワークショップを開催した。また、構築した５つのデータベースの公開を進め、プロジェクト全体の成果の国際発信と一般社会への発信に尽力した。

本館の資料は2004年度より標本資料、映像音響資料、文献図書資料、民族学研究アーカイブズ資料に大きく４分類されている。それぞれの整備および利用状況をみると、まず標本資料は海外直接収集資料としてメキシコの民族芸術、大韓民国の衣類関連資料、国内購入資料として日本のバードカービング、漆器、ウミウの捕獲道具、アイヌの工芸品資料を収蔵した。また、北米先住民の銀製宝飾品、モンゴルの生活関連資料、メキシコの生命の木、日本の水車、神事関連資料、アイヌの人形等を寄贈受入した。

本館は、民族資料や文化財、博物館資料を対象に、一時的な非破壊分析や材質分析がおこなえる非破壊分析・材質分析装置システムを所有している。このシステムを文化人類学やその周辺領域の学問分野において、さまざまな組織や研究者がより積極的に活用でき、科学的研究に基づいた共同利用の促進に資することを目的として、共同利用科学分析室を運用している。

文献図書資料に関しては、継続的な事業として国立情報学研究所NACSIS-CAT（全国規模の総合目録データベース）への登録作業を推進している。2019年度は、マイクロ資料2,748件（図書2,607件、新聞雑誌２タイトル141件）を登録した。遡及入力事業で登録された所蔵情報は、本館の図書システムの蔵書データベースとして、Internetを介して広く公開・利用されており、2019年度は、図書館間相互利用での現物貸借受付が496件、文献複写受付は4,211件と、大学間の共同利用に貢献している。また、一般利用者への貸出冊数は1,465冊であった。

2006年度に「民族学資料共同利用窓口」を設置し、民族学資料（標本資料、文献図書資料、オリジナル映像・音響資料、研究アーカイブズ資料）の利用に関する問合せを１つの窓口で対応することで、サービス向上を図っている。2019年度には283件の問合せに対応した。

また、蔵書点検３カ年計画の２年度目として、約22万冊の蔵書の点検を行った。

2007年度より民族学研究アーカイブズの共同利用を促進するため、ホームページを開設し、各アーカイブの目録等を公開してきた。2019年度は引き続き資料の整理作業を行い西北ネパール学術探検隊1958年データカード、木内信敬、石毛直道アーカイブの目録をWeb公開した。また、アーカイブズ文書資料の特殊性に鑑み、複写にあたっては申請者の研究内容との関連性等を総合的に判断した上で許可することや、複写の申請は原則として来館時に限ること等を明記することなど、利用方法について再検討を行い、規程改正の準備を進めた。また、近年国外からの来館者の利用申請が増加傾向にあることを踏まえ、利用申請書の英語版作成のための翻訳案検討を行った。

2-1　みんぱくの研究

特別研究

●特別研究の意義

特別研究は、2016年度から始まった第３期中期計画・中期目標期間の６年間を通じて、「現代文明と人類の未来――環境・文化・人間」を統一テーマに、現代文明が直面する喫緊の諸課題に対して解決志向型のアプローチにより実施する国際共同研究である。

近現代のヨーロッパに発する科学・技術、政治・経済制度、社会組織、思想などからなる西欧文明は、世界の多くの国と地域に影響を与え、科学・技術の発展は、人類の生活と社会を豊かにすると信じられてきた。しかし、人口増加、環境破壊、戦争、資源枯渇、水不足、大気汚染など、大きな負の代償を人類社会にもたらしているとも言える。特に環境問題と人口増加は、解決を要する大きな課題である。このような状況において、文明に対応してきた現地社会の「知」から現代文明を問い直し、現代の人類社会が直面する諸課題の分析と解決を志向する研究として特別研究を発足させた。この特別研究は、グローバル空間・地域空間・社会空間が構成する多層的生活空間における現代的問題系として環境問題や人口をめぐる地球規模の変動をとらえ、それにアプローチすることで、旧来の（伝統的な）価値から、いかに多元的価値の共存を保障する社会を創成することができるかを解明し、人類社会にとって選択可能な問題解決を志向する未来ビジョンを提出することをめざすものである。

2019年度は、プロジェクト「食料生産システムの文明論」において、2019年３月に実施した国際シンポジウム

「Making Food in Human and Natural History」の成果刊行準備を進めた。また、プロジェクト「パフォーミング・アーツと積極的共生」において、2020年３月に国際シンポジウム ‘Performing Arts and Conviviality’ を開催する予定であったが、新型コロナウイルス感染拡大防止の観点から延期とし、次年度に開催することとした。そして新たに、プロジェクト「デジタル技術時代の文化遺産におけるヒューマニティとコミュニティ」を開始し、2019年11月にみんぱく公開講演会「アニメ『聖地』巡礼――サブカルチャー遺産の現在」を開催した。

2019年度特別研究一覧

プロジェクトリーダー	プロジェクト名	テーマ区分	研究年度
野林厚志	食料生産システムの文明論	食料問題とエコシステム	2017-2019
寺田吉孝	パフォーミング・アーツと積極的共生	マイノリティと多民族共存	2018-2020
飯田　卓	デジタル技術時代の文化遺産におけるヒューマニティとコミュニティ	文化遺産とコミュニティ	2019-2021

●特別研究のテーマ区分とプロジェクト

1　テーマ区分：②食料問題とエコシステム

プロジェクトリーダー：学術資源研究開発センター　野林厚志

研究課題：食料生産システムの文明論

研究目的

人類にとって食とは生態学的、栄養学的充足を満たす以上の役割がある。すなわち、食とは最も原初的な富の形態であり、生産（採集や狩猟も含む）、貯蔵、交換といった諸行為を通じて、より大きな経済活動を構築する端緒を与えた。同時に、地域の環境と密接にむすびついた食は、土地の人々にとって社会的、文化的アイデンティティの表明となり、同時に共食や贈与交換に代表されるコミュニケーション手段の役割も果たしてきた。これらはその範囲を広げることにより、国家や共同体の統合原理を構成する要素ともなり、近年では「ガストロディプロマシー（美食外交）」に見られる国家間の経済的、政治的関係を深めるための外交手段としても注目されている。

本来、食とは個体が生命を維持するための要素であり、地球の生態循環のなかで機能するものである。したがって、現代社会における大量生産、大量廃棄という食糧資源のあつかわれかたは、これまで人類社会が経験してこなかった文明の新たな暗部ともいえる。政治経済的な脈絡の中で生態学的適応に乖離している現代社会の食の実相が生成されるメカニズムを、従来のマクロな食糧問題へのアプローチに対し、文化人類学的な切口でとらえることが本研究の主要な目的である。

本研究課題では人類が食を操作してきた営みを批判的に検討する。具体的には、食料生産のシステムが、家庭、地域社会、国家、経済地域圏をどのように接合しているのか、個々のレベルで生じる格差と食料生産、供給、消費との関係、伝統文化、食文化の維持と食料生産システムとの矛盾等を核となるテーマとして設定し、文明社会を支えてきた文化的装置として食料の生産の将来におけるありかたを見直そうとするものである。

実施状況

- 国際シンポジウムの準備会合
  2017年度に全体の構成を計画し、翌年度それぞれの内容に適切な内外の招聘研究者の人選を検討し、最終的な構成と内容を決定した。
- *MINPAKU Anthropology Newsletter* の特集編集
  MINPAKU Anthropology Newsletter 47号に、‘Food Culture’ のタイトルでの特集を編集、刊行し、国際シンポジウム報告者への事前送付を行った。
- 国際シンポジウムの開催
  2019年３月17日～20日の日程で、国際シンポジウム ‘Making Food in Human and Natural History’ を開催した。17日は、事前準備の会合と民博の見学会を、18日、19日は、国立民族学博物館において研究発表と討論を、20日は発表者、討論者による滋賀県琵琶湖東岸地域の巡見とワークショップを実施した。

この他、2019年度は出版準備をおこなった。
タイトル、内容については以下のものを想定している。

論文集タイトル
Anthropological Perspective of Making Food in Local and Global Contexts（仮）
目次
Introduction
Atsushi Nobayashi

Chapter 1. Ecology and Food
Gastronomical Goods as a Biocultural Value of Wood Pastures in Eastern Europe
Anna Varga, Nikolett Darányi, Krisztina Molnár, Noémi Ujházy
Merroir in the Making: Translation and Territorialization of Taste in Japanese Seafood Culture
Shingo Hamada
The Socio-Cultural Reception of MSG (Monosodium Glutamate) in Thailand
Yoshimi Osawa

Chapter 2. Social Context of Food
Sharing Food and Conviviality in the Mediterranean Diet. Some Ethnographic Examples
Elisabetta Moro and Rossella Galletti
Rethinking a Complex Connection between Commensality and Family: Through Japanese Cases and Italian ones.
Taeko Udagawa
Rethinking Foodscapes. Does it Matter how Food Reaches My Plate?
Cristina Grasseni

Chapter 3. Ethnicity in Foodscape
The "Making" of Hakka Cuisine: A Case Study for the Formation of Ethnic Food and its Foodscapes in Southeast China
Hironao Kawai
Tubawan and the Play of Authorial Slippage: The Sani Yi People's Practice of Hospitality Business and the Making of Indigenous Foodscape
Rongling Ge
Translocal Foodscapes: Gastronomic Creativity in Mérida, Mexico, and Seville, Spain
Steffan Igor Ayora Diaz

Chapter 4. Food as Representation of Publicity
On the Formation of Chinese National Cuisine: Historical and Anthropological Perspectives
Haruhiko Nishizawa
The Tea Industry in Modern China and Public Demand for Tea
Jianping Guan

研究成果の概要

初年度（2017年度）は、次年度に開催する国際シンポジウムのための準備作業、ならびにそれにともなう基礎資料の収集を実施したうえで、みんぱく公開講演会「料理と人間――食から成熟社会を問いなおす」（日経ホール、2017.11.17）を開催し、外部の研究者の協力を得ながら、本研究の課題に関する論点の深化をはかった。特にグローバルスケールでの食糧の移動と地域社会における食品の流通の対照性を歴史的にとらえることが検討すべき課題として抽出された。

第二年度（2018年度）は、国際シンポジウム 'Making Food in Human and Natural History' を開催した（国立民族学博物館、2019.3.17～20）。海外から６名の研究者（イタリア１名、オランダ１名、メキシコ１名、ハン

ガリー１名、中国２名)、国内から２名の研究者を発表者として招聘し、以下の４つのパネルで実施した。1) Food and Ecology (野林担当)、2) Categorization of Food (河合担当)、3) Community, Sociality and Food (宇田川担当)、4) Strategy and Governance of Cuisine (韓担当)。

国際シンポジウムに先立ち、Minpaku Anthropology Newsletter 47号に、'Food Culture' のタイトルでの特集を編集、刊行し、国際シンポジウム参加者への事前送付を行い、問題意識の共有をはかった。

最終年度（2019年度）は、前年度に実施した国際シンポジウムの成果論集の刊行のための編集作業を進めた。参加者に当日の議論をふまえたうえで、発表論文の加筆、修正を行なってもらい、出版用の原稿を再提出してもらったうえで、英文の校閲、校閲内容にしたがった修正稿の作成を完了した。これらの内容にもとづき内容の再構成を行った論文集の提出用原稿の準備を完了した。

特別研究に関連した成果の公表実績

出版

MINPAKU Anthropology Newsletter No. 47, 2018

公開シンポジウム

International Symposium 'Making Food in Human and Natural History'
18-20 March 2019, National Museum of Ethnology

2　テーマ区分：③マイノリティと多民族共存
プロジェクトリーダー：学術資源研究開発センター　寺田吉孝
研究課題：パフォーミング・アーツと積極的共生

研究目的

共生は、可視的な差別は概ね解消されているが、集団間の忌避感や偏見が残る「消極的な共生」と、お互いの文化的特性・差異を認め、尊敬の念を抱けるような「積極的な共生」に分けることができる。本プロジェクトは、音楽・芸能などに代表されるパフォーミング・アーツが「積極的な共生」を実現するために果たしうる役割と可能性を探ることを目的とする。ここで言うパフォーミング・アーツとは、音楽、舞踊、芸能、演劇はもとより博物館・美術館における体験型インスタレーションなど、身体を活動の基盤とする幅広い活動をさす。元来、パフォーミング・アーツは、身体を媒体とし視覚中心的な認識体系を超える（とは異なる）人間の知覚・思考形態に作用すると考えられ、人間の感情に大きな影響を与えることが報告されている。しかし、その一方で、パフォーミング・アーツのもつ感情に作用する力が、偏狭な国家主義、民族主義、性差別主義などの表現として利用されてきたことも事実である。そこで、本プロジェクトでは、パフォーミング・アーツが「積極的な共生」の達成に寄与する枠組みや条件を、具体的な事例の蓄積とそれらの比較検討から探りたい。

人間の集団は、その規模や地域に関わらず、民族、宗教、言語、政治的信条、経済階層、年齢、ジェンダー、セクシュアリティなど様々な指標（徴）により区別されており、そのように区別される集団間には、力の不均衡が存在することが多い。この中で劣位におかれた集団（マイノリティ）の文化や歴史は、彼らが居住する国家や地域などの公的な文化表象や教育から排除される傾向がある。そのため、マイノリティが音楽や芸能に自己表現や主張の場を求める例がこれまでに数多く報告されてきたが、パフォーミング・アーツと共生の関係をテーマにした研究は数少なく、また地域的にも限定的であった。本プロジェクトでは、世界各地で関連するプロジェクトを展開する研究者や活動家の参加をつのり、パフォーミング・アーツを「積極的な共生」実現に向けた具体的な方策としてとらえる総合的な研究を目指す。

実施状況

年度末に開催予定だった国際シンポジウム（３月19日～22日）を行うべく準備を進めた。７月から８月にかけて国際共同研究員であるデボラ・ウォン教授（カリフォルニア大学リヴァーサイド校）を外国人研究員として一ヶ月間招聘し、８月６日に準備研究集会を開催した。ウォン教授を含めシンポジウム参加予定者３名が研究発表を行い、特別研究の研究課題に関する討論を行った。さらに、外国人研究員としてシンポジウムに先立って来日した国際研究協力者ゴーパーラン・ラヴィンドラン教授（マドラス大学)、サミュエル・アラウジョ教授（リオデジャネイロ連邦大学）の２名と継続的に議論を深めた。順調に準備を進めていたが、新型コロナウイルス感染症の拡散防止のために国際シンポジウムの延期が決定されたため、今年度の準備は次年度のシンポジウムで生かさ

れることになった。

研究成果の概要

年度末に予定されていた国際シンポジウムが延期されたため、期待されていた成果は次年度以降に持ち越されたが、準備研究集会や国際研究協力者らとの継続的な議論を通して、シンポジウムで検討すべき論点を整理することができた。それらの論点はシンポジウム参加予定者に共有され、発表の概要に反映された。

特別研究に関連した成果の公表実績

MINPAKU Anthropology Newsletter（49号，2019年12月）に特別研究プロジェクトの特集が組まれ、シンポジウムにおける発表予定者４名がエッセイを寄稿した。タイトルは以下の通りである。

Terada, Yoshitaka, “Performing Arts and Conviviality”（pp. 1–3）

Nakamura, Mia, “Musical Conviviality in the otto & orabu Ensemble”（pp. 3–5）

Urbain, Olivier, “Musicking Conviviality, Solidarity and Peacebuilding”（pp. 6–8）

Wong, Deborah, “Intention, Connection and Convivência”（pp. 8–11）

3　テーマ区分：④文化遺産とコミュニティ

プロジェクトリーダー：人類文明誌研究部　飯田　卓

研究課題：デジタル技術時代の文化遺産におけるヒューマニティとコミュニティ

研究目的

文化をめぐる第三の波が到来しつつある。第一の波は、ナショナリズムと結びついたかたちで文化遺産に関する枠組みができあがった19世紀末から20世紀初頭。第二の波は、産業資本主義への懐疑とともに文化の政治性が浮きぼりになった1970年代から1990年代。そして現在、ヒューマニティ（人間性）の概念をラディカルに問いなおすAIが登場し、ヒューマニティの最後の砦として文化が見直されはじめている。

これら３つの波は、一定時期を過ぎれば鳴りをひそめるといった類いのものではない。現にこんにち、第一の波によって問題化されたナショナリズムや、第二の波によって問題化されたアイデンティティ政治と文化との関係などが、なおも余韻を残しつつ第三の波と干渉し合っている。言いかえれば現代は、ナショナリティとローカル・アイデンティティ、ヒューマニティといった異なる価値に駆動されながら文化が躍動する時代だといってよい。

いっぽうで、文化が意味する範囲は相変わらず多様である。文化が時代を読み解く鍵になるとしても、その定義について合意がなされることは、当分のあいだないだろう。文学や美学が扱ってきた貴族趣味の芸術文化や、ロマン主義や文化人類学が扱ってきた生活様式としての文化、ならびにカルチュラルスタディーズが扱ってきた産業資本主義的なポピュラーカルチャー（文化）は、互いに響きあいながらそれぞれにリアリティを帯びている。ただし、第三の波を受けた現代においては、生活場面全般の行動様式という意味での文化は、相対的に存在感を弱めている。代わって存在感を強めているのが、さまざまな複製技術（VR技術など、デジタル技術に含まれないさまざまな技術も含む）によってパッケージ化され、アイコンとして流通しうる芸術文化やポピュラーカルチャーである。アイコン化になじみにくい行動様式としての文化は、現代では、無形文化遺産という名でパッケージ化されて流通する。このため文化人類学において議論されてきた生活文化は、文化遺産やそれを収める博物館といったテーマにおいてとりわけ先鋭的に問題化され、芸術文化やポピュラーカルチャーの問題に関わっているのである。

本研究では、文化遺産の価値をめぐってくり広げられる社会関係からその特殊性や政治性を明らかにするとともに、それら文化遺産が現代的価値であるヒューマニティの代理／表象たりうるかどうか、言いかえれば、ローカルな文脈において生まれたはずの文化遺産が普遍性を持ちうるかどうかを議論する。ここでいう文化遺産は、ユネスコなどによって公的に認定されたものだけを指すのではなく、人間的な無形の営みを蓄積・反映した五感的表現は便宜的にすべて文化遺産とみなす。こうした文化遺産が、ナショナリティやローカル・アイデンティティのみならず、ヒューマニティをめぐる議論にも影響されながらいかなるふるまいを示すかを実証的に明らかにしていく。

実施状況

第１回研究会（国立民族学博物館４階特別研究室）発表者１名、聴衆23名

日　　時：2019年６月27日（木）15時～17時

発 表 者：川村清志（国立歴史民俗博物館）
発表題目：聖地巡礼のラビリンス――現代日本における旅・キャラクター・物語

第２回研究会（国立民族学博物館４階特別研究室）発表者１名、聴衆14名
日　　時：2019年10月７日（月）15時～17時
発 表 者：久保明教（一橋大学）
発表題目：文化と数値化――将棋界における情報技術導入の軌跡

第３回研究会（国立民族学博物館４階特別研究室）発表者１名、聴衆18名
日　　時：2019年11月14日（木）15時～17時
発 表 者：末森　薫（国立民族学博物館機関研究員）
発表題目：色・光の再現から、敦煌莫高窟につくられた宗教的空間を再考する

日経講演会（日経ホール）発表者３名、聴衆311名
日　　時：2019年11月15日（金）18時30分～20時40分
発 表 者：川村清志（国立歴史民俗博物館）、河合洋尚（国立民族学博物館）、飯田 卓（国立民族学博物館）
講演会題目：「アニメ『聖地』巡礼――サブカルチャー遺産の現在」

第４回研究会（国立民族学博物館４階特別研究室）発表者１名、聴衆16名
日　　時：2019年12月11日（水）15時～17時
発 表 者：飯田　卓（国立民族学博物館）
発表題目：コミュニティとデジタル技術が文化遺産研究に深く関わる（matter）理由

研究成果の概要

メンバー各人の関心から発表をおこなうとともに、デジタル技術と文化に関わる特別講師を招いて研究会を開催した。同時に、メンバーの関心の最大公約数となるようなシンポジウム題目を討議した。その結果、2020年度（第２年度）におこなうシンポジウムは、現代的状況における異なる世代のあいだでの文化のうけ渡し（コミュニケーション）をテーマとする方向性が見いだされた。ここでいう現代的状況とは、都市部への人口集中（＝村落部での過疎）や家族や地域社会の変化、IT 技術の整備、物流機構の整備、地球環境の不安定化、そして感染症リスクの増大（後述）など、前近代では考慮する必要のなかったさまざまな条件の不安定化をあげることができる。これらのさまざまな現代的問題と文化のうけ渡しとの関連を論ずるというのがシンポジウムの課題である。

上記のテーマは、イギリスとフランスに渡航したさいにパネリスト候補者にも話し、賛同を得た。研究会を重ねたうえで第２年度のシンポジウムの準備をおこなうという意味では、研究目的を達成したといえる。

特別研究に関連した成果の公表実績

【出版】

Iida, T.
2019　DiPLAS: Academic Image Platform for Twentieth-Century Photographs. In N. Sonoda (ed.) Conservation of Cultural Heritage in a Changing World (Senri Ethnological Studies 102), pp. 165-174. Osaka: National Museum of Ethnology.

河合洋尚
2020　『＜客家空間＞の生産――梅県における「原郷」創出の民族誌』東京：風響社。

河合洋尚・張維安編
2020　『客家族群與全球現象――華僑華人在「南側地域」的離散與現況』（国立民族学博物館調査報告150）大阪：国立民族学博物館。

松田　陽
2020　「『文化財の活用』の曖昧さと柔軟さ」國學院大學研究開発推進機構学術資料センター編『文化財の活用とは何か』pp. 115-125, 東京：六一書房。
2020　「考古学と文化財」『季刊考古学』150：34-37。

田中英資
2019　「現代セルチュクにおけるエフェソスの位置づけ」阿部拓児・田中英資・守田正志編『トルコ・アナトリアの「歴史的重層性」と文化遺産（京都府立大学文化遺産叢書第17集）』pp. 23-42, 京都：京都府立大学。
2019　「パターラ遺跡とゲレミシュ村の人々」阿部拓児・田中英資・守田正志編『トルコ・アナトリアの「歴

史的重層性」と文化遺産（京都府立大学文化遺産叢書第17集）』pp. 105-126，京都：京都府立大学。

川瀬　慈編

2019　『あふりこ――フィクションの重奏／遍在するアフリカ』東京：新曜社。

Kawase, I.

2019　Exploring the Creative Use of Germany's Encyclopedia Cinematographica. In N. Sonoda（ed.）Conservation of Cultural Heritage in a Changing World（Senri Ethnological Studies 102）, pp. 157-164．Osaka: National Museum of Ethnology.

川瀬　慈

2019　「神々との終わりなきインプロヴィゼーション」千葉文夫・金子遊編『ジャン・ルーシュ――映像人類学の越境者』pp. 165-182，東京：森話社。

末森　薫

2019　「文化財を対象とした光学撮影・画像処理の方法――壁画や博物館資料への活用事例」『第63回システム制御情報学会研究発表講演会 予稿集』pp. 591-594，京都：システム制御情報学会。

2020　『敦煌莫高窟と千仏図　規則性がつくる宗教空間』京都：法蔵館。

2020　「中国文明の宗教芸術にみるビーズ――敦煌莫高窟の菩薩装身具」池谷和信編『ビーズでたどるホモ・サピエンス史――人類にとって美とは何か』pp. 147-159，京都：昭和堂。

【映像作品】

川瀬　慈（監修・監督）

2020　『アシェンダ！ エチオピア北部地域社会の女性のお祭り』日本語・38分、HD、みんぱく映像民族誌。

【口頭発表】

飯田　卓

2019年５月19日　「くらしのなかの文化遺産――物質文化研究と博物館活動、そして文化継承支援を統合する試み」日本アフリカ学会第56回学術大会、京都精華大学、京都

2019年６月10日　「日常生活的文化遺産化――馬達加斯加木雕商品化案例（日常生活の文化遺産化――マダガスカルの木彫り商品化を例に）」國立臺北藝術大學博班實驗室系列講座「時空移轉・文化續存」國立臺北藝術大學、台北

2019年11月15日　「遺産観光におけるバーチャリティ」第20回みんぱく公開講演会「アニメ『聖地』巡礼――サブカルチャー遺産の現在」日経ホール、東京

川村清志

2019年11月15日　「聖地巡礼のラビリンス――現代日本における旅・キャラクター・物語」第20回みんぱく公開講演会「アニメ『聖地』巡礼――サブカルチャー遺産の現在」日経ホール、東京

河合洋尚

2019年９月11日　「景観人類学――田野科学如何分析景観問題与景観設計？」北京大学建築与設計学院招待講演、北京大学、北京

2019年11月８日　「景観人類学的新趨向――現状与展望」アモイ大学人類学部招待講演、アモイ大学、アモイ

2019年11月15日　「アニメのある景観――中国地域の客家文化継承をめぐって」第20回みんぱく公開講演会「アニメ『聖地』巡礼――サブカルチャー遺産の現在」日経ホール、東京

Seki, Y.

2019年６月28日　'Relacionando el patrimonio cultural material e inmaterial par su uso y protección en la sierra norte del Perú.' XIX Congreso de la Federación Internacional de Estudios sobre América Latina y el Caribe, Universidad de Szeged, Szeged, Hungaría

關　雄二／ダニエル・モラーレス

2019年12月14日　「パコパンパ遺跡――金製品の発見と地域文化遺産の保護」ペルー日本人移住120周年・日本ペルー交流年記念シンポジウム「ペルーの文化遺産保護の最前線――アンデスの黄金、ナスカの地上絵、インカのミイラ」東京文化財研究所、東京

Tanaka, E.

2019年８月20日　'Ancient Lycia and the Nomadic Past: Heritage and Tourism in Gelemis, south Turkey.' International Seminar on Heritage and Tourism, Hokkaido University, Sapporo

末森　薫
2019年10月25日　「関于敦煌莫高窟千仏図有規律性絵制的多角度考察――再現模写和虚拟空間的思考」敦煌唐代芸術研討会、敦煌研究院、敦煌

人類の文化資源に関するフォーラム型情報ミュージアムの構築

2014年度から、本館が所蔵する様々な人類の文化資源をもとに国際共同研究を実施し、情報生成型で多方向的なマルチメディア・データベースの構築を行う、「人類の文化資源に関するフォーラム型情報ミュージアムの構築」を行っている。初年度は、プロジェクトに係る基盤構築として、フォーラム型情報ミュージアム委員会のもとにシステム開発WGを置き、資料データ整備やデータベース間の総合連携、公開方法等について検討を進めた。

また、「北米先住民製民族誌資料の文化人類学的ドキュメンテーションと共有」、「『朝鮮半島の文化』に関するフォーラム型情報ミュージアムの基盤構築」、「徳之島の民俗芸能に関するフォーラム型情報ミュージアムの構築」及び「民博所蔵『ジョージ・ブラウン・コレクション』の総合的データベースの構築」の4つの研究プロジェクトを開始し、ソースコミュニティとの共同作業、北アリゾナ博物館（米国）、アシウィ・アワン博物館・遺産センター（米国）及び国立民俗博物館（韓国）との国際学術協定に基づく国際共同研究等を通じて、情報の多層化、多言語化を推進した。

2019年度は、「開発型プロジェクト」4件、「強化型プロジェクト」6件を実施し、5つのデータベースの公開をすすめ、標本資料8,486件（267,201レコード）の新たな文化資源情報を公開した。また、開発型プロジェクト3件においては、それぞれ国際ワークショップをソースコミュニティの人びとや研究者を招いて本館で開催した。さらに、本プロジェクトで得られた研究成果の国際発信を支援する国際発信プログラムとして、「フォーラム型情報ミュージアム資料集」を新たに2点刊行した。

「人類の文化資源に関するフォーラム型情報ミュージアムの構築」研究プロジェクト

代表者*	プロジェクト課題名	区分	期間**
齋藤玲子	民博が所蔵するアイヌ民族資料の形成と記録の再検討	開発型	2016年4月～2020年3月
飯田　卓	アフリカ資料の多言語双方向データベースの構築	開発型	2017年4月～2021年3月
寺村裕史	中央・北アジアの物質文化に関する研究 ――民博収蔵の標本資料を中心に	開発型	2018年4月～2022年3月
小野林太郎	海域アジアにおける人類の海洋適応と物質文化 ――東南アジア資料を中心に	開発型	2019年4月～2021年3月
太田心平	朝鮮半島関連の資料データベースの強化と国際的な接合に関する日米共同研究	強化型	2017年4月～2020年3月
八木百合子	中南米地域の文化資料のフォーラム型情報データベースの構築	強化型	2018年4月～2020年3月
丹羽典生	民博所蔵「朝枝利男コレクション」のデータベースの構築 ――オセアニア資料を中心に	強化型	2018年4月～2020年3月
南　真木人	ネパールのガンダルバ映像音響資料に関する情報共有型データベースの構築	強化型	2018年4月～2020年3月
日高真吾	時代玩具コレクションの公開プロジェクト	開発型	2019年4月～2021年3月
林　勲男	ミクロネシア文化資料のフォーラム型データベースの構築 ――20世紀前半収集資料を中心として	強化型	2019年4月～2021年3月

*2019年度実施分
**開発型は4年以内、強化型は2年以内

民博が所蔵するアイヌ民族資料の形成と記録の再検討
代表者：齋藤玲子　2016年4月～2020年3月

実施状況

モデル版のデータベースを運用しながら、民博が所蔵しているすべてのアイヌ資料について、関連文献等を探してつきあわせ、データの入力・修正作業を進めた。資料名についても整理を進め、その表記を統一するとともに、アイヌ語と英語および新たにロシア語を付す作業を終えた。ロシア語については、リサーチ・アシスタントの留学生が、既刊のロシア博物館所蔵アイヌ民族資料目録を参考に資料名を付した。さらに検索の精度を上げるために項目の確認や修正も進めた。あわせて、データベース画面表示や操作について改善をおこなった。

また、2019年９月15日にアイヌ関連資料を所蔵するロシアの博物館の研究者らを招聘し、国際ワークショップ「民博が所蔵するアイヌ民族資料の形成と記録の再検討――データベースとその活用」を開催し、一般にも公開した。アイヌ関連資料のデータに関する研究や公開の状況について、国内の大学、博物館、アイヌ関係団体等の研究者・職員ら共同研究員とともに、情報を交換しあい、より有用なデータベースにするための議論をおこなった。なお、同ワークショップでは、本館の外国人客員研究員と協力し、およそ100年前にアイヌ民族の調査と資料収集をおこなったハンガリー人研究者バラートシ・バログ・ベネデクの足跡をたどる調査報告もおこなった。

成果

上記の実施状況のとおり、データベース公開に向けた情報の確認調査と修正ができ、アイヌ文化に関心がある国内外の研究者や学生、アイヌ文化伝承者らと、情報交換や討論をとおして、アイヌ資料の情報のあり方について検討することができた。近年、アイヌの物質文化の研究は、地域的な分布や時代による変化を追究すべく進められており、所蔵資料の情報を開示することが不可欠になってきている。また、そうした研究の成果により、地域や時代が不詳だった資料も推定が可能になる。国際ワークショップでも、100年以上前など古くに収集された資料について、収集の背景や収集者（旧蔵者）に関する情報の重要性が確認されたところであり、そうした情報が引き出せるデータベースとして、アイヌ研究史の一部としても活用されることが期待できる。

成果の公表実績

＜ MISC ＞

齋藤玲子

2020 「アイヌ（日本）」信田敏宏編『先住民の宝』pp. 141-172, 大阪：国立民族学博物館。

＜口頭発表＞

齋藤玲子

2019年９月15日　国際ワークショップ「民博が所蔵するアイヌ民族資料の形成と記録の再検討――データベースとその活用」開催（一般にも公開）国立民族学博物館第４セミナー室

2020年１月26日　日本文化人類学会公開シンポジウム「アイヌ民族と博物館――文化人類学からの問いかけ」において「研究成果の還元と博物館活動――収蔵資料のデータベース化を中心に」発表（齋藤玲子）法政大学市ヶ谷キャンパス富士見ゲート G401教室

データベースの整備実績

資料（標本資料、映像・音響資料）件数：5,375件

レコード数：220,375件

アフリカ資料の多言語双方向データベースの構築

代表者：飯田　卓　2017年４月～2021年３月

実施状況

昨年度に構築された英語-日本語データベースを駆使して、以下の作業を継続して実施した。

1．英語および日本語による標本名、地名、民族名の見なおし

2．英語および日本語による収集者名の公開可否の精査（プライバシーの尊重など）

3．フランス語その他の言語での表示項目の準備

4．英語またはフランス語による詳細情報の付加

1.～3.に関してはもっぱら飯田が検討を進めた。以上は、本プロジェクトに関する本年度（令和元年度）のエントリーシートに記した「データベース構築」に関する作業であり、ほぼ計画どおりに遂行することができた。

4.もまた、エントリーシートの「データベース構築」に関連するものではある。しかし、フォーラム型情報プロ

ジェクトの趣旨に照らして、この作業は本館館員とソースコミュニティ（本プロジェクトの場合はアフリカ）の人びとと協力しておこなうのがよい。このため本年度は、この分野を直接に進めるよりも本プロジェクトのもうひとつの柱である「ネットワーク構築」を進めることによって、4.に述べた情報付加の準備を整え、間接的な進展をはかった。

具体的には、作業がもっとも進んでいるカメルーン資料の今後の整理作業を検討するため、2019年8月30日から9月1日にかけてワークショップ「Reactivation of African Ethnographic Objects in Japan」を開催した。これは、エントリー書類に述べられている「民族誌的情報の精緻化」に相当する。参加者の所属機関は、カメルーン国立大学とヤウンデ第一大学およびマルア大学である。ワークショップでは、カメルーン側の協力者が収集してきたデータを整理し、データベースに反映できるよう表計算ソフトに入力したほか、今後の作業の段取りを話しあった。また、カメルーン資料ほどには整理が進んでいないケニア資料の整理を進めるため、ケニア国立博物館群に所属する協力者にも参加してもらい、今後の協力関係を話しあった。両国の参加者はさらに、自国の本務にさしつかえない範囲において、2019年9月2日から10日にかけて京都その他の場所で開催されたICOM（国際博物館会議）大会に参加した。これにより、自国の文化行政事情に制約されない国際的な博物館事情を共有し、本プロジェクトの意義と展望をさらに深める話しあいをおこなった。

以上のほかに、プロジェクトメンバーの鈴木がケニアに渡航して学術交流協定を結び、今後の共同調査の基礎を整えた。同じく飯田はマダガスカルに、池谷はボツワナに渡航し、実際のデータベース共有についての具体的な打ち合わせをおこなった。

成果

1.～3.については、年度末に近づいた現在も作業を継続中である。プロジェクト最終年度にあたる2020年度後半までに作業を完了し、現在の暫定的データベースをバージョンアップして公開用データベースとする予定である。

4.については、詳細情報の項目をワークショップで討議する過程で、次のような案が提案された。すなわち、公開用データベースに非公開の領域を設け、各インフォーマントが有するモノ（標本資料）についての記憶を長期的に付加していく案である。この案にしたがえば、ひとつの標本資料に対して聞きとりをおこなった場合、インフォーマントと同じ数の「記憶カード」が生成され、研究協力者間で共有できるようになる。本プロジェクトが終了し、公開用データベースの運用が始まってからは、この「記憶カード蓄積機能」を活用することで、プロジェクト期間内に着手できなかった計画を（別途資金によって）展開させることが可能となった。

成果の公表実績

＜MISC＞

三島禎子監修

2019 『ただいまオンエアー――ソニンケ民族による文化運動と地域ラジオ』（日本語・39分50秒）国立民族学博物館ビデオテーク番組（長編）。

2019 『ただいまオンエアー――ソニンケ民族による文化運動と地域ラジオ』（日本語・10分46秒）国立民族学博物館ビデオテーク番組（短編）。

2019 『私たちが主役――ソニンケの文化週間を支える女性たち』（日本語・7分）国立民族学博物館ビデオテーク番組。

2020 『セネガルを越える人と地域ラジオ』（日本語・118分）みんぱく映像民族誌　第34集。

＜口頭発表＞

飯田　卓

2019年5月19日　日本アフリカ学会第56回学術大会 「くらしのなかの文化遺産――物質文化研究と博物館活動、そして文化継承支援を統合する試み」京都精華大学

2019年7月13日　TICAD 7パートナー事業シンポジウム「日本のアフリカ研究を総攬する」「国立民族学博物館のアフリカ研究」上智大学四谷キャンパス

データベースの整備実績

資料（標本資料、映像・音響資料）件数：20,651件

レコード数：20,651点×44項目（写真を除く）＝908,644件

中央・北アジアの物質文化に関する研究――民博収蔵の標本資料を中心に

代表者：寺村裕史　2018年４月～2022年３月

実施状況

本プロジェクトでは、広大な地域をロシア、モンゴル、中央アジアの３地域に分け、民博の中央・北アジア展示場で公開されている文化資源情報を核として、民博が収蔵している当該地域の標本資料に関する情報を高度化し、その成果をもとに中央・北アジア文化資源情報データベースを構築することを目的としている。今年度は、主に下記の調査・研究を実施した。

1）2019年９月14日（土）に、国際ワークショップ「バラートシ・バログによる1908-1914年のアムール・サハリン地域におけるツングース系諸民族の調査と民博のコレクションとの関係」（Barathosi Balogh's fieldwork（1908-1914）among the Tungusic peoples of Amur and Sakhalin and its connection to Minpaku's collection.）を民博館内（第４セミナー室）で開催した。（参加者数26名）

2）民博外国人研究員のダヴィド・ショムファイ氏は、民博収蔵のモンゴル・北東アジアを中心としたシャーマニズム関連資料の、英語訳・現地語（モンゴル語）訳ならびにアノテーション作業を実施した。（標本資料件数：96件、レコード数：96×５＝480レコード）

　またそれらの研究成果の一部を、学術雑誌SHAMANに投稿し、掲載された。

3）上記ワークショップに関連して、ショムファイ氏に加え、イストヴァン・サンタ氏［ハンガリー科学アカデミー民族学研究所　研究員］を招へいし、両者がロシア（ウラジオストック・サハリン等）においてフィールドワークを実施するとともに、その調査で得られた研究成果を、1）の国際ワークショップで発表した。

4）９月１日より外国人研究員として民博に着任（３ヶ月間の滞在）したイリーナ・モロゾワ氏［レーゲンスブルグ大学（ドイツ）南東および東ヨーロッパ史部門・研究員］が、専門の東洋史学・歴史学の知識を活かし、中央・北アジア展示場の共通テーマ「社会主義の時代」に関して、関連資料の目録を作成し、専門的な知見を付した。

5）ウズベキスタン資料を中心に、標本資料データベースから詳細情報を抽出しデータ整理を進めるとともに、現地（ウズベキスタン共和国・サマルカンド）に赴いて、連携機関や現地社会とのネットワーク作りのための調査・打合せを実施し、英語・ロシア語翻訳を研究協力者の協力を得ながら進めている。（標本資料件数：762件、レコード数：762×５＝3810レコード）

　また上記に関連して、中央・北アジア展示場に展示されている「タシュケントの民家の台所」・「タシュケントの民家（ハウリ）」を対象に、現地社会とのフォーラム実践の試験的作業として、モデルとなったタシュケントの民家の現在の姿を映像として記録するため、映像取材の交渉を家主と進めた。その結果、家主の了承を得られたため、家人へのインタビュー並びに、民家の現状を映像で記録する作業を実施した。

成果

今年度は研究計画にもとづき、国際ワークショップを実施し、日本・ロシアを含め26名の参加者を得て、活発な議論が交わされた。また、そのワークショップでの発表に関連して、ロシアにおいて現地フィールド調査を実施することで、民博収蔵のモンゴル・北東アジアを中心としたシャーマニズム関連資料の情報の高度化、多言語化を進めることができた。そうしたフィールド調査は、ショムファイ氏とサンタ氏による国際ワークショップでの成果発表につながり、さらにショムファイ氏がレビューを学術雑誌のSHAMAN（Volume 27 Numbers 1 and 2, Spring and Autumn 2019）に投稿し掲載されたことは、本プロジェクトにとっても大きな成果である。さらに、ショムファイ氏による英語訳・現地語（モンゴル語）訳ならびにアノテーション作業は、標本資料件数：96件、レコード数：96×５＝480レコードと、資料点数としての数は少ないが、将来的に本プロジェクトで構築するデータベースに反映させる予定である。

モロゾワ氏による、中央・北アジア展示場「社会主義の時代」関連資料の目録作成およびアノテーション作業は、民博の文化資源情報の高度化にもつながる成果である。民博の所蔵・展示する標本資料を熟覧し、それらの具体的な資料に基づいた研究であり、物質文化の観点から社会主義という普遍的な政治的影響のもとでローカライズされた社会主義文化の実態について学術的論文にまとめられた。その論文は、“Normativity against uniformity in late- and post-socialist Central Asia and Mongolia” という題目で、『国立民族学博物館研究報告』に投稿予定である。

ウズベキスタンでの現地調査においては、現在の家主の許可が得られたため、民博の展示場の標本資料と直結した「タシュケントの民家」に関わる映像取材と、民家内部の360°写真撮影も実施し、民博所蔵の標本資料と実際に現地でモノ（民家そのもの）が使われている様子（物質文化）とを繋ぐ貴重な情報を得ることができた。展示場に

ある民家模型を作製した30年前の事情を知るインフォーマント（家主）からインタビューできたことに加え、30年後の現在の民家（と居住する人々）の姿を映像として記録できたことは、本プロジェクトにとっても現地社会との双方向の情報のやり取りを目的のひとつとするフォーラム型の実践例として大きな成果である。また、都市開発の波にさらされ、住人が立ち退きを要求され民家そのものも壊される可能性があることが、インタビューの結果判明し、30年前と現在の現地での暮らしの様子を伝える貴重な資料として、今回の映像および展示場の資料をフォーラム型で構築するデータベースにどのように活かすのかの検討を進めている。

なお、モンゴル資料、中央アジア資料についてはデータ整理を進めることができた一方で、シベリア・極北の資料に関しては、どのようにデータ整理ならびに研究を実施していくのかについて、今後の検討課題である。

成果の公表実績

＜論文＞

寺村裕史

2020 「オアシス都市のくらし――ウズベキスタン・サマルカンドの食文化」みんぱく映像民族誌。

＜ MISC ＞

Somfai, D.K.

2019 Museum and Exhibition Reviews. *SHAMAN*, pp. 161-176. Athens: International Society for Academic Research on Shamanism.

寺村裕史

2019 「すごいよな」『月刊みんぱく』43(7): 7-20。

＜口頭発表＞

Somfai, D.K.

2019年９月14日 'Barathosi Balogh's collection and its connection to Minpaku's collection.' "Barathosi Balogh's fieldwork (1908-1914) among the Tungusic peoples of Amur and Sakhalin and its connection to Minpaku's collection" National Museum of Ethnology, Osaka

Santha, I.

2019年９月14日 'About Barathosi Balogh's fieldwork (1908-1914).' "Barathosi Balogh's fieldwork (1908-1914) among the Tungusic peoples of Amur and Sakhalin and its connection to Minpaku's collection" National Museum of Ethnology, Osaka

データベースの整備実績

資料（標本資料、映像・音響資料）件数：858件

レコード数：4,290件

海域アジアにおける人類の海洋適応と物質文化――東南アジア資料を中心に

代表者：小野林太郎　2019年４月～2021年３月

実施状況

本プロジェクトの目的は、東南アジア島嶼部を中心とする海域アジアとその周辺海域を対象とし、本館が所有する人類の海洋適応に関わる物質文化のデータベース化、およびこのデータベースを用いた関係諸国の専門家との海洋文化研究の発展、ネットワーク連携の強化となる。この目的達成の下、今年度はまず⑴海域アジアとその周辺島嶼域の海洋文化（漁撈・航海・船舶技術）に関する本館の資料を総チェックし、日本語と英語による資料台帳の作成を進めた。その結果、インドネシア、マレーシア、フィリピンで収集された800点以上の資料を台帳化できた。さらに東南アジア大陸部における類似性の高い資料についても台帳化を進めた。

一方、国内外における海洋文化の専門家による本館資料とそのデータベース化に関しては、国立科学博物館、沖縄県立博物館・美術館、沖縄海洋文化館、南山大学人類学博物館に所属する専門家を招き、様々な有益となるアドバイスをもらったほか、海洋文化に関わる国内研究者ネットワークの強化を行った。そのうえで、2020年１月からはマレーシアの国立博物館、アダット博物館、マレーシアプトラ大学、フィリピンのフィリピン国立博物館、フィリピン大学を訪ね各国の代表的な海洋文化研究の専門家と作成したデータベースも使用しつつ協議したほか、各機関と連携強化を進めた。さらに2020年２月18から22日にかけて国立民族学博物館にてマレーシア、インドネシア、フィリピンの海洋文化に関わる専門家、および日本国内の専門家を招聘した国際ワークショップ「Maritime

Adaptation and Material Culture in Southeast Asia」を開催し、東南アジアの海洋文化を専門とする研究者や研究機関のネットワーク構築を目的とした発表や情報交換を行ったほか、本プロジェクトで対象としている本館の所蔵資料を実見してもらい、直接的な意見や関連情報の提供を受けた。これにより現時点のデータベースをアップデートすることが可能となったほか、今年度中に完成したデータベースの検討とそのさらなる発展を目的とした相互的な意見・情報交換も実施できた。

成果

今年度における研究成果には、まず⑴国立民族学博物館が所有する、東南アジア島嶼部における海洋文化関連の資料（漁具・船関連）をほぼすべて英語化し、データベースのウェブ版デモまで作成できた点があげられる。マレー語を含めた現地語の使用に関しては、資料の現地名の項目において反映させることができた。さらに⑵このデータベースを軸にインドネシア、マレーシア、フィリピンの専門家を交え、資料の実見に基づく検討と海洋文化研究の推進も目的とした国際ワークショップを2020年２月に開催し、データベースおよび研究の両方をさらに発展できた点があげられる。特に資料の現地語名や素材のチェックという点で、現時点でのデータベースに掲載されていた現地語名で修正すべき資料の存在や、現地語名が新たに判明した資料を確認することができた。また素材については、データベースには記載なしの資料が多かったが、今回のワークショップによりほぼすべての資料の素材同定を行うことができた。そのほか本館が所蔵するマレーシアで収集された舟標本が現地国においても希少で極めて価値の高いものであることも確認することができた。関連性の高い舟標本はマレーシア国立博物館にも所蔵されていることを2020年１月に小野がマレーシアを訪問した際にも確認したが、両資料は今後の比較研究の上でも貴重な資料となる可能性が高い。この新たな知見を踏まえ、マレーシアの専門家とは共同研究を進め、本プロジェクトの期間中、あるいは終了後に関連標本を軸とした展示の開催も検討中である。フィリピン関連資料についても、2020年１月に現地を訪問し、専門家を多く擁するフィリピン国立博物館およびフィリピン大学との連携強化を進めることができたほか、両機関の専門家が２月に開催した国際ワークショップに参加し、本館のデータベースのアップデートに貢献してくれた。一方、本館においてフィリピンで収集された海洋文化関連の標本数は他地域に比べかなり少なく、まだ限定的であることも確認できた。これを踏まえ、今後どのような民族誌資料を標本として収集する必要があるかについて協議し、現地専門家の協力を得つつ、新たな標本の収集についても計画していく予定である。インドネシアに関しても２月の国際ワークショップ後、2020年３月初旬にジャカルタ市内にある２つの海洋博物館を訪問し、館長を交えた協議を行うことができた。本館におけるインドネシアで収集された海洋文化関連の標本は少なくないが、舟標本に関してはかなり限定的である。これに対し、インドネシアにおける両博物館は豊富な舟標本を所蔵しているほか、専門家もおり、両機関との連携を強化しつつ、新たな舟標本の収集も視野にいれた共同研究を予定している。なお当初の予定では、今年度の研究目的は⑴までを目安としていたため、⑵まで達成できたことで、研究目的は十二分に達成できたと考えている。また前倒しで最初の国際ワークショップを本年度中に開催できたことで、次年度はより多角的な検討を展開できる。さらに対象地域も東南アジア島嶼部から大陸部、また海洋文化の点では密接に関連するオセアニア域における資料も対象とできる十分な余地があり、さらなる発展とプロジェクトの拡大を期待できる。

成果の公表実績

＜論文＞

Fuentes, R., R. Ono, N. Nakajima, et.al.

2019 Technological and Behavioural Complexity in Expedient Industries: The Importance of Use-wear Analysis for Understanding Flake Assemblages. *Journal of Archaeological Science* 112（doi.org/10.1016/j.jas. 2019）.［査読有］

Fuentes, R., R. Ono, N. Nakajima, et.al.

2020 Stuck within Notches: Direct Evidence of Plant Processing during the Last Glacial Maximum in North Sulawesi. *Journal of Archaeological Science: Report* 30（doi.org/10.1016/j.jasrep. 2020.102207）.［査読有］

小野林太郎

2020 「環境変化からみた環太平洋圏におけるヒトの移住史――ウォーレシア・オセアニアの事例から」『環太平洋文明研究』4: 76-88。［査読有］

＜分担執筆＞

Ono, R. S. Hawkins, and S. Bedford.

2019 Lapita Maritime Adaptations and the Development of Fishing Technology: A View from Vanuatu

Bedford, S. and M. Spriggs eds, Debating Lapita: Chronology, Society and Subsistence, pp. 415–438. Canberra: ANU Press［査読有］

小野林太郎

2019 「日本への人類移住と南方起源説――その魅力と可能性」石森大知・丹羽典夫編『太平洋諸島の歴史を知るための60章――日本とのかかわり』pp. 21–24，東京：明石書店。

2020 「オセアニアへの人類移住と海洋適応」秋道智彌・印東道子編『ヒトはなぜ海を越えたのか――オセアニア考古学の挑戦』pp. 70–87，加賀：雄山閣。

2020 「オセアニアの釣り針」秋道智彌・印東道子編『ヒトはなぜ海を越えたのか――オセアニア考古学の挑戦』pp. 131–138，加賀：雄山閣。

＜口頭発表＞

2019年11月16日 「東海地方と水中の文化遺産」『第３回とよはし歴史座』豊橋市民センター

2019年11月17日 「インドネシアの貝塚遺跡と完新世期における人類の貝利用」『東南アジア考古学会大会』早稲田大学

2019年11月30日 「海からみたアジア・オセアニアの人類史」『明治大学博物館友の会・古代東北アジアと日本研究会』豊島区民センター

2019年12月14日 「東南アジアの不定形剥片とその機能――使用痕分析から見えてきた人間行動と技術の複雑性」『文部科学省科学研究費補助金・新学術領域研究2016–2020：パレオアジア文化史学第８回研究大会』国立民族学博物館

2019年12月21日 「海の人類史――東南アジア・オセアニア考古学の最前線」『第498回みんぱくゼミナール』国立民族学博物館

2020年02月18日 'Introduction of Maritime Adaptation and Material Culture in Southeast Asia.' International Workshop "Maritime Adaptation and Material Culture in Southeast Asia", National Museum of Ethnology, Osaka

データベースの整備実績

資料（標本資料、映像・音響資料）件数：800件

レコード数：8,000件

朝鮮半島関連の資料データベースの強化と国際的な接合に関する日米共同研究

代表者：太田心平　2017年４月～2020年３月

実施状況

今年度は、前年度までに修正し、カテゴリー分けを追加した標本資料のメタデータを、ウェブブラウザ上で閲覧できるデータベースとするために、プログラミング作業にまわしつつ、両博物館の技術者チームや事務職チームと、主に２種類の議論を重ねた。

第１に、メタデータとデータベースの運営体制について、両博物館の事務職チームと議論を重ねた。特に慎重さを要したのは、他の博物館が所管するメタデータを公開しつづけるための体制であり、もっとも重要だと明らかになった点は、データベースが運用に移ったあと、内容やサイバー・セキュリティについての責任を、誰がとっていくかであった。

第２に、研究者が求めるデータベースの質と、技術者が実現可能なプログラミングの量を調整するため、両博物館の技術者チームと一連の議論を重ねる必要が生じた。特に、プロジェクトチームが作成して標本資料のメタデータに適用してきたカテゴリー分けは、技術者チームにとってプログラミングが煩雑すぎると明らかになった。このため、カテゴリー数を減らしつつ再構築するとともに、全部のメタデータを作成しなおすこととした。

また、第４四半期に計画していた国際的な活動は、諸事情によりキャンセルせざるをえなかった。

成果

運営体制の問題は解決された。プロジェクトチームの当初計画では、両博物館がすべてのメタデータとプログラミングを共有し、それぞれに管理運営するというものだったが、それは断念することとなった。理由は、他の博物館のメタデータに関する内容に関する責任を、どちらの博物館も取れないからであり、かつメタデータに含まれる日本語の内容はアメリカ自然史学物館（以下「AMNH」）で管理できないからである。これらの課題への対策は以

下のとおりに決まった。

(1) まず本館がデータベースを開発して本館のサーバーで公開し、AMNHは状況をみる。

(2) メタデータはつねに暫時的な研究成果であるという認識のもと、修正したメタデータは両博物館のあいだで交換する。

(3) AMNHは日本語のメタデータを所管することも使用することもしない。

なお、この解決策にいたる過程では、以下に示す他の3つの方式も熟考し、討議した。

- 英語のデータベースはAMNHが、日本語のデータベースは本館が運営し、韓国語のデータベースは暫定的にどちらか、ないし両方の博物館が運営する。
  (→メタデータの内容に関する責任の所在が不明確になるため、不適切と判断された。)
- データベースを検索するたびに、それぞれの博物館のサーバーに保存されたメタデータを読み込み、統合して表示するように、プログラミングを開発、運営する。
  (→サイバー・セキュリティを脆弱にするリスクがあると判明し、許可されなかった。)
- それぞれの博物館がクラウド機能を使って同じメタデータを使用できるよう、メタデータを修正する権限をもつユーザーアカウントを作り、その修正ログも共有する。
  (→法的に有効なアカウント約款を定める必要が生じることがわかり、回避した。)

以上のとおり精緻に検討したうえで採用した方式に沿って、改めてプログラミングに関する検討をプログラムチームと重ねた。本プロジェクトチームは、両博物館の標本資料を4階層の入子構造によりカテゴリー分類することを考え、合計6,000件以上にのぼる標本資料にタグづけをおこなってきたが、プログラムチームが作業可能と判断した入子構造は3階層であった。このため、(1)カテゴリー全体を3階層のものに作り替える作業、(2)従来のカテゴリーに準拠して標本資料ごとにタグ付けしたデータを消し、新しい3階層のタグをつけ直す作業の2種類の作業が必要となった。

成果の公表実績

太田心平

2020 「改良韓服は語る」『みんぱく e-news』224：巻頭コラム。

Ota, S. and M. Petersen

2019 Rethinking the Relationships between Real Societies and Cyberspaces. In IUAES 2019 Inter-Congress "World Solidarities" Proceedings. Poznan: Adam Michiewicz University.

データベースの整備実績

資料（標本資料、映像・音響資料）件数：114件

レコード数：3,630件

中南米地域の文化資料のフォーラム型情報データベースの構築

代表者：八木百合子　2018年4月～2020年3月

実施状況

プロジェクト最終年度にあたる本年度は、以下の作業をすすめた。

(1) 昨年度から進めてきたアメリカ展示場の中南米関連の標本資料を中心にした400点の資料のデータベースに、追加資料としてアンデスの民族資料395点の情報を加えた。

(2) 情報の高度化の一環としておこなっている制作者による資料情報の付加作業として、新たに35点のコメント情報を追加した（中米9点、南米26点）。

(3) 南山大学および民博に所蔵されているアンデス民族学関連の画像コレクションのなかから選別した、各資料にまつわる地域や制作に関する画像を紐づけることで、背景情報を強化した。

(4) 資料の基本情報等については、日本語のほかに、英語とスペイン語への翻訳をおこない、3言語対応のデータベースを構築した。

(5) アクセシビリティを強化するために、データベースには、資料名や地域、民族での検索のほかに、制作者名とその関連する家系による検索等、本データベース内容に特化した検索機能を追加するなどの工夫を加えた。

(6) 試験版のデータベースをもとに、民芸資料の制作にたずさわる現地コミュニティの人びとを集め「ワークショップ：ペルーの民衆芸術（*Taller sobre la Artesanía Peruana*）」（2020年1月13日）を、カウンターパー

ト機関である文化芸術社会協会（Instituto Cultural Teatral y Social）の関係者の協力のもとペルーで実施した（参加者：職人32名、関係者６名）。その際、現地の人びとの活用を促すために、操作性・利便性等について確認をおこなったほか、資料に関する新たなコメント等も聴取した。

これらの結果を踏まえ、試験版データベースの修正と補填作業をおこない、正式な公開・運用に向けたデータベースの構築を実現した。最終年度は、資料の整理や画像の取り込みに加えて、多言語に及ぶ内容の整合性のチェックなど膨大な作業があり、多くの手が必要となるため、RA やアルバイトが常時つくことで作業の効率化につながった。特に語学堪能な留学生や若手の研究者に作業に加わってもらうことで機動力が高まった。

成果

(1) 本プロジェクトでは、当初予定していた展示場の関連資料のほかに、アンデス関連の民族資料の情報も追加し、目標を上回る点数の作業を完了した。特に、アンデスの情報については、現地のコミュニティとの協働により、資料の制作者である職人たちから資料の情報のみならず、制作や使用、モノに込められた世界観等に関する情報を集め、民族誌的に厚みのあるデータベースの構築を実現した。また、日本語と英語のほかに、現地の公用語であるスペイン語にも対応した多言語型のデータベースの構築を実現した。

(2) 本プロジェクトと同時期に「地域研究画像デジタルライブラリ」プロジェクトで整理した画像資料（本館の名誉教授が1960年代～2000年代に撮影したアンデスの民族学調査の画像コレクション）を活用し、収集当時の情報、使用、制作に関する画像を背景情報として加えることで、アンデス地域の民族学研究のさまざまな資料を集約するプラットホームを築きあげた。また、画像を多用することで、一般のユーザーの理解促進に向けたさまざまな情報も取り込み、初学者にも現地の状況や制作状況などが分かるように仕上げ、今後、学生のアクティブラーニング等でも活用してもらうことを想定して文献情報等も可能なかぎり加えた。

(3) プロジェクト期間内には、資料の制作にたずさわる種々の職人を集めたワークショップを現地機関の協力のもと実施した。その際、実際にデータベースを試験的に活用してもらい、意見等を聴取することで機能強化をおこない、フォーラム型情報データベースとしての基盤を整備することができた。

(4) 上記の作業によって、当初の計画で予定していた、情報の高度化、多言語化、アクセシビリティの強化、フォーラム化についてすべて達成することができた。また、特に、フォーラム型の観点からは、研究機関だけでなく、ソースコミュニティの人びとや実際の資料の制作者である民衆芸術家たちから積極的な支援も得ることができたことは大きな成果である。今後、資料（作品）に関する一次情報の提供者でもある彼らから、コメント機能を活用してさらなる情報を得るだけでなく、ワークショップなど相互交流の機会を通じて、彼らの実際の語りや制作場面について、映像撮影等を視野に、新たな情報も追加していくことが可能になると期待できる。

成果の公表実績

＜口頭発表＞

八木百合子

2019年11月13日　'Utilización del Recursos Culturales Andinos: Construcción de Base de Datos Interactivos.' Simposio Internacional "50 años de Antropología Japonesa en el Sur de los Andes: Recorridos, Etnografías y Valoración Cultural", Museo Histórico Regional del Cusco, Peru

2020年1月17日　'Base de Datos Interactivos: Colección del Museo Nacional de Etnología del Japón.' "5 Taller sobre la Artesanía Peruana", Instituto Cultural Teatral y Social, Peru

データベースの整備実績

資料（標本資料、映像・音響資料）件数：795件

レコード数：25,300件（推計）

民博所蔵「朝枝利男コレクション」のデータベースの構築――オセアニア資料を中心に

代表者：丹羽典生　2018年４月～2020年３月

実施状況

本館所蔵の朝枝利男コレクションにおける写真資料の地域ごとの分類を行った。具体的なデータとしては、前年度に十分対応していなかったトンガ、キリバス、ソロモン諸島のレンネル・ベロナ州及びマライタ州のそれぞれに

ついて当該地域に研究する専門家に依頼して情報の精査と追加を行った。とくにレンネル・ベロナ州については、本館朝枝コレクションと重なるハワイのビショップ博物館の朝枝撮影写真を持参して、1960年代から70年代のレンネル・ベロナ州にて考古学的調査を行っていた方に精査して頂いた。

コレクション作成者である朝枝利男に関する基本情報の調査を行った。朝枝利男コレクションに収蔵されている４冊の手書きの日記について、読解とタイプに起こす作業を行った。また、朝枝利男という人物に関する情報を探るべく、長崎県立図書館での調査を１月に行った。

世界の他の博物館及びソースコミュニティとの関係としては、２月にはカリフォルニア科学アカデミーに所蔵されている朝枝利男コレクションの資料の精査を行った。共同で開催予定のシンポジウムの打ち合わせと、両博物館の収蔵資料を合わせて「朝枝利男の生涯と芸術」に関する画集として公開できないかも検討した。太平洋地域の博物館であるフィジー国立博物館にて本館朝枝利男コレクションに混在しているポストカード資料を同定するための情報収集を、ソロモン諸島国立博物館で2020年に開催予定としている同博物館での展示内容の検討、展示場の確認、協定書の作成などの作業を進めた。

成果

データベースとしては、サモアの日系人、ソロモン諸島レンネル・ベロナ州の文化と儀礼の詳細、クック諸島の探検の経路と撮影場所の詳細情報を収集した。展示として、国立民族学博物館コレクション展示「朝枝利男の見たガラパゴス――1930年代の博物学調査と展示」の開催、第352回企画展示「出会い、さまざまなカタチ」（慶応義塾大学図書館）にても資料の一部を展示した。本プロジェクトで精査された資料は、刊行物として『月刊みんぱく』２月号の特集、「みんぱく e-news」223及び「*MINPAKU Anthropology Newsletter*」49の記事、『季刊民族学』の関連論考、国立民族学博物館研究報告』44巻４号にて論文を掲載した。またソロモン諸島国立博物館での展示を引き続き準備している。

本プロジェクトを通じて、デジタル技術の高度化やウェブ上での情報公開の進展で可能となった資料の収集・閲覧によって、本コレクションに対する基礎的情報を広く付加した。それにより、いまでは現地社会の人々にさえ忘れられていた文化の復元が一部可能となった。ソロモン諸島の刺青や儀礼、クック諸島の伝統的遊戯などは、世界各地の博物館資料や学術書の片隅にあったデータをつなぎ合わせることで、過去の姿をある程度理解できるようになった。これらの点については、展示や本プロジェクトの共同研究員との論集の執筆などを通じて今後公開を検討していきたい。

調査技術的な可能性の側面を２点指摘したい。まず、博物館資料のなかの生物学的資料の活用である。朝枝利男コレクションの生物関係の写真や水彩画には採集日時・場所が明記されているものが多い。それらの情報をもとに地図を作成すれば、過去の生物の形態や生態学的分布を示す興味深い資料ともなり得よう。こうした研究は他の博物館の同様な資料からも試す価値があると思われる。カリフォルニア科学アカデミーと魚類画を中心とする図録の刊行を計画している。

もうひとつは、風景写真資料に写り込まれている風景をデジタルカメラで再度撮影する調査手法である。こうして過去の写真資料にGPS情報を付加することは、興味深い調査手法になる可能性がある。調査撮影者の移動経路を具体的に同定し地図に落とせるのみならず、画像に収められた資料を景観史、生態学資料として再利用する際にも格段に役立つ基礎的情報となりえる。この点については、先に言及した共同研究員との論集のなかの成果として反映できたらと考えている。

成果の公表実績

＜分担執筆＞

石森大知・丹羽典生

2019 「朝枝利男の見た太平洋」『太平洋諸島の歴史を知るための60章――日本とのかかわり』pp. 127-129, 東京：明石書店。

＜論文＞

丹羽典生

2020 「朝枝利男の見たガラパゴス」『季刊民族学』171：86-94。

2020 「1930年代のアメリカにおける私的探検の考察――朝枝利男が参加した探検隊の旅程と経路の分析から」『国立民族学博物館研究報告』44(4)：625-682。

＜ MISC ＞

丹羽典生

2020年 「朝枝利男とガラパゴス」『月刊みんぱく』44(2): 1－2。
2020年 「コレクション展示『朝枝利男の見たガラパゴス――1930年代の博物学調査と展示』の開催」『みんぱくe-news』223：巻頭コラム。

＜口頭発表＞

丹羽典生

2019年6月22日 「太平洋関係の朝枝利男写真資料の時代的位置づけ及び特色」フォーラム型情報ミュージアムプロジェクト『民博所蔵「朝枝利男コレクション」のデータベースの構築』研究会、国立民族学博物館

データベースの整備実績

資料（標本資料、映像・音響資料）件数：2,259件
レコード数：5,212件

ネパールのガンダルバ映像音響資料に関する情報共有型データベースの構築

代表者：南 真木人　2018年4月～2020年3月

実施状況

1）第2回研究会を民博で開催し（2019年3月31日）、森本泉「ガンダルバの『伝統文化』再考」と南 真木人「ツーリズムとの接続と離陸」の発表、企画展『旅する楽器 南アジア、弦の響き』見学と寺田吉孝による解説、2019年に制作した民族誌映画『カトマンドゥのサーランギ奏者たち』（76分42秒）の試写を行い、ガンダルバ研究の最新の知見に関して議論した。
2）民博で開催した「音楽の祭日」（2019年6月23日）に出演したバンチャ・パリワールのサーランギ演奏をデータベースのコンテンツ素材用に映像取材した。あわせて同日、バンチャ・パリワールのメンバーに上述の映画を観てもらい意見交換をした。
3）調査対象地バトゥレチョールの3名の演奏家が来日し、長野県駒ヶ根市の「みなこいワールドフェスタ」（2019年10月21日）で公演したのを受け、調査と映像取材を実施した。
4）藤井知昭名誉教授を隊長とする民族音楽調査隊が1980年と1982年にネパールで採録したサーランギ演奏のカセットテープ複製が、民博に所蔵されていたことが「音響資料目録データベース」の検索から判明した。それらのデジタル化を実施し、演奏者・曲目ごとに整理しコンテンツを作る作業を進めた。並行して、藤井名誉教授の国際文化研究所を寺田吉孝と伴に訪問し、デジタル化した音源データ、整理表を提供したうえで、それらをデータベースに利用し公開する許諾を得た。データベースは現在も作成中である。
5）『季刊民族学』163号の特集「ヒマラヤの吟遊詩人――ガンダルバの現在」の論稿を基に英語での出版に向けて、外注して翻訳した原稿を各執筆者が加筆修正している。

成果

諸般の事情でデータベースの主要なコンテンツとなる過去の音源と写真の入手が能わず、作業は滞っていた。2019年11月に、共同研究員からの指摘で、1980年と1982年にネパールで藤井名誉教授等が採録したサーランギ演奏のカセットテープ複製が民博に所蔵されていたことが判明し、資料のデジタル化と整理を開始できた。1982年の音源を主として、約50人の演奏家によるのべ約190曲のコンテンツを持つデータベースを作成し、公開できる見込みである。

成果の公表実績

＜映像制作＞

南 真木人監修

2019 『カトマンドゥのサーランギ奏者たち』（日本語・76分42秒）みんぱく映像民族誌　第35集。

南 真木人・藤井知昭監修

2020 『みんぱく映像民族誌 第35集 ネパールのサーランギ音楽』（2019「カトマンドゥのサーランギ奏者たち」約77分、1984「サーランギを追って」60分所収）

＜口頭発表＞

南 真木人

2019年11月16日　「ヒマラヤの吟遊詩人――ガンダルバから見るネパールの変化」協力隊ネパール会主催『公開ネパール応援セミナー』あいも文化交流会館

2020年１月15日　みんぱく映像民族誌シアター「ネパールの楽師ガンダルバ」において『ネパール 楽師の村 バトゥレチョールの現在』91分31秒上映・解説、シアターセブン

2020年３月７日～８日　国際シンポジウム「学際研究とフォーラム型情報ミュージアム」に、バトゥレチョールから２名の当事者および同地において研究してきたトリブバン大学PNキャンパスの研究者を招へいし、二つのセッションを担当し口頭発表した。

データベースの整備実績

資料（標本資料、映像・音響資料）件数：楽曲約190点、映像約10点、写真約100点

レコード数：約300点

時代玩具コレクションの公開プロジェクト

代表者：日髙真吾　2019年４月～2021年３月

実施状況

今年度は、時代玩具コレクションのデータベース作成にあたり、研究協力者との研究会を開催し、データベースの表記項目と玩具の形態分類をおこなうとともに、時代玩具コレクションの分類作業を進めた。これらの分類作業に伴う研究会は、基幹研究「日本列島における地域文化の再発見とその表象システム」と連携しながら実施した。また、玩具の遊び方に関する現地調査をおこない、玩具データベースに必要な表記項目の与件として、主な使用者と遊び方の要素を加える必要があることを確認した。今年度に整理した表記項目と形態分類について以下に示す。

１．玩具の形態

⑴　人形玩具：人を模した玩具。

⑵　戦争玩具：戦争に関する玩具。

⑶　乗物玩具：乗物に関する玩具。

⑷　動力玩具：動力を利用して遊ぶ玩具。

⑸　マスコミ玩具：マスメディアに登場し、人気となったキャラクターやそれに関した玩具

⑹　紙製玩具：紙を素材としたさまざまな玩具。

⑺　めんこ：めんこには素材により、泥めんこ、鉛めんこ、紙めんこがあり、もっともよく知られたものは紙めんこである。遊び方は地面に掘った小さな穴に投げ入れる穴一、対戦相手のめんこをひっくり返す「起こし」といった遊びとともに、めんこ自体をコレクションしていくという遊び方がある玩具。

⑻　カルタ：絵や歌の文字を書いた長方形の札、絵や歌に合わせて取り合うカード遊びのひとつの玩具。

⑼　双六：さいころを互いに振り出し、自身が出した采の目にしたがってコマを進め、最初に駒を進め終わった方が勝ちとなる玩具。

⑽　着せ替え：人形に紙や布の衣装などを着せ替えて遊ぶ玩具。

⑾　ぬり絵：輪郭が描かれた台紙に好きな色を塗って遊ぶ玩具。

⑿　ビー玉・おはじき玩具：ガラス製の玉で、遊戯や観賞に用いる玩具。

⒀　光学玩具：光の性質を利用して遊ぶ玩具。

⒁　水遊び玩具：水を用いて遊ぶ玩具。

⒂　お面の玩具：顔にかぶって遊ぶ玩具。

⒃　ボード（盤上）玩具：ボード（盤）の上に置いたコマやカードを動かしたり、取り除いたりする玩具。

⒄　ものづくり玩具：玩具を構成する部品を組み立てたり、作ったりして遊ぶ玩具。

⒅　ごっこ玩具：ごっこ遊びで用いる玩具。

⒆　スポーツ玩具：一定のルールにのっとって身体を動かし、勝敗を競ったり、楽しんだりする玩具。

⒇　お土産玩具：お土産品の玩具

㉑　教育玩具：子どもの学習の助けになる玩具。

㉒　駄菓子屋玩具：駄菓子屋で売られている玩具。

㉓　楽器玩具：楽器を模したり、音が鳴ったりする玩具。

㉔　玩具関連資料Ⅰ（子ども服・装身具）：子どもの好きなキャラクター等が描かれた子ども用の服や関連する装身具。

㉕　玩具関連資料Ⅱ（文献・写真等）：時代玩具コレクションの文化財的価値を示す歴史資料。
㉖　その他：上記以外の玩具等。

2．主な使用者
⑴　男子
⑵　女子
⑶　男女共用

3．遊び方
⑴　対戦：相対して競い合う遊び方。
⑵　ごっこ遊び：何かになったつもりになる遊び方。
⑶　鑑賞：玩具を飾って楽しむ遊び方。
⑷　一人遊び：一人で楽しむ遊び方。
⑸　ものづくり遊び：ものを作る遊び方。

4．主に遊ばれる季節
⑴　正月
⑵　ひな祭り
⑶　端午の節句
⑷　クリスマス
⑸　通年

5．製造年代
製造された年代

6．主要素材
⑴　植物由来：木製、木の実、漆器、竹製、紙製、カーボン紙、ゴム、その他植物
⑵　皮革由来：皮製、革製
⑶　金属由来：ブリキ、銅、鉄、アルミ、錫、アンチモニー、ダイキャスト（超合金）、その他金属
⑷　土由来：土、素焼き、陶器、磁器、粘土、
⑸　貝由来：貝、胡粉
⑹　石由来：石、石膏、磁石
⑺　ガラス由来：ガラス、色ガラス、鏡
⑻　人工素材由来：合皮、化学繊維、セルロイド、プラスチック、ビニール、塩化ビニール、ソフトビニール、写真、フィルム、セロファン、火薬
⑼　布由来：綿、麻、絹、毛糸

7．サイズ

8．備考
補足情報

成果

現在、上記の項目について各玩具の分類作業を進めるとともに、各項目の説明文について研究協力者と最終確認をおこない、英訳に向けた準備をおこなっている。この点は、おおむね計画通りに作業が進んでいると判断している。また、2019年12月22日に大東市歴史民俗資料館で開催された「近畿民具学会2019年度大会」において、「フォーラム型情報ミュージアム『時代玩具コレクションデータベース』について」と題し、本プロジェクトについて研究発表をおこない、表記項目等の内容について意見交換をおこなった。この際、時代玩具コレクションの分類については、収集者である多田敏捷氏の分類基準のみに準じた場合、女子の玩具が埋没してしまう課題があり、今回の資料分類はその点を解決できる分類になっているのではないかという評価を得た。ただし、時代玩具コレクションそのものが男子向けのものが多いことは事実であり、今後の課題として女子用玩具の収集も視野に入れ、時代玩具コレクションの拡充を図ってはとの意見がだされた。この点については、今後の玩具研究の進展において検討を進めていく課題とした。

成果の公表実績

＜口頭発表＞

日髙真吾
2019年12月22日　「フォーラム型情報ミュージアム『時代玩具コレクションデータベース』について」大東市立歴史民俗資料館

データベースの整備実績
資料（標本資料、映像・音響資料）件数：3,155件
レコード数：31,550件

ミクロネシア文化資料のフォーラム型データベースの構築――20世紀前半収集資料を中心として
代表者：林　勲男　2019年４月～2021年３月

実施状況
1）国内共同研究員４名に対してフォーラム型情報ミュージアムの概要説明と既に公開されているデータベースを紹介した後、プロジェクト遂行上の役割分担と、標本資料およびアーカイブ資料の確認作業をおこなった（2019年６月28日）。
2）共同研究員２名が、パラオ共和国にて標本資料に関する情報の精査と13名からの聞き取りによる情報収集をおこなった（2019年８月13日～22日）。
3）共同研究員１名が、マーシャル諸島関連の標本資料について情報の精査をおこなった。
4）対象とするミクロネシア標本資料に関して、染木煦著『ミクロネシアの風土と民具』、東大情報カード、『内外土俗品圖集』から関連情報を抜粋して整理した。
5）染木煦アトリエ（立川市）にて、1934年の南洋群島旅行時のスケッチブックと写真アルバムの撮影をおこなった（2019年７月28日～31日）。
6）染木煦ご遺族のご厚意により、アルバムに張られた絵はがきを民博にて撮影し、染木が各絵はがき裏面に残したメモを記録した。
7）パラオ共和国のPalau Conservation Societyより１名を招へいし、標本資料の熟覧を実施した（2020年２月中旬予定）。

成果
本年度は、ミクロネシア標本資料のデータの精査と新たな情報の収集とその整理をおこなった。先ず共同研究員２名がパラオ共和国にて、本プロジェクトのための人的ネットワークを構築するとともに、民博のミクロネシア・コレクションに関する現地名を含めた情報を収集した。ミクロネシア・コレクションの情報収集に関しては、コロール州、アイライ州、ガルムヌグイ州、およびソンソロール州（在コロール事務所）にて、13名の人びとに聞き取りを行った。

資料の中には、写真は残っていても物自体は失われたという例もあり、民博所蔵のコレクションの重要性が浮かび上がった。ベラウ（パラオ）国立博物館の館長を長年勤め、現在国務大臣であるFaustina Rehuher-Marug氏からは、ドイツの博物館にもドイツ統治下に収集されたパラオの物質資料があることをふまえ、「私たちとしては、ドイツや日本の博物館にどんなパラオの資料があるかを具体的に知りたい。そして、それらに私たちがいかにアクセスでき、将来的にどのようなプロジェクトができるか、共に考えたい」という意見が出され、本プロジェクトへの大きな期待が示された。

また、本プロジェクト国外協力者のBernie Ngiralmau氏（2020年２月に招聘予定）は、パラオの文化遺産について若い世代が学ぶことの重要性と楽しさを深く認識しており、本プロジェクトにおいてミクロネシアの他の島の人々ともに民博の資料に触れ、そこから新たな学びの可能性をミクロネシア社会に開いていくことに意欲的であることが示された。以上のようにパラオでは、本プロジェクトへの期待が示され、研究および社会還元への協力を得られる体制を作ることができた。

ミクロネシア標本資料のうち325点は、画家の染木煦が1934年の巡遊の際に収集したものであり、染木の関連資料をアトリエでの調査によって発掘すると共に、著作物から関連情報を抜粋・整理し、標本資料との照合作業をおこなった。1930年代には、当時の南洋群島を訪れる若手芸術家が少なくなく、相互の交流だけでなく、土方久功や学者の杉浦健一らとも親交があったことがわかった。さらに民博が所蔵する東大情報カード、『内外土俗品圖集』からミクロネシアの資料に関する情報を抜粋し、整理した。

成果の公表実績

本年度は研究協力体制を作ることと、民博所蔵ミクロネシア標本資料の情報の精査、そして関連情報の収集と整理をおこない、未だ公開までには至っていない。

データベースの整備実績

資料（標本資料、映像・音響資料）件数：標本資料567件

レコード数：1,268件

共同研究

2019年度の応募・採択状況

課題１：文化人類学・民族学および関連諸分野を含む幅広い研究

課題２：本館の所蔵する資料に関する研究

研究会の区分			2019年度			
研究代表者		課題区分	申請	採択	継続	合計
一般	館内	課題１	5	4	2	7
		課題２	0	0	1	
	客員	課題１	0	0	1	2
		課題２	0	0	1	
	公募	課題１	3	1	10	12
		課題２	2	1	0	
若手		課題１	3	2	3	5
		課題２	0	0	0	
計			13	8	18	26

共同研究課題一覧

○印は公募による実施課題、●印は若手による実施課題

研究課題	研究代表者	課題区分	研究期間
グローバル化時代のサブスタンスの社会的布置に関する比較研究	松尾瑞穂	1	2015-2020
捕鯨と環境倫理	岸上伸啓	1	2016-2020
物質文化から見るアフロ・ユーラシア沙漠社会の移動戦略に関する比較研究	縄田浩志	2	2016-2020
音楽する身体間の相互作用を捉える――ミュージッキングの学際的研究	野澤豊一	1	2016-2020
現代日本における「看取り文化」の再構築に関する人類学的研究	浮ヶ谷幸代	1	2016-2020
●テクノロジー利用を伴う身体技法に関する学際的研究	平田晶子	1	2016-2020
博物館における持続可能な資料管理および環境整備――保存科学の視点から	園田直子	2	2017-2021
○人類学／民俗学の学知と国民国家の関係――20世紀前半のナショナリズムとインテリジェンス	中生勝美	1	2017-2021
○文化人類学を自然化する	中川　敏	1	2017-2021
○ネオリベラリズムのモラリティ	田沼幸子	1	2017-2021
●モノをとおしてみる現代の宗教的世界の諸相	八木百合子	1	2017-2020
○オセアニア・東南アジア島嶼部における他者接触の歴史記憶と感情に関する人類学的研究	風間計博	1	2018-2022
○伝統染織品の生産と消費――文化遺産化・観光化によるローカルな意味の変容をめぐって	中谷文美	1	2018-2022
○心配と係り合いについての人類学的探求	西　真如	1	2018-2022
○統治のフロンティア空間をめぐる人類学――国家・資本・住民の関係を考察する	佐川　徹	1	2018-2022
○グローバル時代における「寛容性／非寛容性」をめぐるナラティヴ・ポリティクス	山　泰幸	1	2018-2022
○カネとチカラの民族誌――公共性の生態学にむけて	内藤直樹	1	2018-2022

●拡張された場における映像実験プロジェクト	藤田瑞穂	1	2018-2021
沙流川調査を中心とする泉靖一資料の再検討	大西秀之	2	2019-2022
○グローバル化時代における「観光化／脱-観光化」のダイナミズムに関する研究	東 賢太朗	1	2019-2022
○食生活から考える持続可能な社会――「主食」の形成と展開	野林厚志	1	2019-2022
○社会・文化人類学における中国研究の理論的定位――12のテーマをめぐる再検討と再評価	河合洋尚	1	2019-2022
○人類史における移動概念の再構築――「自由」と「不自由」の相克に注目して	鈴木英明	1	2019-2022
島世界における葬送の人類学――東南アジア・東アジア・オセアニアの時空間比較	小野林太郎	1	2019-2022
●感性と制度のつながり――芸術をめぐる「喚起」と「評価」のプロセスから考える	緒方しらべ	1	2019-2022
●モビリティと物質性の人類学	古川不可知	1	2019-2022

「グローバル化時代のサブスタンスの社会的布置に関する比較研究」

人類学においてサブスタンス（身体構成物質）に関する研究は、主に親族研究のなかで行われてきた。特に、生殖の観念の文化的多様性に関する民俗生殖理論や、生物学的生殖に限定されない人の関係性についての議論は、自然／文化、生物学的／社会的次元の二元論を前提とする親族（研究）を批判的に乗り越えようとするものである。ところが、今日、サブスタンスは、科学技術や医学の発展、グローバルな経済市場やトランスナショナルな移動の増加という現象の最前線で、資源として取引され、流通されるようになっており、従来の親族研究の射程を超えた新たな重要性を帯びるに至っている。遺伝子やゲノムといった新たなサブスタンスが、個や家族、集団のアイデンティティ形成や社会化のあり方に影響を及ぼすさまは、医療人類学を中心に生社会性（biosociality）という点から議論されている。

本研究の目的は、オセアニア、アジア、ヨーロッパにおけるサブスタンスの社会的布置に関する比較研究を通して、グローバル化時代のサブスタンスをめぐる社会動態の包括的な理解をはかるとともに、親族研究と医療人類学で二極化されているサブスタンス研究を架橋するアプローチを提示することである。

研究代表者　松尾瑞穂
班員（館内）宇田川妙子
（館外）澤田佳世、島薗洋介、白川千尋、新ヶ江章友、田所聖志、深川宏樹、深田淳太郎、洪　賢秀、松岡悦子、松嶋　健、山崎浩平

研究会
2019年７月13日（土） 13：00～18：00（国立民族学博物館　第１演習室）
松尾瑞穂（国立民族学博物館）「サブスタンスの人類学に向けて――序論検討」
全員「成果論集に向けた論文概要報告」
全員　総合討論今後の予定について
2019年12月21日（土） 13：30～18：00（国立民族学博物館　第１演習室）
全員「成果論集の草稿発表」
2019年12月22日（日） 10：00～12：30（国立民族学博物館　第１演習室）
全員「成果論集の草稿発表」
全員　総合討論

成果

最終年度にあたる今年度は、２回の研究会を開催した。各回とも、これまでの議論を総括し、今後の成果公開に向けた討論と各論の草稿の検討作業に注力した。代表者である松尾による論集の趣旨と序論、およびメンバーによる各章の草稿の発表を通して、サブスタンス概念の射程が明らかにあるとともに、サブスタンスというものに立脚すると見えてくる、身体や社会関係のリアリティについても、ある程度の見通しをつけることができた。

また、各自の研究報告や論文執筆に加えて、中部人類学談話会にて本共同研究会を主体とした分科会「グローバル化時代のサブスタンスの社会的布置」（2020年１月25日、名古屋大学）を開催し、メンバーからは松尾、山崎、深田が参加した。そこでのコメンテーターおよび参加者との議論を通して、共同研究で得られた知見を公開するとともに、サブスタンス概念の通地域性、通文化性についてより理解を深めることが出来た。共同研究会としては終了

したが、成果論集の刊行や学会での分科会の組織、科研への申請等などを計画し、今後も研究を発展的に継続していくための素地を構築した。

「捕鯨と環境倫理」

人類は5000年以上にわたり鯨類を食料や原材料として持続的に利用してきたが、1982年に国際捕鯨委員会（IWC）において大型鯨類13種の商業捕鯨の一時的な捕獲禁止が決定された。その後、現在に至るまで同捕鯨は再開できないままである。この捕鯨をめぐる動きは、動物福祉・動物保護・環境保護団体による反捕鯨運動と連動し、反捕鯨を支持する人びとや政府が増加し、世界各地の捕鯨や捕鯨文化は存続の危機に直面している。反捕鯨運動の背後には、世界各地におけるクジラと人間の関係やクジラ観、環境観の歴史的変化が存在している。

この共同研究では、世界各地の捕鯨の現状および欧米に端を発する反捕鯨運動について把握したうえで、世界各地の反捕鯨運動とその背後にあるクジラ観や環境・動物倫理がどのように形成され、世界各地に広がり、世界各地の捕鯨文化にいかなる影響を及ぼしているかについて検討を加える。より具体的には、アラスカやカナダ、グリーンランド、カリブ海地域等の先住民等による捕鯨、日本の調査捕鯨と小型沿岸捕鯨、ノルウェーとアイスランドの商業捕鯨等の現状と、動物福祉・動物保護・環境保護団体による国際的な反捕鯨運動およびその諸影響について比較するとともに、その背後にあるクジラ観や環境観、捕鯨政策を学際的に検討する。

研究代表者　岸上伸啓
班員（館内）出口正之
（館外）赤嶺　淳、李　善愛、生田博子、石井　敦、石川　創、伊勢田哲治、臼田乃里子、河島基弘、倉澤七生、佐久間淳子、真田康弘、高橋美野梨、浜口　尚、本多俊和、吉村健司、若松文貴

研究会
2019年６月16日（日）13：00～17：00（国立民族学博物館　大演習室）
若松文貴（京都大学）「日本の捕鯨政策における捕鯨推進派の紐帯」
石川　創（下関海洋科学アカデミー）「コメント」全体討論
2019年12月７日（土）13：30～19：00（国立民族学博物館　大演習室）
是恒さくら（東北大学東北アジア研究センター）「クジラとの係わり――アート実践『ありふれたくじら』プロジェクトを中心に」
全員「共同研究会の成果と今後の課題に関する全体討論」
全員「成果出版の打ち合わせと今後の計画の検討」
2020年２月16日（日）13：30～16：40（国立民族学博物館　第５セミナー室）
岸上伸啓　（国立民族学博物館・人間文化研究機構）「趣旨説明」
岸上伸啓　（国立民族学博物館・人間文化研究機構）「捕鯨をめぐる世界の動きと諸問題」
浜口　尚　（園田女子大学短期大学部）「世界の捕鯨の現状と将来――アイスランドの事例を中心に」
石川　創　（下関海洋科学アカデミー）「日本の捕鯨の現状と将来」
「ディスカッションと質疑応答」司会＋コメンテーター：若松文貴（京都大学）
検討は全員「まとめ」

成果

日本政府は2018年12月に商業捕鯨の再開を決定し、2019年７月より排他的経済水域内でのミンククジラ、イワシクジラ、ナガスクジラの捕獲を再開した。これは、国際捕鯨取締条約からの離脱（国際捕鯨委員会［IWC］からの脱退）と南極海・北太平洋北西海域での調査捕鯨の中止を意味している。日本の調査捕鯨は、共通の利権を持つ政-官-民の「エリート層が動員する社会運動であり、その「捕鯨トライアングル」が権力基盤を維持する目的で捕鯨政策を推進していると言われている。第１回共同研究会では、若松文貴が2007-2008年に共同船舶広報部（日本捕鯨協会）で実施したフィールドワークをもとに、政・官・民の三者が日常的にどのように接触・連携し合い 、捕鯨政策を維持しているかについて報告した。

第２回研究会では、日常生活において一般の人々や漁民がクジラとどのような関係を持ってきたかを当事者の視点から報告した。特に、是恒さくら氏は自身のクジラに関係するアート実践について報告した。

第３回研究会では、これまでの共同研究の成果の一部を一般公開し、検討を加えた。岸上伸啓は捕鯨をめぐる現代の動きと諸問題について、浜口尚はアイスランドを事例として商業捕鯨（致死的利用）とホエールウォッチング

（非致死的利用）の両立可能性について、石川創は日本における捕鯨の現状と将来について、報告した。
本年度の共同研究によって国内外の捕鯨の現状や問題点を整理・検討し、総括することができた。

「物質文化から見るアフロ・ユーラシア沙漠社会の移動戦略に関する比較研究」

本研究では、アフロ・ユーラシア乾燥地全域を対象としつつ、とりわけサハラ沙漠、ナイル河岸、紅海沿岸、アラビア半島、イランに位置する５つの異なるオアシスにおける生活の持続と変容について、物質文化に焦点をあてて検証することにより、沙漠社会の移動戦略の比較研究を推進する。注目する物質文化は、⑴ラクダと船に関わるモノ（陸域と海域の連続性）、⑵飲料と食料に関わるモノ（食品保存と運搬性）、⑶衣装と住居に関わるモノ（熱帯と温帯・寒帯の対称性）である。これらの物質文化の検討をもとに、人類の進化と適応、社会組織の可変性と開放性、物質加工の技術と担い手の交流という３つの観点から沙漠社会の移動戦略を解明する。並行して、片倉もとこ（文化人類学者／地理学者）によるアラビア半島に関する現地調査資料（1968-2008）、小堀巖（地理学者）によるアルジェリア・サハラ沙漠に関する現地調査資料（1968-2010）といったおよそ半世紀前に記録・収集された学術資料を活用して、生活空間・物質文化・移動戦略の関係性とその変化についても検証していく。

研究代表者　縄田浩志
班員（館内）石山　俊、西尾哲夫
（館外）遠藤　仁、片倉邦雄、河田尚子、郡司みさお、児玉香菜子、坂田　隆、中村　亮、西本真一、原　隆一、藤本悠子、古澤　文、渡邊三津子

研究会

2019年７月20日（土）13：00～17：30（国立民族学博物館　第１演習室）
石山　俊（国立民族学博物館）「サハラ・オアシスにおけるナツメヤシ灌漑農業の現代的変容」
質疑応答企画展示内容見学、展示ギャラリートーク：縄田ほか
縄田浩志（秋田大学）「モロッコの自然環境、農業、物質文化――ナイル河岸、アラビア半島との比較の視点から」
コメント：齋藤　剛（神戸大学）
質疑応答

2019年７月21日（日）10：00～16：00（国立民族学博物館　第１演習室）
西川優花（大阪大学大学院）「イラン・ザーヤンデルード下流域における河川の重層的利用と生業の弾力性」
コメント：原　隆一（大東文化大学）
質疑応答
賀川恵理香（京都大学大学院）「現代パキスタンにおけるヴェール着用実践――都市部の女子大生を事例として」
コメント：竹田多麻子（横浜ユーラシア文化館）
総合討論「土地利用と物質文化の地域間比較――マグレブ、アラビア半島、イラン」
打ち合わせ：研究成果のまとめについて

2019年11月17日（日）12：45～17：00（横浜情報文化センター情文ホール）
サウジアラビアの歴史文化遺産と観光資源サウジアラビアの歴史文化遺産の新たな価値を求めて――日サ合同調査隊の取り組み

2020年１月25日（土）13：30～17：30（国立民族学博物館　第４演習室）
縄田浩志（秋田大学）「アフロ・ユーラシア沙漠社会の移動戦略」
質疑応答
坂田　隆（石巻専修大学）「ヒトは暑さに強いか――ヒトの暑熱対応と水消費」
コメント：佐藤麻理絵（京都大学）
質疑応答

2020年１月26日（日）10：00～15：30（国立民族学博物館　第４演習室）
西尾哲夫（国立民族学博物館）・竹田多麻子（横浜ユーラシア文化館）・藤本悠子（片倉もとこ記念沙漠文化財団）・縄田浩志「企画展示「サウジアラビア、オアシスに生きる女性たちの50年」に対する一般来館者の反応」
コメント：原　隆一（大東文化大学）
総合討論「物質文化から見るアフロ・ユーラシア沙漠社会の移動戦略」
打ち合わせ：学会発表準備（中東学会、文化人類学会、ロンドン国際会議）、成果出版（沙漠研究、中東学会年報、国立民族学博物館調査報告）ほか、研究成果のまとめについて

成果

最終年度４年度は、対象としてきた物質文化について、アラビア半島とマグレブ、イラン地域とを比較することにより、各地域の物質文化の特質を、人類の進化と適応、社会組織の可変性と開放性、物質加工の技術と担い手の交流という３つの観点から再定置した。その上で、中心テーマ「物質文化から見るアフロ・ユーラシア沙漠社会の移動戦略」に関する議論を深化させていった。

主な研究成果は、以下の３点にまとめられる。⑴本研究会の成果をもととして、企画展「サウジアラビア、オアシスに生きる女性たちの50年――『みられる私』より『みる私』」（2019年６月６日～９月10日）また同巡回展（横浜ユーラシア文化館、2019年10月５日～12月22日）を開催した。⑵本研究会の主要な成果として書籍『サウジアラビア、オアシスに生きる女性たちの50年――「みられる私」より「みる私」』（河出書房新社、縄田浩志編、2019年６月６日）を出版した。⑶本研究会メンバーが中心的役割を担って、国際シンポジウム「サウジアラビアと日本をつなぐ文化交流のこれから」（横浜情文ホール、2019年11月17日）を開催した。

「音楽する身体間の相互作用を捉える――ミュージッキングの学際的研究」

音楽の人類学的研究は半世紀ほどの歴史をもつが、従来の研究の多くは、音楽の意味を音（テクスト）に求める「音楽学」寄りの研究と、音の文化的背景（コンテクスト）に音楽の存在意義を求める「人類学」寄りの研究とに分かれる傾向にあった。また、両者の学術的対話の困難さもこれまで指摘されてきた。

他方で近年では、人類学と音楽学とを架橋する研究者らが、人間の音楽的な営みを“音楽すること musicking”として理解することを提唱している。music の動名詞型にあたる「ミュージッキング」には、歌い・奏し・踊ることだけでなく、手拍子や聴取といった行為までも含まれる。これは、音楽的実践における身体性に着目することで、“音楽”という近代的かつ抽象的な概念を根本から再考するために提案された鍵概念である。

本研究は、記述・分析の対象を「音楽」から「ミュージッキング」へとずらし、パフォーマンスのさなかにある身体同士のやりとりを音楽的出来事に不可欠な一部分として語るための方法論を確立することを目的とする。

研究代表者　野澤豊一

班員（館内）川瀬　慈、寺田吉孝、福岡正太

（館外）青木　深、井手口彰典、岡崎　彰、梶丸　岳、大門　碧、武田俊輔、谷口文和、西島千尋、伏木香織、増野亜子、松平勇二、矢野原佑史、輪島裕介

研究会

2019年５月12日（日）13：30～18：00（国立民族学博物館　第４セミナー室）

福岡正太（国立民族学博物館）「ミュージッキングとしての映像記録作成――フォーラム型情報ミュージアム『徳之島の唄と踊り』」

竹村嘉晃（シンガポール国立大学／国立民族学博物館）「インド芸能から考える舞踊民族誌の視角」

全員・成果の取りまとめにむけて

2019年７月６日（土）13：30～18：30（国立民族学博物館　大演習室）

井上淳生（北海道地域農業研究所）「音楽と格闘する踊り手――社交ダンスを素材に動きと音楽の関係を描く」

全員・成果の取りまとめにむけて

2020年２月22日（土）９：30～18：00（国立民族学博物館　第４セミナー室）

全員・成果論集の原稿読み合わせ

成果

2019年度は３回の共同研究会を実施した。最終年度ということもあり、口頭発表の数をこれまでよりも少なくして、成果発表のための話し合いに多くの時間を割いた。発表では、2018年度までに議論を尽くしきれなかった「映像」と「ダンス」に関わる報告を、３名の研究者（うち２名がゲストスピーカー）が行った。それぞれの内容は、人々の音楽実践を映像として記録したり現地の人々と共有する営み自体をミュージッキングとして記述する可能性について、舞踊研究におけるテクスト主義とコンテクスト主義の限界、現代日本の社交ダンス実践者における「音楽」と「ダンス」の分離状況について、というものである。成果発表のための準備としては、まず代表者である野澤が論集全体の方針を共同研究のメンバーに伝えたうえで（2019年５月12日）、各人の担当するチャプターの案を集めた（2019年７月６日）。それをふまえて各人が草稿を持ち寄り、相互にコメント・批判を行った（2020年２月22日）。

「現代日本における「看取り文化」の再構築に関する人類学的研究」

本研究は、現代日本の超高齢社会における地域包括ケアシステムとそこに通底する死生観や人格観、家族観を明らかにしながら、「医療の生活化」という概念を手掛かりに、地域社会での「看取り文化」を新たに構想することを目指す。

日本は世界に類を見ないスピードで高齢多死社会に突入しつつある。病院死がおよそ80％占める一方、「終活」の展開や葬儀の多様化が進み、「その人らしい死」「死の自己決定」という死の文化的、社会的変容が起こっている。また「独居老人」や「孤独死」という言葉に見られるように家族観の変容と地域社会の変貌が指摘されている。近年、厚生労働省は高齢多死社会を見据えて病院医療から在宅医療への転換を打ち出し、終末期医療の再検討を始めた。これにより日本各地で在宅（施設を含む）での「看取り」のあり方が模索され始めている。今日、在宅の「看取り」には医療福祉制度の充実や多職種連携は不可欠であるが、そこには実践的課題と学術的課題がある。前者は、既存の地域包括ケアシステムが抱える問題、公的介護と家族介護とのバランスという課題である。後者は、死の医療化論、死生観と家族観の変容、死の個人化を促す地域社会の再検討という理論的課題である。本研究では、国外の「看取り」実践を参照点とし、上記の二つの課題を横断的に捉えつつ、現代日本における「看取り文化」の再構築への道筋を提示する。

研究代表者　浮ヶ谷幸代
班員（館内）鈴木七美
（館外）相澤　出、渥美一弥、鈴木勝己、田代志門、田中大介、松繁卓哉、山田慎也

研究会

2019年４月20日（土）14：00～18：00（国立民族学博物館　第３演習室）
加賀谷真梨（新潟大学）「分化する『看取り』――沖縄離島の小規模多機能型介護施設の実践から考える」
福井栄二郎（島根大学）「ヴァヌアツ・アネイチュム社会における高齢者の生・病・死、その変化について」

2019年４月21日（日）10：00～12：00（国立民族学博物館　第３演習室）
浮ヶ谷幸代（相模女子大学）「ルームシェアで最期を迎える――神奈川県藤沢市UR住宅における小規模多機能ホーム〈ぐるんとびー〉の取り組みから」

2019年５月11日（土）14：00～18：00（国立民族学博物館　大演習室）
○日本文化人類学会第53回研究大会分科会のためのプレ発表
浮ヶ谷幸代（相模女子大学、趣旨説明）「コミュニティ（地域）による看取りの力」
相澤　出（岩手保健医療大学）「地元に投じる一石としての『安心ノート』――二ツ井ふくし会による在宅での看取り事例集は地元になにをもたらすか？」
浮ヶ谷幸代（相模女子大学）「『小さな移住』と『大きな移住』――日本版CCRCとUR団地小規模多機能ホームとの比較から」
山田慎也（国立歴史民俗学博物館）「看取りから葬送へのコミュニティは形成されるか？――無縁化への予防と自己決定をめぐる実践を通して」
松繁卓哉（国立保健医療科学院）「地域包括ケアシステム（保健・医療・福祉）への『住民参加』――システムにおける互助の問題」
渥美一弥（自治医科大学）「サーニッチが居留地で看取ること――地域の看取りとしてのカナダ先住民保留地」

2019年５月12日（日）10：00～12：00（国立民族学博物館　大演習室）
山田千香子（聖徳大学）「住み慣れた地域を終の棲家とするために――長崎県の島の取り組みを事例として」

成果

本年度は、共同研究の最終年度であり、共同研究の成果の一部として日本文化人類学会の分科会の準備にあてた。加えて、看取りに関する調査研究に取組んでいる特別講師を３人招聘し、「死」「看取り」「地域」について検討した。分科会のテーマは「コミュニティ（地域）における看取りの力」であるが、80％近くが病院で最期を迎えている現代日本で、コミュニティに看取りの力を想定することは可能か、という課題が議論された。家族や地域住民における「おたがいさま」という機能が消失した現在、無縁者や独居高齢者が最後を迎える際に行政や企業がイニシアチブをとらざるを得ない現実があった（山田慎也）。他方、医療・福祉制度（松繁）を背景として、最期を迎える人を含めた専門家と家族、住民とのかかわり方から「看取り文化」の可能性について論じる報告があった（加賀谷、浮ケ谷、相澤、山田千香子）。海外の報告（福井、渥美）を参照しつつ、これらの結果を踏まえて「看取り文化」の

構想には医療・福祉の専門家やその実践と、「死にゆく人」とその「死」をめぐる関係者の思いや行為とが交叉する、政治的、経済的、社会的プロセスを明らかにすることが重要であることを確認できた。（括弧内は報告者）

「テクノロジー利用を伴う身体技法に関する学際的研究」

IT 化や科学技術の発展に伴い、直接対面的なコミュニケーションが減少している現代社会において、今改めて身体的相互行為の価値が問われている。本共同研究では、科学技術が介在する際に知識や情報の伝達をも含んだ身体技法が如何に変化し再構築されるのかについて、世界各地の事例に基づいて比較検討を行う。身体を通じて伝えられる技芸や知識等は、これまで口伝や観察による自得によって享受されてきた。しかし近年では、科学技術によって技芸をデジタル化しようとする傾向が顕著であり、さらには身体技法がメディアを通じてより拡大された社会関係のなかで共有されはじめている。だが他方で、身体技法の習得及び伝承の過程では、科学をもってしても可視化・言語化・定量化ができない身体知――感覚、感情――があり、テクノロジーとの融合において常にジレンマがつきまとっていることもまた事実である。本研究では、身体技法をめぐるテクノロジー利用に着目し、新しい身体的相互行為、およびコミュニケーションの在り方を明らかにする。

研究代表者　平田晶子
班員（館内）伊藤　悟、廣瀬浩二郎
　　（館外）岩瀬裕子、阪田真己子、谷岡優子、日比野愛子、柳沢英輔、吉川侑輝

研究会
2019年 7 月27日（土）10：30～18：00（国立民族学博物館　第 6 セミナー室）
①菅原和孝（京都大学）「人類学分野における身体技法研究」質疑応答
②市野澤順平（宮城学院女子大学）「ダイブ・コンピューターと減圧症リスク――観光ダイビングにおける身体感覚／能力の増強とリスク認知」
各共同研究員による成果報告質疑応答、総合討論疑応答、総合討論
2020年 2 月16日（日）10：00～18：00（国立民族学博物館　第 3 セミナー室）
①大西秀之（同志社女子大学）「技術研究をめぐる民族誌フィールドの可能性」
②佐本英規（広島大学）「竹とラジオとスマートフォン――ソロモン諸島アレアレの在来楽器をめぐる技法と技法論の変遷にみる物と身体、人格の関係性」
③三津島一樹（京都大学大学院）「身ぶりとテクノロジーの相互作用――西アフリカ・ガーナの自動車修理を事例に」
④市野澤潤平（宮城女子学院大学）「水中における身体感覚の民族誌的記述」総括

成果
最終年度となった2019年度は、国内の人類学分野で身体に関する研究を継続されてきた菅原和孝氏（京都大学）や『技術と身体の民族誌』を上梓された大西秀之氏（同志社女子大学）などを特別講師として招聘し、身体を研究対象とする際の可能性や課題について検討してきた。とりわけ、最終回の大西氏からは、シェーンオペラトワールの技術論から発展させたかたちで、産業化・近代化する各自の対象社会に生きる人びとの営みの中で発見できる「技術」を技能と知識に分解しながらみることで、近代と伝統の二文法を克服する視座を提示していただいた。佐本氏は、ソロモン諸島マライタ島アレアレの竹製パンパイプ・アウにみるチューニングの身体活動が極めて技術的実践であるとし、チューニングの技術的活動をめぐって人びとが商業化・グローバル化と向き合う葛藤や軋轢などの視点を提起した。三津島氏は、西アフリカ・ガーナの自動車修理工場にみる修理技術の民族誌に取り組み、修理実践における道具や身振りを事例に、不確実な行為の条件のもとで行われている、動作連鎖という観点から詳細な一次資料を基に報告した。

こうした特別講師による話題提供により、用語としての身体と肉体の問題を再考したり、これまで ICT に敢えて特化して科学技術を扱ってきた本共同研究において「技術」を再定義したりするきっかけとなった。今後、本共同研究では深化させることができなかった、われわれの身体活動に関わる技術的実践において技能と知識がいかに相関しあっているかなどについて議論を深めることを各自の課題として、本共同研究会を閉会した。

「博物館における持続可能な資料管理および環境整備――保存科学の視点から」

本館における保存科学研究では、博物館機能をもつ研究所という特色を生かし、基礎的な研究と、それを発展さ

せた実践的な研究に取り組んでいる。その内容は、モノ資料を主たる対象に、生物生息調査や温度・湿度モニタリングなどの保存環境データを効率的に分析するプログラムの開発、データの分析結果をもとにした展示・収蔵環境の整備とその検証、化学薬剤を用いない殺虫処理法の開発および条件改良、収蔵スペースの狭隘化対策と収蔵改善を目的とした収蔵庫の再編成、被災文化財への応急措置を含めた保存修復法の開発など、多岐にわたる。

本研究では、これまでの研究をさらに深化させ、環境への配慮が一層求められる21世紀の社会状況に適合する持続可能な資料管理および保存環境の基盤整備を目的とする。ここでは、研究対象をモノ資料だけでなく、映像資料にひろげるとともに、大規模な博物館等の施設のみならず、設備、人手、経費が限られる小規模な博物館等の施設や個人所蔵者でも応用・実践が可能な保存の条件や指針を提示するという新たな軸を設定して研究を進める。その上で、保存科学の基礎的・実践的研究にくわえて、21世紀の社会状況のもとでの資料の保存と活用について、その意義を整理し再考する。

研究代表者　園田直子

班員（館内）大森康宏、森田恒之、河村友佳子、末森　薫、橋本沙知、日髙真吾、平井京之介、吉田憲司

（館外）大関勝久、木川りか、佐藤嘉則、髙畑　誠、鳥越俊行、馬場幸栄、山口孝子、和田　浩、和髙智美研究会

2019年７月19日（金） 13：30～18：00（国立民族学博物館　大演習室）

和髙智美「国立民族学博物館における生物生息調査と分析手法」
木川りか「九州国立博物館における生物生息調査と分析手法」
馬場幸栄「一橋大学社会科学古典資料センターにおける生物生息調査と分析手法」
佐藤嘉則「東京文化財研究所における生物生息調査と分析手法」
大関勝久「国立映画アーカイブにおける生物生息調査と分析手法」
髙畑　誠「宮内庁正倉院事務所における生物生息調査と分析手法」
山口孝子「東京都写真美術館における生物生息調査と分析手法」
和田　浩「東京国立博物館における生物生息調査と分析手法」
全員：分析手法の検証およびディスカッション
河村友佳子「太陽熱を用いた高温処理の条件確立――今後の進めかた」
橋本沙知「窒素雰囲気での密封実験――今後の進めかた」
橋本沙知「多機能資料保管庫におけるカビの発生資料と空気の対流調査――今後の進めかた」
馬場幸栄「西洋貴重書保存インデックスについて」
末森　薫「オランダ・デンマークに建設された低エネルギー・共有型収蔵施設」

2019年12月12日（木） 13：30～18：00（国立民族学博物館　大演習室）

河村友佳子「国立民族学博物館における温湿度に関する調査と分析手法」
橋本沙知「2019年特別展「驚異と怪異――想像界の生きものたち」調湿展示ケース内の温湿度制御事例」
髙畑　誠「宮内庁正倉院事務所における温湿度に関する調査と分析手法」
山口孝子「東京都写真美術館における温湿度に関する調査と分析手法」
大関勝久「国立映画アーカイブにおける温湿度に関する調査と分析手法」
渡辺祐基「九州国立博物館における温湿度に関する調査と分析手法」
和田　浩「東京国立博物館における温湿度に関する調査と分析手法」
全員：分析手法の検証およびディスカッション

2020年２月６日（木） 14：00～17：00（宮内庁正倉院事務所）

髙畑　誠「正倉（外観）・校倉、保存科学室における資料保存」
全員：奈良時代より文化財が保存されてきた管理体制や施設環境に関するディスカッション

2020年２月７日（金） 10：00～16：00（奈良国立博物館）

鳥越俊行「奈良国立博物館における資料保存」
全員：奈良国立博物館における資料保存に関するディスカッション

成果

第１回研究会では生物生息調査、第２回研究会は温度・湿度モニタリングという、各機関が共通して実施している予防保存活動を課題としてとりあげた。生物生息調査および温度・湿度モニタリングの調査方法と分析手法の最適化と効率化を目的に、それぞれの機関での調査方法およびデータの解析法を議論した。また、本館が実施してい

る研究開発（高温殺虫処理、低酸素濃度環境下での資料保管）の進捗状況をもとに、結果の検証と評価をおこなった。第３回研究会（2020年２月６日、７日）では、宮内庁正倉院事務所および奈良国立博物館における資料保存について意見交換をおこなった。昨年度にひきつづき、共同研究員の所属先で館外研究会を開催することで、現場での実態調査をおこない、保存科学研究の遂行上、不可欠となる共通基盤の形成につとめた。

「人類学／民俗学の学知と国民国家の関係――20世紀前半のナショナリズムとインテリジェンス」

日本の人類学は、欧米の理論を導入して移植して学知として定着していった一方で、植民地経営への応用、ナショナリズムの勃興と民族意識の高揚、戦闘地域での情報活動など、人類学を取り巻く国内外の政治的状況で展開、発展してきたのは、欧米と同じである。そこで、単に学術活動や理論の受容を祖述するだけではなく、人類学／民俗学を取り巻く社会的状況を踏まえ、隣接諸領域を視野に含めた歴史の再構築をすることで、人類学の果たした社会的役割を明確にすることが、この研究の目的である。具体的にこの研究では、1920年代から40年代にかけての戦間期における欧米と日本の人類学／民俗学を比較対照することで、日本への影響のルーツを探り、学知として成立する人類学／民俗学を歴史のコンテキストで理解する基礎研究を目指したい。

研究代表者　中生勝美
班員（館内）飯田　卓、宇田川妙子
（館外）飯嶋秀治、池田光穂、臼杵　陽、江川純一、及川祥平、加賀谷真梨、栗本英世、佐藤若菜、角南聡一郎、泉水英計、田中雅一、Damien KUNIK、山田仁史

研究会
2019年４月21日（日）10：00～18：00（国立民族学博物館　第１演習室）
中生勝美（桜美林大学）事務連絡各自の研究進捗状況１各自の研究進捗状況２
中生勝美（桜美林大学）「松島泰勝『琉球　奪われた骨――遺骨に刻まれた植民地主義』の書評」
泉水英計（神奈川大学）「琉球列島米民政府の宣伝番組――社会保障および医療を中心に」
2019年12月24日（火）10：00～17：30（国立民族学博物館　第１演習室）
中生勝美（桜美林大学）「研究会経過報告」参加者の今年度の研究成果報告（１人20～30分）
栗本英世（大阪大学）「エヴァンズ＝プリチャードの軍役経験――軍将校としての人類学者を考える」
総合討論、今後の研究会の打ち合わせ
2020年１月30日（木）10：00～18：00（徳島県立鳥居龍蔵記念博物館）
徳島県立鳥居龍蔵記念博物館見学
中生勝美（桜美林大学）「鳥居龍蔵の蒙古調査」
佐藤若菜（新潟国際情報大学）「鳥居龍蔵の蒙古調査」
総合
2020年１月31日（金）９：00～12：00（徳島県立鳥居龍蔵記念博物館）
徳島県立鳥居龍蔵記念博物館所蔵写真資料閲覧、文献調査

成果

本年度は、この研究会のメンバーを共同研究者として申請した科学研究費（基盤研究（B））（一般）「ファシズム期における日独伊のナショナリズムとインテリジェンスに関する人類学史」が採択され、第１回の研究会で、科研費獲得による研究計画の見直しをした。さっそく夏にイギリスに出張した栗本英世より、ピット・リバース博物館のアーカイブ調査の成果を発表してもらった。今年度は、この科研で中生はドイツ、スイス、オーストリアへ、山田はドイツ、飯嶋はアメリカ、泉水はアメリカ、池田はアルゼンチン、江川はイタリアへ赴き、現地調査を実施し、非常に研究が進展した。

また徳島県立鳥居龍蔵記念博物館では、鳥居龍蔵関連を発表して当該館との交流をすすめ、貴重な収蔵資料を内覧できた。当該館より、戦前に鳥居龍蔵をモデルにした映画が、満洲でのロケで制作されている情報をもらい、次年度は、その閲覧を研究会として考えたい。

「文化人類学を自然化する」

文化人類学を自然科学の一部とすることを最終目標として、そのための方法を模索する。自然科学を人類学の研究対象にするのではない。人類学を他の自然科学（とりわけ心理学と生物学）と横にならぶ自然科学の一つの部門

として成立させるのである。具体的には、人類学独自のことば遣いを自然科学のある部門の言葉へと翻訳する可能性を考えることから始める。すなわち還元がその方法論である。還元先の部門としては、とりあえず、心理学（認知心理学、社会心理学）そして生物学（進化生物学、疫学）を考えている。また積極的に自然化を推し進めている一部の哲学にも範を求めたい。消極的には「人類学の解消」に繋る動きととらえることもできようが、わたしは、より積極的に、文化人類学の自然化は自然科学というものを変化・発展させる契機になり得ると信じている。

研究代表者　中川　敏
班員（館内）飯田　卓、松尾瑞穂
（館外）唐沢かおり、高田　明、戸田山和久、中川　理、中空　萌、中村　潔、浜本　満、山田一憲

研究会
2019年６月８日（土）13：00～18：00（国立民族学博物館　第１演習室）
菅原和孝（京都大学）「自然誌的態度にとって種とは何か？――分類・本質主義批判・身体化」
全体討論
内堀基光（一橋大学）「カミソリと鉈、斧のあいだ――文化の細部の説明をどれだけ自然化するか、自然化できるのか」
全体討論
2019年９月28日（土）９：00～18：00（国立民族学博物館　第１演習室）
中川　敏（大阪大学）「人類学を自然化するいつかの方法――研究会の前半を終えて」
全体討論
中村　潔（新潟大学）「社会的諸力とは」
全体討論
浜本　満（九州大学）「シンボル記号の条件――類人猿の言語習 得実験についてのど素人的考察」
全体討論
2019年11月24日（日）13：00～18：00（国立民族学博物館　第１演習室）
高田　明（京都大学）「言語の自然化――サンの養育者＝幼児間相互行為の分析から」
全体討論
山田一憲（大阪大学）「授乳をめぐるニホンザルの母子相互交渉」
全体討論
2020年２月２日（日）９：00～18：00（国立民族学博物館　第１演習室）
飯田　卓（国立民族学博物館）「読むことの現象学」
松尾瑞穂（国立民族学博物館）「サブスタンス、人格、情報のネクサス」
全体討論
中川　理（立教大学）「現代版不平等起源論とその批判」
全体討論

成果
第１回目の特別講師二名（内堀、菅原）による発表、そして直前の（前年度最後の）文化人類学の外部の「自然化」の専門家（戸田山、唐沢）の発表を経て、研究会の方向が徐々に明らかになってきた。すなわち、自然主義の基礎論（とりわけ記号の恣意性の起源論）と自然主義の応用（自然主義をいかにして人類学のフィールドワークに適用するか）という二つの流れである。２回目以降は文化人類学プロパーの研究者による二度目の発表となる。すべて上記の二つの流れを念頭においての発表となった。これらの発表をつうじて、上記二つの流れがさらに明確化した。基礎論においてはミリカンの議論などが参照されたが、パースの提唱するアブダクションという推論が恣意性の起源の解明の一つのキーとなることが示差された。応用編においては、（自然主義としての）社会心理学の方法、プラグマティズムの方法などが検討された。

「ネオリベラリズムのモラリティ」

本研究の目的は、ネオリベラリズムの現れ方の多様性、特にモラリティの意味付けと実践を現地の文脈や当事者の視点から解き明かすことによって、今日の世界における生を民族誌的現実に即して知らしめ、具体的な課題を明らかにしつつ、ありうべき社会の可能性を探るための議論に貢献することにある。

ネオリベラリズムは、その言葉を知ろうと知るまいと、関心があろうとなかろうと、私たちの生活を覆いつくしつつある。しかしその現れ方は、場や受け取る側の歴史や政治経済的状況、及び文化によって様々である。本共同研究では、世界各地で長期フィールドワークを行ってきた30～40代の研究者たちが、それぞれの地域と対象の人々の詳細な事例に関する情報と知見を交換し、ネオリベラリズムの世界におけるモラリティを具体的な事例を通じて理解することを試みる。

研究代表者　田沼幸子
班員（館内）相島葉月、八木百合子
（館外）伊東未来、猪瀬浩平、酒井朋子、佐川　徹、佐久間寛、佐々木祐、中川　理、深澤晴奈、宮本万里

研究会
2019年７月13日（土） 13：00～18：30（国立民族学博物館　第２演習室）
佐久間寛（明治大学）「『テントを切り裂けばバターがある。放っておく？』――現代ニジェールにおける恋愛、移動、自由」
宮本万里（慶應義塾大学）「コンニェル（寺守り）からゲロン（出家僧）へ――民主化期ブータンにおける村寺の包摂と『解放』」
参加者全員「今後の研究会展望」
2019年11月９日（土） 12：30～18：00（国立民族学博物館　第２演習室）
参加者全員　今後の研究会展望
酒井朋子（神戸大学）「国境、パスポート、利便性――ブレクジットと北アイルランドのコスモポリタニズム」
中川　理（立教大学）「エスノリベラリズム・リベラリズム・ネオリベラリズム（そしてホームランド・ビューティとグローバル・ギャップ）」
全体討論
2020年２月15日（土） 12：30～18：00（国立民族学博物館　大演習室）
参加者全員　今後の研究会展望
八木百合子（国立民族学博物館）「ペルーにおける人の移動と宗教文化の変容――都市祭礼をめぐるヒト・モノ・カネ」
田沼幸子（首都大学東京）「怒って済むなら人類学者は要らない。ではどうするか」
冨山一郎（同志社大学）コメント参加者全員
総合討論

成果
それぞれの民族誌的報告は、ますます濃密で複雑なものとなってきており、地域的歴史的背景を踏まえてネオリベラリズムを理解することの重要性を再認識させられる。
佐久間は20年前のフィールドにおける悲恋を扱った。微細な会話とやり取りを、伝統的コンテクストとその時点でのコンテクストを通じて描くことによって、なぜそのようなやりきれない展開になってしまったのかを掘り下げた。宮本は、従来は村の男性が交代で務めてきた寺の世話が、各地の大僧院から派遣された出家僧に置き換えられていった背景を明らかにする。僧侶の統治から王政へ、隣国が関わる経済政策、グローバル化する布教活動など、大きな力が小さな村に変化をもたらしている。中川は、フランスのモン難民が工場労働から農民になった背景に「エスノリベラリズム」があり、それが国の管理などへの抵抗としての価値を具現化するリベラリズムに接合されていったことを示す。一方でそれは不平等なジェンダー関係によって成立し、彼らの自由もネオリベラリズム・ガバナンスによって緊張にさらされている。八木は、村から都市へ移動した人々によって、祭礼が経済的に大規模になっただけでなく、祀られる聖人にも変化が起きたことを示す。経済的な力が、政治的な力を凌駕して、宗教的な祭礼に影響を及ぼしているのだ。ただし村から都市への移動は、経済的利益を求めてではなく、政情不安による危険を回避してのものだった。田沼は「ネオリベ」への人類学者の怒りは学生に受け入れられず分析が単純化しがちだと指摘する一方で、外部に理解しがたい難解な人類学は、「私たちの仕事を失ってしまう」ことにつながるというシドニー・ミンツの危惧が現実に迫っていることを示す。改めて何か共有できるとしたら、私たち自身もネオリベラリズムに巻き込まれていること、そして解決策を知らず、間違いうることを自覚して、古いものを捨てていくのではなく、円環的時間・直線的時間が併存する「revolution」のように、過去を振り返り、「循環」しながら、人類学／民族誌することを続けていくべきではないか。

「モノをとおしてみる現代の宗教的世界の諸相」

産業化やグローバル化の加速を背景に近年、宗教的な領域における商品化もかつてないほど急速に進んでいる。以前は特定の地域や信仰者のあいだでのみ崇拝あるいは使用されてきた聖なるモノでさえも、その複製品が大量に世に出回り、時には信仰を異にする人びとの手にまで拡散している。こうしたモノの新たな受容をとおして、それまで見られなかったスタイルの信仰や実践が生み出されるなど、宗教的な領域におけるモノの存在やその動向は、現代の宗教的世界のあり方を理解するうえで看過できない。ところが、宗教的文脈においては教義上、物質より精神を重視する傾向が強いためか、これまでモノは副次的な存在でしかなく、1980年代以降の人類学のモノ研究の展開においても、儀礼や宗教空間を構成する多様なモノの現代的な生産流通消費の諸相が見過ごされる傾向にある。

本研究では、宗教的なモノに焦点をあて、今日の宗教の展開について比較検討を行うことを目的とする。とくに近年拡大するモノの生産や流通の局面を見据え、それが各地に及ぼすさまざまな影響を浮かび上がらせ、宗教的領域におけるモノの役割、モノを介した信仰の現代的諸相について考える。

研究代表者　八木百合子
班員（館外）笠井みぎわ、小西賢吾、田村うらら、鳥谷武史、中川千草、長嶺亮子、丹羽朋子、野上恵美、福内千絵、二ツ山達朗、古沢ゆりあ

研究会

2019年５月25日（土）13：30～18：30（国立民族学博物館　第１演習室）
丹羽朋子（国際ファッション専門職大学）
「紙にうつされた不可視／不在のかたち――中国剪紙の事例から」
山越英嗣（早稲田大学）
「聖像がつむぐ抗議運動の記憶――オアハカのストリートアートとアクチュアリティの共鳴」
全体討論

2019年６月29日（土）13：30～18：30（国立民族学博物館　第１演習室）
中川千草（龍谷大学）
「呪いと祈りのバリエーション――ギニア共和国・沿岸地域における『災因論』を例に」
全員報告・討論「呪術的な力とモノ」
全員　「今後の研究会のすすめ方について」

2019年10月５日（土）13：30～18：30（国立民族学博物館　大演習室）
全員　研究成果公開に向けた打合せ
小倉美恵子（ささらプロダクション）「うつし世の静寂（しじま）に」上映・作品解説全員
全体討論

2019年10月６日（日）10：30～16：00（国立民族学博物館　第４セミナー室）
◇公開研究会◇
八木百合子（国立民族学博物館）「趣旨説明」
鳥谷武史（金沢大学）「日本のまじないについて」
小倉美恵子・由井　英（ささらプロダクション）
「オオカミの護符――里びとと山びとのあわいに」上映・作品解説
総合討論

2019年12月７日（土）13：30～18：30（国立民族学博物館　第３演習室）
全員　研究成果公開に向けた打合せ
全員　今後の予定について

2020年１月25日（土）13：00～18：00（国立民族学博物館　第１演習室）
全員　成果出版の構想についての討議

成果

本年度は、通常の研究会の開催と並行して研究成果公開についての打合せをおこなった。また、関連分野の外部の講師を２名を招聘し、研究課題に関する議論を深めた。10月には、公開研究会を催し、日本の宗教的なモノをめぐる動向について、関連する映像作品の視聴をおこなうとともに、撮影者による報告や一般参加者の意見も交えて検討をおこなった。

研究成果に関する討議では、代表者が提示した論集の構想案にもとづき、目次の枠組みをつくった。それに従い、これまでの報告や議論を踏まえながら、各自の論考の方向性について調整をおこなった。とくに、研究期間をつうじて見出された論点を整理していくなかでは、モノの複製化にまつわる問題（神々のイメージの現地化、ポピュラー化、商品化、モノの蓄積と転生）や物質性の変化にかかわる問題（代替メディアの役割、視覚以外の感覚への働きかけ等）など、宗教的なモノをめぐり世界各地で生起している現代的な諸課題が浮き彫りになった。これらの点は各地の事例をもとに成果論集のなかで考察を深める予定である。

「オセアニア・東南アジア島嶼部における他者接触の歴史記憶と感情に関する人類学的研究」

本研究の目的は、虚実入り混じる電子情報が飛び交う現代世界において、他者接触に関する歴史経験の記憶がいかに「史実性」を獲得するのか、想起の場や感情と関連づけて追究することである。

近現代のオセアニアおよび東南アジア島嶼部では、欧米諸国や日本による植民地統治や第二次世界大戦を経て、多くの新興国が独立した。今日に至る歴史動態のなかで、当該地域の人々は、移動して多様な他者と遭遇し、軋轢や戦争に巻き込まれ、また他者との平和的協働を経験してきた。このような他者接触の歴史記憶を焦点化するにあたり、便宜上、1）国民やエスニック集団を統合する公的な集合的記憶、2）個々人の日常生活に根差したヴァナキュラーな記憶の二極を措定しておく。

そして、第一に、２つの歴史記憶の相互関係を見据えながら、人々が感情を伴っていかに集合的記憶および個別経験の記憶を生成、継承し、あるいは忘却していくのかを考察する。さらに、遺物や文書、語りを通して想起された歴史記憶は、静態的な情報に留まることなく、人々の感情を揺さぶり、ときに過激な行動を引き起こす潜在力を有する。そこで第二に、今を生きる人々の歴史記憶が立ち現れる場を射程に入れ、想起が内包する感情および身体的な特性の把握を目指したい。

研究代表者　風間計博

班員（館内）藤井真一、丹羽典生

（館外）金子正徳、河野正治、北村　毅、桑原牧子、小杉　世、長坂　格、西村一之、比嘉夏子、深川宏樹、深田淳太郎、森亜紀子、山口裕子、吉田匡興

研究会

2019年６月29日（土）13：30～19：00（国立民族学博物館　第４演習室）

深田淳太郎（三重大学）「遺骨収容活動における模倣的振る舞いと死者との接続」

質疑応答

丹羽典生（国立民族学博物館）「紛争後におけるフィジー少数民族の歴史実践の比較分析」

質疑応答

全員「全体討論」

2019年７月20日（土）13：30～19：00（国立民族学博物館　第４演習室）

酒井朋子（神戸大学）「長期紛争体験の語りにおけるユーモア――北アイルランド紛争の常態化、倫理的試行としての笑い」

質疑応答

神原ゆうこ（北九州市立大学）「スロヴァキアの民族混住地における対立の外在化と共生の語り――多様化するハンガリー系マイノリティが語る不満と語らない不満」

質疑応答

全体討論

2019年10月26日（土）13：30～19：00（国立民族学博物館　第２演習室）

下田健太郎（慶應義塾大学）「想起される水俣病経験――移ろいゆく行為者への視点」

質疑応答

飯高伸五（高知県立大学）「慰霊と観光の狭間で――ペリリュー島における戦争の記憶をめぐるエイジェンシー」

質疑応答

全体討論

2019年11月30日（土）13：30～19：00（国立民族学博物館　第４演習室）

伊地知紀子（大阪市立大学）「済州４・３をめぐる経験と感覚――朝鮮半島と日本の近現代と他者」

質疑応答

小杉　世（大阪大学）「クリスマス島における英米核実験――キリバス民間人の視点から」
質疑応答
全体討論

成果

本年度は、共同研究会を４回開催した。特別講師３人を含む８人が発表を行い、総合的に討論した。

ソロモン諸島で戦死した日本兵の遺骨収容活動（深田）、パラオの戦跡観光をめぐる現地日系人を含む多様なアクターの実践（飯高）において、太平洋戦争後70年以上経た現在でも、遺骨や遺物が現在の人々を突き動かす状況が明らかになった。モノに着眼して水俣病の現状をみると（下田）、苦難の記憶が石像を生み出し、モノと記憶が絡み合う様相が看取された。一方、クリスマス島住民は、英米核実験の危険性を感じていなかったが、外部者が知識を導入して放射線への不安が喚起され、被曝の記憶は再編された（小杉）。

紛争後フィジーでは、先住系住民の優遇法制の下、父系社会における母系親族への権利（ヴァス権）が移民子孫の言説に流用され、相互関係が探られていた（丹羽）。「済州４・３」事件以降、分断された住民は、凄惨な経験の語りえない感覚や感情を生起させながら、共存し続けていた（伊地知）。北アイルランド紛争の語りには、悲惨な恐怖体験にもかかわらず、自虐的「笑い」が付随していた（酒井）。スロヴァキアのハンガリー系住民と主流社会の住民は、歴史と言語を巡る微妙な軋轢のなか、日常的平穏を保っていた（神原）。

このように、戦争の痕跡、病いや放射線被曝、エスニックな対立や紛争に関わる他者接触の多様な事例において、歴史記憶と物質性、語りと沈黙、感覚や感情が複合的に絡み合いながら、矛盾を含む複雑な人々の相互行為が生起される様態を明示した。研究発表と討議を通じて、個別の歴史や地域による特異性が明らかにされただけでなく、差異を超えた共通事象を見出す可能性を把捉することができた。

「伝統染織品の生産と消費――文化遺産化・観光化によるローカルな意味の変容をめぐって」

本研究では、ローカルな生活世界において一定の社会的・文化的意味と機能を持ち、使用されてきた伝統染織品が商品化され、従来の生産と使用の文脈を離れた市場に流通するようになった過程を考察対象とする。とくに、ローカルな文脈に根付いた文化実践を国単位のものとしてグローバルな文脈に引き上げ、可視化する無形文化遺産の認定や、商品としての販路開発と結びつくと同時に外部者からの評価を強化する観光化が、アジア地域を中心とする各地の伝統染織品の生産と消費にどのような効果や影響をもたらすのかという点を議論の軸とする。具体的には、1）個別の伝統染織品に対してどのような価値づけが行われるようになったか、2）個別の伝統染織品が生産者および生産者を取り巻く社会において保持してきたローカルな意味がどのように変容してきたか、3）そこに生じる変容は、伝統染織生産に用いられる技法や素材の選択にも影響を及ぼしているかといった課題に取り組む。

研究代表者　中谷文美
班員（館内）上羽陽子
（館外）青木恵理子、五十嵐理奈、今堀恵美、落合雪野、金谷美和、窪田幸子、佐藤若菜、杉本星子、田村うらら、松井　健、宮脇千絵

研究会

2019年５月25日（土）13：00～18：00（国立民族学博物館　第６セミナー室）
佐藤若菜（新潟国際情報大学）「収集・分析・撮影・展示される民族衣装――日本が中国少数民族文化に与えた影響に着目して」
今堀恵美（東海大学）「ウズベキスタンのシルクロード観光イメージとウズベク刺繍のローカルな意味の変容」
モノ語り　Part III 「バリ農村における＜伝統染織＞の生産」中谷文美（岡山大学）

2019年５月26日（日）10：00～16：30（国立民族学博物館　第６セミナー室）
落合雪野（龍谷大学）「手織り布をめぐるアグリツーリズムの展開――ラオス北部のタイ系コミュニティーから」
日下部啓子（首都大学東京）「語られる織布――トラジャの慣習復興におけるアイデンティティの在り処としての機織りをめぐって」
総合討論

2019年７月７日（日）10：00～17：00（石川県政記念しいのき迎賓館［石川県金沢市］）
松村恵里（金沢大学）「加賀友禅の成立背景と現在――加賀の友禅のつくり手とはだれか」
モノ語り　Part IV「絨毯と出会う、織り手と出会う」田村うらら（金沢大学）

総合討論

2019年12月 8 日（日）10：00〜18：00（国立民族学博物館　第 4 セミナー室）

丹羽朋子（国際ファッション専門職大学）「EC フィルムとは何か？＜紡ぐ・綯う・編む・織る＞映像の活用をめぐって」

EC フィルム上映＋ディスカッション

総合討論

2020年 2 月16日（日）10：00〜18：00（国立民族学博物館　第 1 演習室）

松井　健（東京大学）「現在のキモノの生産・流通・消費について――『キモノストック』という視点」

中谷文美（岡山大学）「布とバスケタリー――線具としての『ヒモ』への注目から見えること」

モノ語り　Part V「中国雲南省モン衣装の変化」宮脇千絵（南山大学）

総合討論と次年度の計画策定

成果

今年度は 4 回の研究会を開催した。第 1 回は、まだ 1 巡目が終わっていないメンバーがそれぞれの調査地域に関する研究報告を行ったほか、特別講師として織物の実作者でもある日下部啓子氏を招いた。第 2 回は、金沢での館外開催とし、加賀友禅作家でもある松村恵里氏を特別講師としたほか、加賀友禅及び能登上布の製作現場を訪問した。第 3 回は、国立民族学博物館が所蔵するエンサイクロペディア・シネマトグラフィカ（EC）映像のうち、「紡ぐ・綯う・編む・織る」行為を取り上げたものを素材別・技法別に上映し、特別講師の丹羽朋子氏とともにディスカッションを行った。第 4 回からは、メンバー報告の 2 巡目を開始した。各回を通じて「モノ語り」Part III〜V も実施し、実際に布製品を持ち寄って全員で熟覧しつつ、収集の背景や時代の変遷による生産形態、素材、技法、用途などの変化についてのプレゼンテーションとディスカッションを行った。個別の調査地における現況の詳細な理解に加え、メンバーによる布生産地でのインタビューやフィルム視聴といった経験を共有することで、知見を深めた。

また、今年度はメンバーの大半が参加する英文論文集（Fashionable Traditions: Asian Handmade Textiles in Motion）を刊行することができた。

「心配と係り合いについての人類学的探求」

ケアの実践と社会の制度や規範との関係を扱った従来の研究においては、それらの実践が当該社会に所与の価値規範をどのように実現しているか、あるいはその実現に失敗しているかが問題となることが多い。それに対して本研究では、人々が日常的に経験する心配や係り合いが、いかなる価値や秩序の産出に寄与しているのかを問うものである。本研究ではそのような価値を産出する関係性、およびそこに動員される知識や資源の総体に関する探究をケアの生態学と呼ぶ。本研究の枠組みは、いわゆる高福祉国家とそうでない国家とを隔てる制度的差異や、地域によって異なるケアの規範と実践の差異による制約を受けることなく、世界におけるケア実践の多様性を分析・考察の対象とすることを可能にするものである。本研究に参加する研究者は、医療人類学、政治人類学、地域研究および隣接する研究領域で蓄積されてきた方法や知見を持ち寄ることで、ケア実践を包括的に分析する枠組みづくりに貢献すると同時に、その成果を自らの民族誌的記述に反映することができる。

研究代表者　西　真如

班員（館内）森　明子

（館外）有井晴香、池見真由、大北全俊、加藤敦典、佐藤奈穂、内藤直樹、中村沙絵、馬場　淳、浜田明範、モハーチ　ゲルゲイ、森口　岳

研究会

2019年 6 月 8 日（土）14：30〜16：00（国立民族学博物館　大演習室）

桑島　薫（名城大学）「『ヴィータ――遺棄された者たちの生』合評会」

2019年 6 月 9 日（日）10：30〜13：00（国立民族学博物館　大演習室）

内藤直樹（徳島大学）「『管理の場』における心配と係わり合い――メガキャンプにおける難民とホストによる市場の形成」

森口　岳（東京農業大学）「家族の政治学――ウガンダのスラムの一家族を事例に、ケアと葛藤をめぐって」

総合討論

2019年10月19日（土）13：30〜17：30（国立民族学博物館　大演習室）
馬場　淳（和光大学）「『逃走』する男をめぐるケアの生態学」
森　明子（国立民族学博物館）「社会的なものをめぐるプロジェクト——1980年代西ベルリンにおける試みとその後の展開」
討論
2019年10月20日（日）9：30〜13：00（国立民族学博物館　大演習室）
佐藤奈穂（金城学院大学）「脱経済成長時代における“幸福”の実証研究に向けて——所得・資産・ケアの視点」
モハーチ ゲルゲイ（大阪大学）「毒性の治療薬——どん底における薬草栽培をめぐって」
討論
2020年２月８日（土）13：30〜17：30（国立民族学博物館　大演習室）
野村亜由美（首都大学東京）「『こころが強い』ひと——津波被災後のスリランカでいきる老人たち」
大北全俊（東北大学）「日本のHPVワクチン副反応報告をめぐる論点」
討論
2020年２月９日（日）9：30〜13：00（国立民族学博物館　大演習室）
加藤敦典（京都産業大学）「ベトナム語におけるかわいい／かわいそうをめぐる情動と規範の文化論」
西　真如（京都大学）「ケアの生態学について」
討論

成果

2019年６月の研究会では、ケニアとタンザニアの難民キャンプにおける市場形成（内藤）およびウガンダのスラムで生活する家族の葛藤（森口）に関する報告を踏まえ、統治とケア実践との関わりについて検討した。10月の研究会では、日本の都市で断片的な関係性を生きる男性（馬場）、ドイツの都市で生活するトランスナショナル家族とケア関係の創出（森）、カンボジア農村における多様なケア実践を可視化する実証的研究のメソッド（佐藤）、ベトナムにおける環境と健康の相互作用の場としての薬草園（モハーチ）に関する報告を踏まえ、従来の規範や制度に回収されない社会的・生態学的ケアの実践について議論した。2020年２月の研究会では、スリランカで認知症や精神疾患を抱えて生活する高齢者（野村）、日本の予防接種行政における「公的責任の縮小」とHPVワクチンの副反応問題（大北）、ベトナムの農村における道徳、情動、および生きづらさ（加藤）に関する報告を踏まえ、ケア実践に関わる統治性と道徳性についての議論をおこなった。

「統治のフロンティア空間をめぐる人類学——国家・資本・住民の関係を考察する」

本研究では、統治のフロンティア空間、つまり国家の中心部から隔たれ、統治の遂行が希薄である空間の動態に着目する。J・スコットやI・コピトフ、P・クラストルは、国家と国家に捕捉されざる住民との関係を各地域レベルで論じた。だが、近代国家による統治は普遍的な特徴を持つため、国家の進出と人びとの生活の変容との関係には、特定地域を超えた共通性が存在すると考えられる。本研究ではアフリカ・東南アジア・中南米地域の研究者が集まり、各地域の事例を報告・比較することで、この共通性の抽出を試みる。また上記の研究では、国家と住民との関係を焦点化しているものの、資本の流入に対する関心が低い。そこで本研究では、入植民や商人、企業の進出が、国家と住民の関係にいかなる影響を与えているのかにも目を向ける。それらの作業をとおして、国家による統治と資本主義への接合から完全には逃れられない現代世界で、フロンティア空間の住民がいかに生活の再編を試みているのかを示すことが、本研究の目的である。

研究代表者　佐川　徹
班員（館内）池谷和信、南 真木人
（館外）王　柳蘭、大澤隆将、岡野英之、桐越仁美、日下部尚徳、久保忠行、後藤健志、近藤　宏、鈴木佑記、武内進一、二文字屋脩

研究会

2019年10月27日（日）12：30〜18：00（国立民族学博物館　第１演習室）
佐川　徹（慶應義塾大学）趣旨説明
二文字屋脩（早稲田大学）「タイ北部地域にみるフロンティア空間の動態——（ポスト）遊動狩猟採集民ムラブリを事例に」

大澤隆将（総合地球環境学研究所）「空間認識の錯綜――開発、オラン・アスリ、泥炭」
佐川　徹（慶應義塾大学）「漁労を始めた牧畜民――東アフリカ牧畜社会における国家-資本-住民関係」
総合討論

2019年12月８日（日）12：30～18：00（国立民族学博物館　第２演習室）
佐川　徹（慶應義塾大学）趣旨説明
近藤　宏（早稲田大学）「難民となった都市先住民の『フロンティア』と『多文化共生』――南米・コロンビア太平洋岸の事例」
久保忠行（大妻女子大学）「観光資源としてのフロンティア――ミャンマーのコミュニティ・ベースド・ツーリズム」
鈴木佑記（国士舘大学）「二つのフロンティア――タイ領アンダマン海域における国家・資本・海民モーケンの関係性を探る」
総合討論

成果

今年度第１回目の研究会では、国家や企業からフロンティアとして同定される国家の周縁地域（タイ、インドネシア、エチオピア）の住民の対応に焦点をあてた。その結果、移動性の確保やアナーキーな生活実践など、フロンティア空間に生きる人びとによる国家や資本の進出への対応の特徴が明らかとなった。第２回目の研究会では、紛争や政治的抑圧、災害により故地を追われたり、故地へ帰還した人たちがつくるフロンティア空間（コロンビア、ミャンマー、タイ）に焦点をあて、国家、資本、住民の三者関係の多様なあり方が示された。次年度は、経済的利益の獲得を求めて外部からフロンティア空間に参入してくる企業や商人、入植者の観点から、またフロンティア空間への統治の貫徹を目指す国家の観点から調査研究を進めているメンバーが発表をおこない、フロンティア空間の全体的把握を目指すことになる。

「グローバル時代における『寛容性／非寛容性』をめぐるナラティヴ・ポリティクス」

急激にグローバル化が進展し、人間の移動が激しさを増すとともに、多文化的状況が今後さらに進展することが予想される。西欧の列強と呼ばれた国々では、かつての植民地から大量の移民が流れ込み、逆植民地化とも呼ぶべき、ある意味では予想外の、だが、ある意味では、必然の結果とも言うべき、皮肉な現象が起きている。こうした地球規模の社会環境の変容に加えて、従来の口承性や書承性を超越するメディア環境の変容の影響下で、文化的他者認識としての「異人」を迎える側の経験は、その質と量において、かつての「異人論」が想定していた状況とは比べものにならない規模となっている。さらに、この大量移動の時代は、程度の差こそあれ、誰もが自らも異人となる経験を持つことが当たりとなっている。問題は、こうした状況において、大小さまざまなコンフリクトが発生し、「不寛容」社会が出現しつつある点である。

本研究では、こうした状況を解明し、これに応答するために手がかりとするのが、「異人論」である。文化人類学及び民俗学の学問的伝統においては、外部から訪れる他者、すなわち「異人」に対する歓待や排除、蔑視あるいは畏怖や憧れなどの観念や行動をめぐって、「異人論」と称される研究の蓄積がある。本研究では、「異人論」という視点や方法を再考し、鍛えなおすことで、人文科学の立場から現代的問題の解決の糸口を探ることを目的とする。

研究代表者　山　泰幸
班員（館内）河合洋尚、韓　敏、西尾哲夫
（館外）岩本通弥、鵜野祐介、及川祥平、小川伸彦、カルディ　ルチャーナ、川島秀一、川松あかり、君野隆久、國弘暁子、小長谷有紀、小松和彦、竹原　新、村井まや子、横道　誠

研究会

2019年６月８日（土）13：00～17：00（国立民族学博物館　第２演習室）
郭　莉萍（北京大学）「中国におけるナラティブ・メディスン研究」
関谷雄一（東京大学）「震災復興の公共人類学――災害と向き合う協働研究」
2019年６月９日（日）９：00～13：00（国立民族学博物館　第２演習室）
川島秀一（東北大学）「『寄りもの』と災害伝承」
王　鑫（北京大学）「中国の天狗伝承」
2019年11月２日（土）14：00～18：00（国立民族学博物館　第１演習室）

國弘暁子（早稲田大学）「現代インドにおける異人のゆくえ――グジャラートのヒジュラとサバルタン問題に関する考察の事例から」
岩本通弥（東京大学）「『迷惑』と非寛容――家族に異人が入ること」
2019年11月３日（日）10：00～13：00（国立民族学博物館　第１演習室）
周　星（愛知大学）「異人としての留学生グループ――寛容性／非寛容性の観点から」
今後のスケジュールと進め方
2019年12月７日（土）13：00～17：00（国立民族学博物館　第１演習室）
館内展示の見学
島村恭則（関西学院大学）「民俗学・ヴァナキュラー・ナラティヴの権利――民俗学的視角とはいかなるものか」
Kim Jinah（Université Sorbonne Nouvelle-Paris 3）
2019年12月８日（日）10：00～13：00（国立民族学博物館　第１演習室）
及川祥平（成城大学）「末裔の組織における差異化と排除」
鵜野祐介（立命館大学）「在日コリアンの説話伝承とパンソリ」
2020年１月25日（土）13：00～17：00（国立民族学博物館　第３演習室）
足立重和（追手門学院大学）「語りはなぜ社会学の問題になるのか」
川松あかり（東京大学）「『異人による町』としての炭鉱町とその『記憶』――旧産炭地筑豊における調査事例から」
2020年１月26日（日）10：00～13：00（国立民族学博物館　第３演習室）
竹原　新（大阪大学）「現代イランの祭り」
君野隆久（京都造形芸術大学）「『捨身の仏教――日本における菩薩本生譚』をめぐりて」

成果

2019年度は、異人論を構成する基本概念である「異人」、「異類」、「他者」などをめぐり、これらに関連する説話・民話を取り上げて、それらの物語が語られている社会状況を視野に入れて、各地の文化人類学的・民俗学的研究調査の成果と関連づけながら検討したく。「異人」をめぐる排除、あるいは歓待や包摂をめぐる物語の構造・論理を析出し、さらにそれを支える社会的状況に着目しながら検討を加えていくことは、説話・民話などの物語のテキスト内部の分析に終始することなく、つねに社会との関わりのなかで、物語を捉えていくという本研究の基本的な立場であり、研究メンバーに共通の認識として周知を試みた。持ち回りで、各メンバーの調査研究対象である事例の発表を実施した。海外から「ナラティブ・メディスン」の研究者を迎えて際研究会を実施したのが特筆すべき成果である。「語り」に関する社会学理論、「ナラティヴの権利」に関する民俗学の最新の研究などについてもゲストを迎えて研究会を実施し、従来的な説話・民話にとどまらず、新たなメディア環境・物語表現のなかでの異人をめぐる表象や、大量の難民や移民と受け入れ先の社会との間で発生している現代的な「異人問題」との関係性も視野に入れて検討をした。

「カネとチカラの民族誌：公共性の生態学にむけて」

本共同研究の目的は、「利己性」と「経済」という視点から、公共性概念に関する人類学的な考察を深めることにある。そのために、近年の情報通信技術の発展のもとで営利を追求する諸主体（企業・NGO・個人・コミュニティ等）による実践に焦点をあてる。そして利己的な主体による、生存上の必要（食・住居・教育・医療・福祉等）の充足に関わるやりとりが、公的な領域やネットワークを創発する事例に関する民族誌を比較検討する。これらの検討を通じて、グローバルな政治経済的状況における公共性をめぐる諸問題に対する人類学的な応答の方途を構想する。それは、社会が成立する保証が無い状況から、社会がいかに立ち上がるか考察することでもある。そのために本共同研究では、市民社会やその規範的価値の存在を前提視しえない状況における、①それぞれの生存を追求しようとする多様な主体による利己的な行為に焦点をあて、②物質やエネルギーの移動をともなう相互行為としての経済に注目し、③それが特定の価値や倫理を帯びた場所やネットワークを産出する事態を社会的なものの創発として捉え、その機序を検討することを通じて「公共性の生態学」を構想する。

研究代表者　内藤直樹
班員（館内）工藤由美、森　明子
（館外）飯嶋秀治、岩佐光広、岡部真由美、北川由紀彦、木村周平、久保忠行、沢山美果子、髙橋絵里香、内藤直樹、中野智世、藤原辰史、丸山淳子、三上　修、モハーチ　ゲルゲイ、山北輝裕

研究会

2019年７月20日（土）13：30〜19：00（国立民族学博物館　大演習室）

北村光二（岡山大学）「相互行為システムのコミュニケーションの再生産を支える『社会』の自己生成――トゥルカナのコミュニケーションを事例として」

菅原和孝（京都大学）「カラハリ狩猟採集民グイ／ガナの安寧（well-being）と受苦（suffering ）」

丸山淳子（津田塾大学）「サン社会における『分かち合うこと』と『疲れること』――台頭する『シェアリング経済』を参照に」

討論

2019年７月21日（日）９：00〜13：00（国立民族学博物館　大演習室）

岩佐光広・赤池慎吾（高知大学）「魚梁瀬森林鉄道と生をめぐる営み――女性のライフヒストリーを手がかりに」

総合討論

2019年11月９日（土）13：30〜18：00（国立民族学博物館　大演習室）

藤原辰史（京都大学）「『分解の哲学』について」中野智世（成城大学）「近代ドイツにおけるケアの空間――カトリック系慈善施設の事例から」

全員討論

2019年11月10日（日）９：30〜15：00（国立民族学博物館　大演習室）

工藤由美（国立民族学博物館）「マプーチェ医療をめぐる国家・先住民関係」

髙橋絵里香（千葉大学）「民営化／私事化する福祉国家――フィンランドの高齢者ケア制度にみる私的領域間の対立と共謀」

総合討論

2020年１月25日（土）13：30〜19：00（国立民族学博物館　大演習室）

森　明子（国立民族学博物館）「EU 農業政策とホーフ――オーストリアの事例」

沢山美果子（岡山大学）「カネと公共圏から見た日本近世の捨て子たち」

久保忠行（大妻女子大学）「境界的（liminal）なものがつくる公共空間の可能性――観光客と難民」

討論（全員）

2020年１月26日（日）10：00〜14：30（国立民族学博物館　大演習室）

北川由紀彦（放送大学）「『新宿段ボール村』再考」

山北輝宏（日本大学）「新しい物質主義的社会学とハウジング・ファースト」

総合討論（全員）

成果

① **社会の創発と衰退／崩壊／転換に関する動態の記述**：たとえば過疎化という人口減少は、しばしば「社会そのものの崩壊」であるかのように語られる。また、難民キャンプのような庇護の空間は一時的なものとして設置され、問題が解決された際には閉鎖される。本共同研究会では、社会の創発だけでなく、その衰退／崩壊／転換に関する諸アクターによる連関の動態に注目することの意義について検討した。

② **危険な存在としての他者との連関の創発**：他者との共存とをめぐる困難に注目する視点の重要性について確認した。ここで言う「他者」とは、理解や制御の外部に存在する対象のことを意味する。それは慣習や制度による「理解」の直下に存在し続ける、理解や制御の外部としての他者との連関を我々はどのようにおこなっているのかという問いである。

③ **アクター間の「もつれ」の創発／消滅に関する民族誌的記述**：この世界はヒト以外の生物や物質を含めた諸アクターによる連関によって形づくられている。今年度はアクター間に「もつれ（tangle）」が形成される動態に注目することの重要性を確認した。本共同研究では、そうした「もつれ」をサルベージして道徳的な価値付けをおこなうというよりは、その創発や消滅に関する民族誌的な記述を志向する。

「拡張された場における映像実験プロジェクト」

現場での観察や実測に基づくフィールドワークなど人類学的な手法が、美術、特に映像表現を含むものにおいて随分多く見られるようになり、また人文科学においても写真、映像、音楽など芸術の手法を活用した研究の必要性を論じるアートベースド・リサーチという考え方が広まりつつある。このように、従来の学問領域を超えたアプローチが日々更新されているという傾向を踏まえ、本研究では、映像人類学者・文化人類学者とキュレーター、アートコーディネーター、美術家といった芸術に関する専門職に携わる者からなるチームを結成し、多様な領域の理論と

現実社会とを芸術を媒介に結びつけることを目指す。異なる領域での活動を行う者が互いにその活動にふれ、交流や協働作業を通してそれぞれの知と技術との交換を可能とする領域横断的な研究活動の基盤作りを推進するとともに、従来の学問それぞれのアーキテクチャー（枠組み、構造）自体を拡張、発展へとつなげていくことを目的とする。

研究代表者　藤田瑞穂
班員（館内）下道基行、川瀬　慈
（館外）奥脇嵩大、岸本光大、佐藤知久、西尾咲子、西尾美也、福田浩久、村津　蘭、矢野原佑史

研究会
2019年６月９日（日）10：00～15：30（国立民族学博物館　第７セミナー室）
田中みゆき「全盲者による映像の可能性／不可能性について」
奥脇嵩大（青森県立美術館）「百姓の眼」
藤田瑞穂（京都市立芸術大学）「変わりゆく街における芸術とアクティビズム」
全体討論
2019年９月15日（日）13：00～17：30（国立民族学博物館　第７セミナー室）
山内政夫（柳原銀行記念資料館）「自主映画『東九条』とその時代」
満若勇咲（映像作家）「制作現場から見たドキュメンタリーについて」
全体討論
2019年11月17日（日）10：00～15：00（国立民族学博物館　大演習室）
小川翔太（名古屋大学大学院）「期待の地平としての映像アーカイブ――帝国観光の映像が露呈する問題」
佐藤知久（京都市立芸術大学）「映像／拡張された場／震災の前と後／現在」
全体討論
2020年２月９日（日）13：00～17：00（国立民族学博物館　映像実験室）
川瀬　慈（国立民族学博物館）、村津　蘭（京都大学）、矢野原佑史（京都大学）「あふりこ――フィクションの重奏／遍在するアフリカ」
金子　遊（多摩美術大学）「ゾミアの遊動民――映画『森のムラブリ』の企画・撮影・上映について」
全体討論

成果
2019年度の研究会では共同研究員ならびに５名の特別講師による研究発表を９本実施した。この全４回の研究会と毎回の全体討論によって、昨年度と比較してより広い専門分野での実践・研究について検証することができた。また本年度には、メンバーの研究成果として２冊の書籍が刊行された。１冊目は、芸術・映像人類学の革新的試みとして、新たなストーリーテリングと問題提起のあり方を目指した「あふりこ――フィクションの重奏／遍在するアフリカ」（新曜社）である。刊行後、本研究会においてその取り組みについての発表ならびに、この書籍が人類学においてどのように評価され得るかなどの意見交換も行った。２冊目は、芸術・映像人類学のコラボレーションとしての研究実践を、映像で捉えた脈動、感覚、時間を書籍の形で収録し、いかに拡張することができるかに挑戦した「im/pulse」（京都市立芸術大学）で、この冊子にはメンバーのうち７名が関わった。これらの本年度の取り組みを経て、最終年度に向けてどのように研究成果発表の形が可能かを検討中である。

「沙流川調査を中心とする泉靖一資料の再検討」

本研究では、国立民族学博物館所蔵の「泉靖一アーカイブ」を対象として、泉によって提示されたアイヌ社会像の再検討を試みる。具体的には、泉靖一が「イオル論」をはじめとするアイヌ社会モデルの構築に至った沙流川流域での調査資料を中心とする基礎データを、今日的な研究成果や社会意義などから改めて読み解くことにより、その新たな学術的・社会的活用の可能性を追究する。

このような目的の下、本研究では、まず①アイヌ研究に関連する文化／社会人類学・歴史学・考古学などの現在までの成果と、②アイヌ文化振興にかかわる諸政策・事業活動の成果を踏まえ、多角的に泉靖一の調査資料・データの再検討を行うことにより、単なる政治・政策的な批判や歴史的事実関係の正否の検証にとどまらない新たな評価や解釈の可能性を追究する。その上で、現在平取町を含む北海道各地で推進されている、「伝統的生活空間（イオル）」の再生事業をはじめとするアイヌ文化の継承や振興に対して、泉靖一の調査資料が果たしうる貢献や役割を検討する。

研究代表者　大西秀之
班員（館内）大塚和義、河合洋尚、齋藤玲子
（館外）石村　智、大塚和義、大西秀之、貝澤太一、萱野公裕、木村弘美、佐々木史郎、長野　環、森岡健治、吉原秀喜

研究会
2019年11月24日（日）13：30～17：30（国立民族学博物館　第３演習室）
大西秀之（同志社女子大学）「共同研究趣旨説明――沙流川流域における泉靖一資料の再検討」
共同研究員自己紹介・研究計画２
2019年11月25日（月）９：30～15：00（国立民族学博物館　図書室・第３演習室）
沙流川流域調査を中心とする「泉靖一アーカイブ」資料の実見
次回研究計画に向けての総合討論
2020年２月10日（月）14：00～17：30（国立民族学博物館　大演習室）
前回確認と趣旨説明
吉原秀喜（平取町役場アイヌ施策推進課）「沙流川流域IWOR構想の経緯・成果展望」
木村弘美（平取町役場アイヌ施策推進課）「イオル事業と『ライブラリー』の可能性」
2020年２月11日（火）10：00～15：00（国立民族学博物館　大演習室）
萱野公裕（萱野茂二風谷アイヌ資料館）「民博と泉靖一資料調査への期待」
長野　環（平取町役場アイヌ施策推進課）「アイヌ文化環境保全対策とIWOR」
総合討論と次回計画

成果
初年度となる2019年度は、まず第１回目に本共同研究の目的を共有するとともに、各メンバーの役割や貢献などを確認した上で、第２回目に沙流川流域調査を中心とするアーカイブ資料の閲覧を行いその検討と活用について意見交換を行った。その結果、本研究会の方向性及び各メンバーの関心は、①泉靖一の調査研究のあり方の検討、②既存のアイヌ調査研究との比較検討・活用、③泉靖一のデータの特にアイヌ民族への還元、という三つにまとめられることを確認した。
次いで開催した第３回目には、二風谷地区を中心とする平取町でアイヌ文化振興事業に取り組んでいる４名のメンバーが、それぞれの活動に関する報告を行い泉靖一アーカイブの活用の可能性を提示した。また第４回目には、過去３回の議論を踏まえ改めて沙流川流域調査の資料検討を行い、同資料を内容・トピックごとに分類し異なる資料を関連づける作業に着手することを決定した。この作業により、泉靖一アーカイブの資料を新たに整理し、具体的に活用する方法を追究することを確認した。

「グローバル化時代における『観光化／脱-観光化』のダイナミズムに関する研究」
本研究は、多様化し拡大する観光現象を文化人類学的に捉え、新たな理論的転回を図ることを目的とする。
1980年代以降、文化人類学は観光という現象に着目するようになった。しかし、観光社会学ではJ.アーリやS.ラッシュらのグローバル論と関連付けながら新たな理論的展開を遂げたのに対し、人類学内部ではその現状をうまく捉えきれず、2000年代以降、観光研究は停滞しつつある。
そして現在、観光の形態はさらに多様化している。それは戦争など負の歴史を次世代へと伝え（ダークツーリズム）、移住を検討させ（移住観光）、自然と人間の共存を教育し（エコツーリズム）、アニメ作品などのファンと交流を図り（コンテンツツーリズム）、衰退した地域社会を再興させるものである（地域文化観光）。つまりこれまでまったく別々の文化現象だったものが、「観光」という文脈に包含されつつあるといえる。
他方、これまで観光の文脈で語られてきたものが、環境破壊や地域住民と観光客とのコンフリクトの増加などにより、制限され、文脈をずらされるという現象も起きている。
本研究ではこれらの過程を「観光化」「脱-観光化」と概念化し、考察を深める。具体的には、①国内外の諸事例がいかにして「観光」の文脈に包含され／「観光」の文脈からずらされていったのか、その詳細を実証的に検討し、②グローバル化の議論を批判的に参照しつつ、人類学全体を見据えた新たな視座の構築を目指す。

研究代表者　東 賢太朗
班員（館内）奈良雅史

（館外） 岡本　健、越智郁乃、紺屋あかり、鈴木佑記、中村香子、福井栄二郎、藤野陽平

研究会

2019年12月14日（土）13：30～18：00（国立民族学博物館　第１演習室）

東 賢太朗（名古屋大学）「共同研究の概要と枠組みに関するプレゼン」

全員「各メンバーの研究紹介と共同研究会での役割」

2019年12月15日（日）10：00～12：00（国立民族学博物館　第１演習室）

全員「今後のスケジュールと進め方、特別講師招聘について」

2020年２月１日（土）13：30～18：00（国立民族学博物館　第３演習室）

遠藤英樹（立命館大学）「モバイル＝デジタル時代の観光――観光を「脱構築」する研究へ」

須藤　廣（跡見学園女子大学）「観光学の近代・ポスト近代」

2020年２月２日（日）10：30～12：00（国立民族学博物館　第３演習室）

全員「招聘講師発表の振り返りと次年度に向けての計画打ち合わせ」

成果

初年度は、２回の共同研究会を開催した。第１回研究会では、メンバー全員が各自のこれまでの研究の紹介と本共同研究内での役割について報告を行った。また、本共同研究の鍵概念である「観光化」と「脱-観光化」について、メンバー間での理解を深め共有するために各自の事例をもとに議論を行った。課題として、観光社会学の知見をどのように取り入れ、またどのように差異化すべきかという点が明らかになった。

その課題をふまえ、第２回研究会では観光社会学の研究者２名を特別講師として招いた。モビリティ社会とポスト近代における観光に関する発表をもとに、近年の観光社会学の研究動向について議論を行った。また「観光化」と「脱-観光化」概念についても、それらの動向に位置付け直し再検討した。その結果、両概念は相反するものではなく、双方が現代社会における観光の変容を反映した動きであることが明らかになった。

「食生活から考える持続可能な社会――『主食』の形成と展開」

本研究の目的は、人類の食生活を生態、文化、社会、歴史の観点から検証し、持続可能な社会を実現するための食生活のありかたを探究することである。そのための作業概念として「主食」を採用する。「主食」に相当する語彙や概念は普遍的ではなく、時代や地域によって多様であるが、「人を肉体的・精神的に養ううえで、中心的役割を果たす食べもの」という一定の定義を与えることで、具体的な食生活中の「主食」の諸相から、対象とする社会や集団における食のあり方とその背景をより端的に浮かび上がらせることが可能となる。

食生活とは、食品の生産、加工、流通、消費、調理、廃棄の過程であり、自然環境、価値観、教条、法律や制度、経済条件、身体的な欲求や生理的条件、個人的な嗜好などが、人間の営みを通して密接に関連しあっている。それらの関連性を「主食」という作業概念にそって整理し、考察することにより、地球規模で人間が引き起こしている食の問題を明らかにする。そのうえで、人類学を中心に、歴史学、調理学、体育学などの食生活を理解するうえで核となる諸分野による学際的な議論を通して、人類の食生活のあるべき姿を検証したい。

研究代表者　野林厚志

班員（館内） 池谷和信、宇田川妙子、大石侑香、菅瀬晶子

（館外） 梅崎昌裕、木内敦詞、佐藤廉也、中澤弥子、那須浩郎、濱田信吾

研究会

2019年10月14日（月）10：00～16：00（国立民族学博物館　第４演習室）

野林厚志（国立民族学博物館）「主食研究の趣旨と全体の構想」

参加者の研究の構想

2020年１月13日（月・祝）10：00～18：00（国立民族学博物館　第３演習室）

次年度発表に関する懇談（次年度発表予定者）

先住民族の生活文化に関する展示見学（全員）

野林厚志（国立民族学博物館）「第２回研究会の趣旨説明」

那須浩郎（岡山理科大学）「農耕のはじまりと主食の形成」

佐藤廉也（大阪大学）「根栽農耕とイモ食」

総合討論

成果

本年度は当初の研究計画にしたがい、代表者からの研究全体の見通しと構想、共同研究員による研究の展望と貢献の計画について議論を行ったうえで（第１回目）、人間が主食としてきた主要な作物である穀類、豆類、根栽類について、人類史的なスケールもあわせた利用の歴史や社会的な位置づけに関する発表をえた。発表を受けての総合議論では、主食という存在が農耕と不可分の関係にあるのか、穀物と根栽の属性の違い（植物としての性質――保存性、生産量、キャリング・キャパシティ、季節性、自然環境との調和性、文化的観点からの性質――小象徴生、料理への適用、副菜との組み合わせ、歴史的観点からの性質――ドメスティケーションの過程、税）といった諸点について検討を行なった（第２回目）。主食という概念が通文化的に適用できるかどうか、また、その概念がさす具体象の多様性や時代変化等、次年度以降の研究発表や議論に組み込んでいく内容について深化させた。

「社会・文化人類学における中国研究の理論的定位――12のテーマをめぐる再検討と再評価」

中国社会を対象とする人類学的研究は20世紀前半より本格的にはじまり、日本、欧米、中国国内の研究者によりさまざまな研究が展開されてきた。早期には「未開」社会とは異なる複合社会の研究を推進する舞台として期待され、1960年代になるとアフリカ研究との比較の対象として民族誌が著された。ところが、その後の中国研究は「独自」の路線で議論を進めるようになったため、同じ東アジア研究ですら対話が難しくなり、人類学において半ば「孤立」した立ち位置に置かれるようになっている。だが、中国をめぐる人類学的研究を振り返ると、国家-社会関係論、ポリティカル・エコノミー論、個-全体論、存在論など、現代人類学の先駆けともいえる議論が早期から展開されてきたことに気づかされる。本研究は、中国研究で多くの蓄積がなされてきた12のテーマ（親族、ジェンダー、コミュニティ、エスニシティ、宗教、風水、生態、食、芸術、観光、メディア、都市）をとりあげ、その理論史を整理することで、人類学一般の理論と対話をなすことを目的とする。

研究代表者　河合洋尚
班員（館内）横田浩一、韓　敏、奈良雅史
（館外）阿部朋恒、稲澤　努、川口幸大、川瀬由高、小林宏至、櫻田涼子、田中孝枝、中生勝美、丹羽朋子、藤野陽平、堀江未央

研究会

2019年11月30日（土）14：00～18：00（国立民族学博物館　第１演習室）
河合洋尚（国立民族学博物館）「趣旨説明」
参加者全員「共同研究員自己紹介・研究計画」
2019年12月１日（日）10：00～15：00（国立民族学博物館　第１演習室）
中生勝美（桜美林大学）「中国の人類学展望――学史と現状から」
河合洋尚（国立民族学博物館）「中国都市の人類学――都市性と都市景観をめぐる研究動向」

成果

※原稿に記述がありません

「人類史における移動概念の再構築――『自由』と『不自由』の相克に注目して」

本研究は、人類史における移動概念を、特に「自由」と「不自由」の相克に注目して再検討し、移動研究の新たな地平を築こうとするものである。人が移動する要因には、迫害や紛争、あるいは天災など生存に関わる現象からの「避難」、特定の集団や個人に対する「強制」、自由意志が先立つ「移住」などさまざまな位相がある。このなかで「強制」については、とりわけ移動者の不自由性や被害的側面、悲劇性ばかりが強調され、移動者は主体性のない存在として理解されてきた。これに対して、本研究では、「強制」に含まれる移動現象（たとえば、奴隷貿易、強制移住、契約労働、政治難民）を軸に、時間軸と空間軸との結節点が異なる事例を研究対象として取り上げ、それぞれの事例において、不自由と自由がどのように相克しているのかを検討し、事例間の比較を試みながら、人類史における移動概念について再検討する。具体的には、移動を生じさせた政治的、宗教的、経済的、あるいは文化的、自然環境的な要因を踏まえながら、他方で、移動する人や集団の立場から移動現象を捉えなおす。このようにマクロな視点とミクロな視点とを交錯させ、「自由」と「不自由」の相克に着目しながら、コンテクストの異なる多様な

移動を比較・連関させることで、人類史における移動研究の新たな展開に資する概念の再構築を目指す。

研究代表者　鈴木英明
班員（館内）杉本　敦、池谷和信、新免光比呂、寺村裕史、三島禎子
（館外）小林和夫、左地亮子、薩摩真介、園田節子、田中鉄也、馬場多聞、向　正樹

研究会
2019年12月７日（土）14：00～18：00（国立民族学博物館　第４演習室）
鈴木英明（国立民族学博物館）開会のあいさつ
自己紹介（参加者全員）
鈴木英明（国立民族学博物館）「移動概念の現状と可能性」
総合討論

成果
本年度は、2019年12月７日に第一回研究会を行った。その場では、まず、研究代表者から趣旨説明を行い、続いて、ブレインストーミングとして参加者全員による自己紹介を行い、各自の問題関心を確認しあった。その後、再び研究代表者による「移動概念の現状と可能性」と題する報告が行われ、その後、質疑応答を経て、本研究会の問題関心を共有した。

「島世界における葬送の人類学――東南アジア・東アジア・オセアニアの時空間比較」

アフリカ大陸で誕生した私たち現生人類＝ホモ・サピエンスは、約５万年前頃までにはアジアやオセアニアの島嶼域への移住を開始した。一方、人類による葬送行為も私たちホモ・サピエンス以降に活発化し、発展してきたと考えられている。その萌芽的な痕跡はアフリカ大陸や西アジアで確認されているが、アジア・オセアニアへの島世界へと移住した人類集団も、その初期から墓葬や埋葬行為を行っていた痕跡が、各地で発見されつつある。本研究の目的の一つは、人類史的には大陸部で誕生したと考えらえる葬送行為や墓葬文化が、島世界という独特な環境への移住後、どのように変容し現在に至るのかという時間軸による検討を行うことにある。ついで二つ目の目的は、アジア～オセアニアの島嶼域を大きく東南アジア・台湾・日本の南西諸島・オセアニアという４つの地域に分けたうえで、その地域性を人類の島嶼適応や移住といったテーマを軸とする人類史的な視点から検討することにある。また時間軸による検討では、アジア・オセアニアにおける現生人類の歴史と重なる５万年程度の幅の長期的な考古学的時間軸と同時代を含む約100年程度の幅の民族誌的時間軸を比較の準拠枠とする。本研究では、考古学と文化人類学を軸に分野横断的な比較検討を行うことで、島世界の葬送や墓葬にみられる普遍性、歴史性、地域性を明らかにしたい。

研究代表者　小野林太郎
班員（館内）印東道子、池谷和信、丹羽典生、野林厚志
（館外）秋道智彌、片岡　修、片桐千亜紀、後藤　明、新里貴之、鈴木朋美、角南聡一郎、竹中正巳、田中和彦、前田一舟

研究会
2019年11月12日（火）13：00～18：00（国立民族学博物館　大演習室）
小野林太郎（国立民族学博物館）「共同研究の趣旨説明と目的の紹介――島世界における葬送の人類史」
片桐千亜紀（沖縄県立埋蔵文化財センター）「琉球列島における崖葬墓と島世界における人類史」
メンバーによる展示見学
前田一舟（うるま市立海の文化資料館）「近世以降における琉球列島の葬墓と葬送」
ディスカッション・今後の計画についての検討
2020年２月８日（土）13：30～18：00（国立民族学博物館　第４演習室）
小野林太郎「第二回研究会の趣旨説明と目的の紹介」
鈴木朋美「ベトナムの二次埋葬と甕棺埋葬」
片桐千亜紀「インドネシア・トラジャ族による風葬・崖葬墓」
総合討論

成果

初年度となった本年度の共同研究では、計２回の研究会を実施し、本研究の趣旨や目的の共有をメンバー間でまず行った。また１回目の研究会では対象とする島嶼域のうち、とくに東アジアの島嶼域となる琉球列島における葬送や葬墓の特徴を、その歴史的変遷も踏まえつつ事例発表に基づき議論した。また議論を進める中で、葬送や葬墓といった語句の定義についても検討を進め、メンバー間での共通認識を形成することができた。２回目の研究会では、東南アジアの事例を対象とし、比較の視点から大陸部となるベトナムの事例と島嶼部となるインドネシアの事例を検討し、島嶼部における葬送や葬墓の特徴について議論を重ねた。その現時点での成果として、琉球列島における事例も含め、島嶼部において頻繁にみられる葬墓として、石灰岩洞窟や岩陰を墓域とし、二次葬や風葬といった葬送により死者を葬る「崖葬墓」が一つの鍵になる可能性を確認することができた。

「感性と制度のつながり――芸術をめぐる『喚起』と『評価』のプロセスから考える」

本共同研究は、制作や展示といった芸術実践において、モノゴトや制度などの非人間を含めた諸存在の働きにおける「喚起」と「評価」のあり方に注目し、感性と制度の不可分なありさまを検討していく。

芸術の人類学では1980年代後半から、美や芸術の普遍性を前提とすることが孕む権力性に基づき、地域の実践とグローバルな制度の関係が問題にされてきた。他方で、1990年代末以降は物質文化研究やエージェンシー論が隆盛し、人やモノゴトの働きの連鎖や相互生成のありさまが提示されてきている。しかし、後者で注目を浴びた「喚起」や「魅惑」と、前者で問題になっていた制度や審美的判断がどのように結びついているのかは、十分に検討されてこなかった。

そこで本共同研究は、世界各地の絵画や生活造形、音楽、古今東西の景観、パフォーマンスなどを含む芸術実践における「喚起」と「評価」の多様なあり方を明らかにしながら、感性と制度的領域が不可分に結びつくさまを検討していく。

研究代表者　緒方しらべ
班員（館内）登久希子、寺村裕史
　　（館外）兼松芽永、竹久　侑、田中理恵子、橋本　梓、長谷川新、光本　順、渡辺　文
　　（※2019年度産休のため休会）

研究会

2019年12月15日（日）13：30～18：00（国立民族学博物館　第４演習室）

緒方しらべ（大阪大学）「研究会全体の趣旨説明」
共同研究員全員「自己紹介と本研究の展望」
緒方しらべ（大阪大学）、兼松芽永（女子美術大学）「本研究に関わる人類学の先行研究概要」
寺村裕史（国立民族学博物館）「本研究に関わる考古学の先行研究概要」
長谷川新（インディペンデントキュレーター）「本研究に関わる芸術学の先行研究概要」
共同研究員全員「先行研究を踏まえ、問題の所在や研究方針についての全体討論」

成果

初度に開催した研究会（１回）では、まず、人類学、芸術学、考古学の３分野における、本研究テーマに関わる先行研究とキーワードの確認と議論を行った。その結果、主に３点について明確にすることができた。1)「感覚」については、視覚、聴覚、嗅覚、味覚、触覚という五感だけではなく、それらが複数あわさった多感覚的経験をも視野に入れる。また、個々の感覚と、社会的に共有されたものの差異にも注目する。2)「制度」については、アートワールドというグローバルな制度に加え、法や規範、政治や経済、教育などの諸制度や、各フィールドでの制度化された慣習や暗黙の了解なども含め、広義に捉える。3)「美」については、「美しいか」と「喚起されるか／魅惑されるか」を相互に置き換えて考察することで、美をめぐる制度的領域と感性的領域の結びつきを検証していく。

このように、次年度から個人発表を進めていくにあたっての重要な概念と理論について議論することができた。

「モビリティと物質性の人類学」

グローバル化の進展にともなって、人々の移動はますますその規模と多様性を増している。本研究の目的は、生業活動から観光まで、現代世界の人々が地球上を移動してゆく様々なあり方について知見を集積するとともに、人間の移動には不可避的に伴う物質的な側面を特に焦点化しながら比較分析することである。本研究ではまず、人々

の移動を共通項として研究を続けているメンバーの事例をもとに、a. 身体、b. インフラストラクチャー、c. マテリアリティを鍵概念としてそれぞれの移動に固有の物質的側面を検討する。そのうえで事例間の共通性と差異を、①地域（アジア、ヨーロッパ等）、②移動背景（難民、観光等）、および③移動手段（徒歩、自動車等）の三つを軸に比較分析する。本研究では人々の移動を、人とモノと環境がその都度の状況に応じて個別的な関係を取り結ぶ実践として捉え、上記の作業を通じてそこに内在する様々な物質性（matelialities）の諸相を明らかにしてゆく。

研究代表者　古川不可知
班員（館内）高木　仁、那木加甫、片　雪蘭、八木百合子
　　（館外）左地亮子、土井清美、中野歩美、難波美芸、西尾善太、橋爪太作、村橋　勲

研究会
2019年11月２日（土）13：30～18：00（国立民族学博物館　第４演習室）
　古川不可知（国立民族学博物館）「趣旨説明と研究動向紹介」
　全員「研究テーマの共有」難波美芸（一橋大学）「インフラで考える巡る時間と流れる時間――ラオス北部ルアンナムタ県の流れ橋と鉄道建設」
　全体討論および今後の進め方について
2020年２月１日（土）14：00～18：00（国立民族学博物館　第１演習室）
　村橋　勲（京都大学）「国境地帯のモビリティーズ――南スーダン-ウガンダ間の紛争と交易」
　高木　仁（国立民族学博物館）「東ニカラグア・低湿地インディアンのモビリティーに関わる物質文化」
　総合討論および次年度の研究計画について

成果
　初年度となる本年は、共同研究の趣旨を共有したうえで今後のおおまかな方針を策定した。またメンバーがそれぞれの調査地から移動と物質性をめぐる事例を提示して討議をおこなった。具体的には、第１回にラオスの移動インフラ（難波）を、第２回には南スーダン-ウガンダ国境をまたいでおこなわれる難民の経済活動（村橋）とニカラグアの漁労民の水上移動（高木）を取り上げ、それらの移動を可能とする物質的基盤や、移動パターンが成立・変化した歴史文化的背景、環境条件に応じた移動媒体の素材の差異とその変移などを比較検討した。またインフラの季節性／時間性など、２年目の検討課題とすべきいくつかの新たなトピックを抽出することができた。

研究成果公開プログラムによる館のシンポジウム、研究フォーラム、国際研究集会への派遣

●館のシンポジウム
国際フォーラム「地域文化を活用する――地域振興、地域活性に果たす役割」
2019年10月29日～11月２日　台湾・蘭陽博物館
代表者：日髙真吾

実施状況
　本フォーラムは、台北芸術大学との協定事業の一環として、基幹研究「日本列島における地域文化の再発見とその表象システムの構築」（代表：日髙真吾）、科学研究費（基盤研究（B））「科研教育資源・観光資源としての地域文化遺産の活用と保存」（代表：日髙真吾）の研究成果として実施した。本フォーラムは台北芸術大学との共催で過去２年間開始してきた「地域文化の再発見――大学・博物館の視点から」（2017年度別府大学で開催）、「地域文化を保存する――実践者の視点から」（2018年度高雄市立博物館で開催）の流れを受けたものであり、地域文化を地域においてどのように継承していくのかを考える企画である。
　今回の本フォーラムでは、地域文化の活用について、日本の民俗学や台湾における地方学がどのような役割を果たすのか、また、実際に地域文化の活用を企画する博物館や市民がどのように連携できるのかについて、地域研究を専門とする研究者をはじめ、保存科学者や保存修復家、博物館学芸員や市民から、それぞれの実践活動について講演をおこない、効果的な地域文化の活用について議論を深めた。特に日本の文化財保護法の改正のポイントに観光資源として文化を積極的に活用する動きがあることについて、この改正が活用対象となる文化を生み出した地域にどこまで留意したものなのかを注視する必要があることを確認した。また、地域文化の活用について、地域文化の理解、保存、活用というプロセスを経ることで、地域振興や地域活性の可能性が広がっていくことを明らかにした。

なお、本フォーラムでは、日本と台湾における地域文化の活用について、初日は日本の事例、２日目に台湾の事例を丁寧に議論するプログラム構成とした。そのことで、日本と台湾のそれぞれの課題と展望についてしっかりとした議論ができる環境が生み出され、大きな成果を得ることができた。この成果については、ブックレットを刊行することとしている。

- 聴衆者数：２日間で182名
- 発表者数＝受入数：35名
- 発表者数のうち外国人数：16名

成果

本フォーラムの成果は、来年度ブックレットとして刊行予定。活動報告について、日髙基幹研究HP（http://www.r.minpaku.ac.jp/s-hidaka/）にて掲載予定。

地域研究コンソーシアム年次集会シンポジウム「グローバル化時代の文化力――＜地域知＞のマネージメント」――
2019年11月１日～11月２日　国立民族学博物館
代表者　丹羽典生

実施状況

11月１日から２日にかけて、本館も幹事組織である地域研究コンソーシアムの年次集会を開催した。１日は同コンソーシアムの理事会・運営委員会を開催することで、地域研究関連組織を連携しながら、地域研究を深めることができた。地域研究コンソーシアムは、いま事務局の体制の転換期を迎えており、次年度以降の持続的な組織運営を可能とするための話し合いがなされた。

11月２日は、年次集会に会わせて開催した一般公開シンポジウム（『グローバル化時代の文化力――＜地域知＞のマネージメント』）を通じて、地域研究拠点も抱える本館の地域研究の成果の一端を学術コミュニティに公開した。シンポジウムの趣旨は、交通システムや情報技術の世界的展開は、かつては僻地と呼ばれていたような地域においても先端的な知識のアクセスを容易にしたり、あるいは逆にローカルな地からの積極的な情報発信を可能にするなど、ダイナミックで双方向的な情報の流通が一般的なのもとなりつつあるようなグローバル化時代の文化力のあり方を再考するものである。具体的には、地域知のマネージメントという視点から、アメリカ大陸、ヨーロッパ、中国、日本という世界各地において文化をベースとする情報がいかなる文脈の中で形成され、どのようなかたちで発信され、そしてどのような影響力をもつのか分析がなされた。

成果

シンポジウムには登壇者４名による４本の発表を行い、45名の参加者を募ることができた。それのみならず、本館で開催中の企画展（『アルテ・ポプラル』）と連動して行うことで、シンポジウムの中に展示の実行委員長による展示説明の場を設けた。文化発信の現在を実践的な形で展開した試みであったといえる。

公開シンポジウム「日本におけるユニバーサル・ミュージアムの現状と課題――2020オリパラを迎える前に」――
2019年11月３日～11月４日　国立民族学博物館
代表者：廣瀬浩二郎

実施状況

2019年11月３日から４日、国立民族学博物館で公開シンポジウム「日本におけるユニバーサル・ミュージアムの現状と課題」が実施された。

本シンポジウムには両日とも、全国の博物館関係者を中心に、140名余が参加した。２日間の熱気あふれる議論を通じて、ユニバーサル・ミュージアムに関心を寄せる人の輪、研究と実践のネットワークが確実に広がっている手応えを共有できたのは、シンポジウムの大きな成果といえよう。

民博でユニバーサル・ミュージアムをテーマとする大規模なシンポジウムが開催されるのは、今回が４回目である。2006年の初回シンポジウムでは、米国・メトロポリタン美術館の教育普及担当者に、ソーシャル・インクルージョンの理念に基づく多彩なプログラムの事例を紹介していただいた。「障害者対応は21世紀の博物館にとって重要な課題であり、日本もこれから頑張っていかなければならない」。2006年のシンポジウムが、欧米の先進例に刺激さ

れ、日本でもバリアフリー、ユニバーサルデザインの取り組みが各地の博物館に定着していく契機となったのは確かだろう。

2011年の第２回シンポジウムでは、考古学・自然史系の博物館関係者が中核となり、日本人の発表者のみで、すべてのパネルを組むことができた。従来は子ども向けの事業と位置付けられてきたハンズオン、さわれる展示に「ユニバーサル」の観点を加えることにより、日本の博物館は新たな段階に入った。そんな知的興奮、わくわく感がシンポジウム会場に満ちていたことが印象に残っている。

2015年の第３回シンポジウムには、たくさんの美術館学芸員が参加してくれた。美術館では、彫刻などの立体作品にさわる試みは1980年代から蓄積されてきたが、二次元の絵画に関しては一部の美術館スタッフ、ボランティアが「言葉による解説」を行う程度だった。「視覚障害者にどうすれば絵画の魅力を伝えることができるのか」。この難解な問いは、「そもそも視覚芸術とは何か」という根源的な探究にリンクする。ユニバーサル・ミュージアムは視覚優位、視覚依存の近代的な博物館に対して異議申し立てをする思想運動へと発展した。

そして、2019年の第４回シンポジウムである。今回のシンポジウムの狙いは、作品の制作者であるアーティストを積極的にユニバーサル・ミュージアム運動に巻き込むこと。シンポジウムの各セッションでは「視覚から触覚への変換」を通して、アートがどのように進化・深化するのかについて、活発な意見交換がなされた。シンポジウムに登壇してくださったアーティストの作品は、2020年秋の民博の特別展「ユニバーサル・ミュージアム――さわる！“触”の大博覧会」で展示される予定である。

成果

廣瀬編『ユニバーサル・ミュージアム――「未開の知」に触れる』（小さ子社）を2020年９月に刊行する。（書名、価格、発行部数は検討中）2020年秋の民博の特別展「ユニバーサル・ミュージアム――さわる！“触”の大博覧会」でシンポジウムの成果の一部を公開予定。

世界博物館学ワークショップ「刷新――展示における挑戦とイノベーション」

2019年12月11日～12月14日　国立民族学博物館

代表者：鈴木　紀

実施状況

本ワークショップは、欧米とアジア、オセアニア、ラテンアメリカの博物館学研究者と博物館学芸員18名を集め、博物館学および博物館展示の最新動向について議論した。ワークショップのタイトルである「刷新」（英語はinterruption）は、既存の博物館学の知識を一旦、中断／保留し、新傾向を踏まえた博物館学に刷新していくことを意図して付けたものである。ワークショップには、10カ国から若手研究者を含む16人と、本館の教員３人が参加し、研究発表を行った。

12月11日は参加者の自己紹介を兼ねた各自の研究関心の紹介と質疑応答を行った。12日午前は第１セッション「パラダイムと刷新」を開催し、博物館展示に関する既存のパラダイムが、いくつかの先端的な博物館や学芸員によっていかに挑戦されてきたかを概観した。午後の第２セッション「ヘテロトピアとしての博物館」では、異質で多様な文化を包含する場所として博物館を認識し、その中で行うさまざまなキュレーションの試みを検討した。第３セッション「国際化する博物館」では、東南アジア、韓国、台湾、ニュージーランド、カナダにおけるローカルなキュレーションの実践を取り上げた。アジアの博物館の文化展示の特色や、先住民族と博物館の関係などが比較検討された。13日午前は第４セッション「誰が、なにが実験なのか――芸術家、学芸員、博物館」を開催した。ある文化における芸術を他の文化の人々に展示する際の諸問題と、それを克服する工夫やコラボレーションのあり方について議論した。13日午後は、総合討論を行い、ワークショップの議論を総括した。その結果、資料を収集し知識を普及するという旧来の博物館像がさまざまな形で問い直されていることは明らかになったが、それらの挑戦が新しい規範をつくりだすというには時期尚早であるという合意を得た。この結果、今後は新しい試みをつづけつつ、その可能性を幅広く議論していることが必要であるという結論を得た。

最終日の14日は京都市の国立近代美術館と国際マンガミュージアムなどを訪問し、日本の美術館、博物館の先端的な試みを視察した。

成果

ワークショップの結果は、主要なワークショップ参加者で分担執筆し、Museum Worlds誌に投稿する方針である。

●国際研究集会への派遣

2019年国際ラテンアメリカ・カリブ研究連合（FIEALC 2019）における研究発表

2019年６月23日～６月28日　ハンガリー・セゲド大学

代表者：鈴木　紀

実施状況

2019年６月24日から28日にかけてハンガリー、セゲド大学イスパニック研究学科が主催する国際研究集会FIEALC（国際ラテンアメリカ・カリブ研究連合）2019に参加し、６月26日午前９時から12時にかけておこなわれた「文化研究――芸術表現と比較方法」の発表会場で「ラテンアメリカのアルテ・ポプラル――博物館展示学の比較研究」という題名の研究発表をおこなった。

発表では、ラテンアメリカのアルテ・ポプラルの意味は、それを展示する博物館の解釈に応じて、主に２つの意味があることを報告した。

第一の意味は、アルテ・ポプラルが先スペイン時代起源であると想定し、現在の先住民族の作品もアルテ・ポプラルに含める立場である。第二の意味は、アルテ・ポプラルの起源を植民地時代の混合文化にあると想定し、現在の先住民族の作品はアルテ・ポプラルに含めない立場である。前者は、アメリカ合衆国やメキシコなどの北中米の博物館に見られ、後者はペルーやパラグアイ、アルゼンチンなどの南米の博物館で認められる。この差が生じるのは、各国において先スペイン期の文化の文化遺産としての価値が異なることと、現代の先住民族の社会的な地位の異なることの現れであることであると推定される。

発表後、Manuel José de Lara Ródenas氏の司会で質疑応答がおこなわれ、アルテ・ポプラル展示における楽器の位置づけと、アルテ・ポプラルの「ポプラル」概念の意味について、質問が寄せられた。前者には、個別の楽器がアルテ・ポプラルとして展示している博物館は存在するが、楽器をアルテ・ポプラルの一要素としてまとまって展示している博物館は、発表者の知るかぎり存在しないと返答した。後者には、ポプラル概念はラテンアメリカ諸国の間で揺らぎをもち、先住民族が「ポプラル＝民衆」に包摂されるか否かは一定しないことを強調した。

成果

FIEALC（国際ラテンアメリカ・カリブ研究連合）を主催したハンガリー、セゲド大学スペイン語学科の紀要Acta Hispanica誌に投稿予定。

第19回ラテンアメリカ・カリブ海研究国際連盟会議（FIEALC）参加（ハンガリー）

2019年６月23日～６月30日　ハンガリー・セゲド大学

代表者：關　雄二

実施状況

ラテンアメリカ・カリブ海研究国際連盟会議は、ラテンアメリカ地域研究に関する大規模な国際会議であり、2003年には、民博（地域研究企画交流センター）と大阪大学とで共催した経緯もある。報告者は、２年に一度開催される大会に、過去４回参加しており、2017年のセルビア大会では、民博の鈴木紀准教授、ダニエル・サウセド・セガミ外来研究員とで、文化遺産とその記憶をめぐるシンポジウムを組織し、研究成果の国際的発信に努めた。今回は、ダニエル・サウセド・セガミと米国イェール大学研究員のルーシー・サラサールと共同で、Materializando identidades: El Patrimonio Cultural y la formación de identidades locales, regionales y nacionales en América Latina（アイデンティティの物質化：ラテンアメリカにおける文化遺産と地域、地方そして国家のアイデンティティの形成）という有形遺産を対象としたシンポジウムを組んだ。共同提案者サラサール氏は、直前に参加をキャンセルしたが、文化遺産の周辺に位置するコミュニティ、地方自治体、国などのさまざまなレベルでアイデンティティが強化されるという報告がいくつかなされ、またグローバル化の中での文化遺産の意匠の権利をめぐる企業と先住民という先端的なテーマも扱われた。このうち申請者は、Relacionando el patrimonio cultural material e inmaterial para su uso y protección en la sierra norte del Perú（ペルー北高地における文化遺産の保存と活用のための無形遺産と有形遺産の融合）という発表を行い、住民が主体的、持続的に参加するためには有形と無形双方を組み合わせた文化遺産の活用が必要であると論じた。シンポジウムの総括として、文化遺産に関わる現象を、研究対象社会の人々と協働していく必要性が確認された。

成果

大会組織委員会より、プロシーディングスの刊行の連絡が届いており、投稿する準備はできている（2020年発行予定）。

ベルリン国立博物館群ヨーロッパ諸文化博物館で行われるシンポジウムでの発表

2019年６月23日～７月１日　ハンガリー・セゲド大学
代表者：森　明子

実施状況

ヨーロッパ諸文化博物館で開催された国際シンポジウム What's missing? Collecting and Exhibiting Europe に参加した。ベルリンのヨーロッパ諸文化博物館は、ベルリンの再統一後に東西両ベルリンに所在していたふたつの民俗学博物館を統合し、1999年に新たなコンセプトのもとにスタートしたものである。新たなコンセプトとは、それまでのドイツ民俗文化という枠組みを脱して、ヨーロッパ諸文化を対象とし、複数の文化という観点からヨーロッパについて展示、収集を行うものである。開館から20周年経過したことを記念して、ヨーロッパ展示・収集に関して実績のある研究者を招いて開催された。シンポジウムタイトルには、現在および将来のヨーロッパ展示・収集をめぐって、それぞれが遭遇し、あるいは見通している問題について討論しようとする意図がこめられている。

ICOM 会長の基調講演、主催者による挨拶と趣旨説明につづいて、４つのパネルで、合計16人の研究者が講演を行い、それにつづいて活発な議論が展開した。招聘研究者は、新大陸ではカナダと合衆国から（西インド諸島から出席予定だった研究者は、EU のビザが発行されずに欠席となった）、ヨーロッパではオーストリア、ポーランド、フランス、フィンランド、イギリス、ドイツ、ギリシャ、スイス、ベルギー、ハンガリーから、博物館および大学研究者が集った。欧米以外では、日本から森のみが参加した。平等、アイデンティティ、移民、マイノリティ、国家などのテーマが、展示と収集に関連して議論された。浮かび上がってきた論点は多岐にわたり、議論は収斂よりも、さまざまな展開の可能性を示すものとなった。その内容を出版物によって近い将来に提示することが約束された。

森の講演は、民博の2012年のヨーロッパ新展示をとりあげ、ヨーロッパ展示を日本でどのような視角から何を意図して構想し製作したか、現代世界における地域展示において文化と地域をどのようにとらえるべきか、今後何を予定しているかを中心に、展示する文化の重層性と展示の再帰性に焦点をおいて行った。この講演は大いに好意的に受け入れられ、とくに、ヨーロッパ文化の展示をみて喚起される再帰性に関心がよせられた。パンの展示は多くの参加者に新鮮な驚きと共感をもって迎えられた。出席者は100名前後、会場は講堂でオーディエンスに対する講演という形式で行われた。

成果

シンポジウムの成果は、主催者であるベルリン国立博物館群ヨーロッパ諸文化博物館が行うことが決まっている。それとは別に、シンポジウムの様子について、研究報告の資料として報告することを予定している。

国際伝統音楽学会（ICTM）第45回世界大会への出席と民博製作映像番組の上映

2019年７月８日～７月18日　タイ・バンコク
代表者：寺田吉孝

実施状況

2019年７月11日から17日にチュラロンコーン大学（タイ王国バンコク市）で開催された国際伝統音楽学会 International Council for Traditional Music の第45回世界大会に参加し、７月13日に民博製作映像番組 Crossing over the Arirang Pass: Zainichi Korean Music（76分、2018年）の上映と討論を行った。本番組は、日本、大韓民国、朝鮮民主主義人民共和国のはざまに生きる在日コリアンの生活経験が、かれらの多様な音楽実践とどのように関連づけられているかについて紹介したものである。上映会の参加者は約40名で、番組上映後、在日コリアンの歴史や生活、今後の調査の展開、番組の製作過程、公開方法などについて活発な議論がおこなわれた。好意的な評価が数多く寄せられ、2019年８月末に上海音楽学院（中国、上海市）で行われる映画祭（音楽）の企画者から、上映の要請があった。また、本番組は民博特別研究「パフォーミング・アーツと積極的共生」（2018年度～2020年度）の目的やテーマと関連しており、特別研究の推進についても有意義なフィードバックが得られた。

本大会は参加者が900名を超え、最大13のセッションが並行して行われた。発表の質も概して高く、充実した大会となった。大会中に学会傘下の研究グループがそれぞれ総会を開くことが慣習となっており、それらに参加して研

究の動向に関する貴重な情報を得ることができた。

成果

上映番組の製作に関するエッセイの寄稿をRoutledge Handbook of Asian Music: Cultural Intersectionsの編者であるLee Tong Soon（リーハイ大学教授）より依頼されており、2020年7月に同書の1章として刊行予定である。今回の上映会での成果を加味しながら、今年度中に海外3箇所（中国、チェコ、カナダ）、国内5箇所（東京、豊中、福岡など）で同番組の上映会を開くべく準備を進めている。

AAAとCASCA共同開催の国際学会における研究発表と研究者ネットワークの構築

2019年11月18日～11月24日　カナダ・バンクーバー

代表者：卯田宗平

実施状況

本研究成果プログラム（③国際研究集会への派遣）の目的は、2019年11月20日から24日までカナダ・バンクーバーで開催されたAAA（American Anthropological Association）とCASCA（Canadian Anthropology Society）共催による国際学会において、オタワ大学スコット・サイモン（Scott Simon）教授ら8名の研究者と「Human-bird Entanglements in the Pacific Anthropocene」のセッションを組織し、⑴申請者が鵜飼研究の最新の成果を口頭発表するとともに、⑵国外の研究者との議論を通してアジア・オセアニア地域における人――鳥関係の研究の到達点と課題を明確にすることであった。

上記⑴の目的に関して、国際学会において申請者は「Multi Joining Methods among Cormorants, Fishers and Fishing Techniques」というタイトルで発表し、中国大陸の全体と対象とした鵜飼調査から導きだした鵜飼技術の地域的な固有性と全国的な共通性、鵜飼技術に地域的な違いがみられる要因に関わる研究成果を国際的に発信した。くわえて、大会の共通テーマである「気候変動」が動物利用にもたらした影響など広い視野から検討を加えた。上記⑵の目的に関しては、同じセッションで発表した各国の研究者と交流することで、アジア・オセアニアにおける人――鳥関係の研究を国際的に推し進める必要性を改めて確認するとともに、人間の生活世界において鳥がメタファーから食利用、そして生業における手段としての利用にいたるまで多種多様なかかわりをもっていることが明らかになった。このように、本セッションにおける発表と交流により、人類学の立場から鳥類を研究する学者との研究ネットワークを構築することができ、かつ申請者自身の新たなテーマの選択や比較研究の軸を検討するうえにおいても意義があった。さらに、国際学会ではほかのセッションにも参加し、マルチスピーシーズ民族誌研究の研究動向を把握するとともに、人類学的な事例調査がまだ不足している事実を理解することができた。

成果

セッションの概要や個々の発表内容はすでに公開している。

（https://www.eventscribe.com/2019/AAA/agenda.asp?startdate=11/20/2019&enddate=11/20/2019&BCFO=M&tn=&cpf2=&cus2=&pta=&h=Wed,%20Nov%2020&pfp=FullSchedule）

館長リーダーシップ経費による事業・調査

公開座談会「自然界から想像／創造する――Creature Creators' Symposium」

本事業は秋の特別展「驚異と怪異――想像界の生きものたち」の関連イベントとして2019年9月23日にナレッジシアター（グランフロント大阪、大阪梅田）にて開催した。特別展の最後のセクション「創る」で作品を展示している現代の漫画家・五十嵐大介氏と、ゲームクリエイター・長谷川朋広氏が登壇し自然界の生物のパーツや習性から実在しない生物を想像し、マンガやゲームコンテンツとして創造してゆくプロセスについて講演した。さらに、海遊館の西田清徳館長による自然史の視点からのコメントを皮切りに、山中教授が進行役となり形態・行動・生息域・分類・進化といったトピックに沿って座談会を行った。

自然を題材とするクリエイターと、自然を研究する海洋生物学者のクロストークを通して、自然界の生きものの形、民族資料に見られる伝統的な表象、新しいメディアにおける表現をめぐる知の交流が実現し、自然界と想像界の相関関係について新たな視野が開いた。特に、人間の目に見えている自然だけでなく、生物、コンピューターが、それぞれ異なる感覚で捉える環世界があることに気付かされた。

参加者のアンケート結果も非常に好意的なものが多く、大阪梅田の商業施設内でのイベントであったため、特別

展の広報としても効果的であったという手ごたえが感じられた。
なお、当日の参加者数は313名であった。

国立民族学博物館・国立科学博物館共同企画展「ビーズ――自然をつなぐ、世界をつなぐ」のための輸送

国立科学博物館（以下「科博」という）で実施したビーズ展は、国立民族学博物館と科博の初めての共同企画であり、会期62日間の入場者数は全体で201,120人、１日平均3,244人の集客があった。
科博の企画展示室で開催された76の企画展の中で、総入場者数でも１日平均入場者数でも歴代７位を記録した。本展示は文化人類学（民族学）と自然史学の融合から人類によるビーズに対する認識や役割を紹介することを可能にするだけでなく、民博の活動を東京で広報するよい機会になった。
施工費用はすべて科博側がもつことになっており、民博側では民博所蔵の標本資料に限定して、輸送費を負担した。

大規模災害における人間文化研究

2011年の東日本大震災の発生以降、民博が継続してきた「被災地における無形の文化遺産の支援活動」の一環として、遠藤協・大澤未来共同監督作品「廻り神楽」の上映会をみんぱく映画会として実施した。両監督は、2012年から岩手県宮古市の「震災の記憶伝承事業」に参加し、被災地に通いはじめ、本作品を制作した。映画会では、遠藤氏と黒森神楽の研究者である神田より子氏（敬和学園大学名誉教授）氏を招へいし、上映後にトークセッションを合わせて開催した。トークセッションは民博の林勲男の司会で進め、会場フロアーからも質問用紙で30件を越える質問が寄せられ、遠藤氏と神田氏に可能な限り答えて頂いた。
事前に複数の新聞社による告知もあり、被災地の現状や伝統芸能の復興状況への関心の高さを示す参加者数であり、質問数であった。
なお、当日の参加者数は256名であった。
寺社石碑DBは、高知県立高知城歴史博物館において、高知ミュージアムネットワークのメンバー向けにワークショップを実施するとともに、意見交換をおこなった。その結果、⑴過去のスポット情報の保存、表示、⑵履歴の確認および編集機能の新設、⑶ユーザー権限の追加、⑷60進数（度分秒）による緯度・経度座標の登録機能の追加、⑸関連情報へのリンク機能の追加、⑹スポット検索の検索条件追加、⑺スポット一覧の表示項目変更、⑻スポット登録時の地図上に既登録スポットの座標を表示、⑼地域名一覧の並び替え機能の使い勝手向上、⑽登録済みのスポット情報のエクスポート、⑾スポットの詳細画面での登録ユーザも表示、⑿複数の地図への切り替え対応という12点の改修項目を洗い出せ、データベースへの反映をおこなった。

民博研究懇談会

第295回　2019年６月26日
Robert E. Johnson 「Deaf ethnicity: Paternity and patrimony speaker」

第296回　2019年７月24日
奈良雅史 「民族間関係の変容――中国雲南省回族社会における民族観光とイスラモフォビア」

第297回　2019年９月25日
アディ・プラセティージョ 「オラン・リンパ――森林の本当の管理人」

第298回　2019年10月９日
話題提供：野林厚志、ファシリテーター：林　勲男 「討論会――フォーラム型情報ミュージアムプロジェクトの課題と可能性」

第299回　2019年11月27日
小野林太郎 「海のサピエンス史――海域アジアへ移住した人類の海洋・島嶼適応」

第300回　2020年１月29日
黒田賢治 「現代イランにおける40年の殉教物語――死の社会化と国家の『神話』形成」

2-2　外部資金による研究

科学研究費補助金による研究プロジェクト

2019年度科学研究費補助金　採択課題一覧

区分	種目	研究課題	研究代表者	研究年度
新規	国際共同研究加速基金（国際共同研究強化A）	遺伝子化時代の社会集団のカテゴリー化と差異化——インドにおける血と遺伝子を中心に	松尾瑞穂	2019-2021
	基盤研究（A）一般	北米アラスカ・北西海岸地域における先住民文化の生成と現状、未来に関する比較研究	岸上伸啓	2019-2023
	基盤研究（B）一般	文化遺産の「社会的ふるまい」に関する応用人類学的研究——東部アフリカを事例に	飯田　卓	2019-2021
	基盤研究（B）一般	バスケタリーをめぐる植物生態と民族技術の文化人類学的研究	上羽陽子	2019-2023
	基盤研究（B）一般	再現模写・仮想空間構築による敦煌莫高窟千仏図が有する規則的描写の複合的評価	末森　薫	2019-2021
	基盤研究（B）一般	シルクロード都市の形成ならびに人と文化の東西交流に関する考古学的研究	寺村裕史	2019-2022
	基盤研究（B）一般	紛争後社会のレジリエンス——オセアニア少数民族の社会関係資本と移民ネットワーク分析	丹羽典生	2019-2022
	基盤研究（C）一般	未発表原稿分析によるJ.-C.マルドリュスの執筆過程の解明	岡本尚子	2019-2023
	基盤研究（C）一般	中国——南太平洋島嶼国関係の変化と「オセアニアン・チャイニーズ」像の表出	河合洋尚	2019-2022
	基盤研究（C）一般	日本手話、台湾手話、韓国手話における語と意味の歴史変化の解明	相良啓子	2019-2022
	基盤研究（C）一般	インド・オディシャーにおける親密圏の変容：恋愛・婚姻・家族をめぐる情動と経験	常田夕美子	2019-2021
	基盤研究（C）一般	世界遺産バンチェン遺跡の遺物の古美術品化とその価値づけをめぐる文化人類学的研究	中村真里絵	2019-2022
	基盤研究（C）一般	インド西部の地方都市における宗教実践とローカリティ形成に関する人類学的研究	三尾　稔	2019-2022
	若手研究	肉食性動物のドメスティケーション：毛皮産業近代化における人と動物の関係の変化	大石侑香	2019-2022
	若手研究	レソトにおけるジンバブエ移民行商人の会計方法にかんする人類学的研究	早川真悠	2019-2021
	若手研究	宗教と移動をめぐる人類学的研究：現代中国の越境的ムスリム・ネットワーク	奈良雅史	2019-2022
	研究活動スタート支援	アオウミガメを例にした稀少動物に対する人為空間の構造的理解に向けての比較研究	高木　仁	2019-2020
	研究成果公開促進費	敦煌莫高窟と千仏図	末森　薫	2019
	研究成果公開促進費	宣教と適応——グローバル・ミッションの近世	齋藤　晃	2019
	研究成果公開促進費	砂漠のノマド	中野歩美	2019
	研究成果公開促進費	「シェルパ」と道の人類学	古川不可知	2019
	研究成果公開促進費	＜客家空間＞の生産	河合洋尚	2019
	研究成果公開促進費	服装・身装文化デジタルアーカイブ	高橋晴子	2019

新規	研究成果公開促進費	ゴミから生まれる異音獣！ 不思議なケモノはどんな音？不思議な音は何に見える？	山中由里子	2019
	特別研究員奨励費	ラテンアメリカ地域における「先住民性」についての民族誌的研究：コスタリカを中心に	額田有美	2019-2021
	特別研究員奨励費	アフリカ内水面における「よそ者」に着目した持続的水産資源管理構築に関する研究	稲井啓之	2019-2021
	特別研究員奨励費	東地中海域における小規模漁業の漁場利用生態と漁場管理制度の統合的解明	崎田誠志郎	2019-2021
継続	新学術領域研究 （研究領域提案型）	人類集団の拡散と定着にともなう文化・行動変化の文化人類学的モデル構築	野林厚志	2016-2020
	新学術領域研究 『学術研究支援基盤形成』	地域研究に関する学術写真・動画資料情報の統合と高度化	吉田憲司	2016-2021
	国際共同研究加速基金 （国際共同研究強化）	移民の身体ポリティクス ――インド舞踊のグローバル化とエージェンシー	竹村嘉晃	2018-2020
	国際共同研究加速基金 （国際共同研究強化B）	時空間を融合する――GISと数理モデルを用いた新たな言語変化へのアプローチ	菊澤律子	2018-2023
	国際共同研究加速基金 （国際共同研究強化B）	オセアニアの人類移住と島嶼間ネットワークに関わる考古学的研究	小野林太郎	2018-2021
	基盤研究（A） 一般	ネットワーク型博物館学の創成	須藤健一	2015-2019
	基盤研究（A） 一般	アフリカにおける文化遺産の継承と集団のアイデンティティ形成に関する人類学的研究	吉田憲司	2015-2019
	基盤研究（A） 一般	アンデスにおける植民地的近代 ――副王トレドの総集住化の総合的研究	齋藤　晃	2015-2019
	基盤研究（A） 海外	チベット・ビルマ語族の繋聯言語の記述とその古態析出に関する国際共同調査研究	長野泰彦	2016-2019
	基盤研究（A） 海外	アンデス文明における権力生成と社会的記憶の構築	關　雄二	2016-2019
	基盤研究（A） 一般	モンゴルに関する画像記録を用いた地域像の再構築	小長谷有紀	2017-2021
	基盤研究（A） 一般	超常認識と自然観をめぐる比較心性史の構築	山中由里子	2018-2022
	基盤研究（A） 一般	大規模災害に関する集合的記憶の物象化・物語化と防災教育	林　勲男	2018-2021
	基盤研究（B） 特設	中東地域における民衆文化の資源化と公共的コミュニケーション空間の再グローバル化	西尾哲夫	2016-2020
	基盤研究（B） 一般	シンドバード航海記の成立過程と多元的価値共創文学の可能性に関する物語情報学的研究	西尾哲夫	2017-2021
	基盤研究（B） 海外	東南アジアにおけるサトイモの遺伝的多様性のマッピングによる栽培化モデルの検証	マシウス ピーター	2017-2020
	基盤研究（B） 一般	教育資源・観光資源としての地域文化遺産の活用と保存	日髙真吾	2018-2020
	基盤研究（B） 一般	セルロースナノファイバー塗工法による脆弱化した酸性紙資料の大量強化処理の開発	園田直子	2018-2020
	基盤研究（C） 一般	本州とその周辺の島々及び多島海的海域における民俗芸能の研究	笹原亮二	2015-2019
	基盤研究（C） 一般	ポスト家畜化時代の鵜飼文化とリバランス論 ――新たな人・動物関係論の構築と展開	卯田宗平	2016-2019
	基盤研究（C） 一般	カザフスタンにおける伝統医療とイスラームの人類学的研究	藤本透子	2016-2020
	基盤研究（C） 一般	農の「EU化」に伴うトランシルヴァニア牧畜の再編に関する文化人類学的研究	杉本　敦	2017-2019
	基盤研究（C） 一般	京都市東九条における日本人・在日コリアン・フィリピン人の関係形成についての人類学	永田貴聖	2017-2020

継続	基盤研究（C） 一般	生理用品の受容によるケガレ観の変容に関する文化人類学的研究	新本万里子	2017-2019
	基盤研究（C） 特設	中国西南タイ民族における詩的オラリティの継承と創造的実践に関する研究	伊藤　悟	2017-2019
	基盤研究（B） 一般	触察の方法論の体系化と視覚障害者の野外空間のイメージ形成に関する研究	廣瀬浩二郎	2018-2020
	基盤研究（B） 一般	『千夜一夜』をめぐる写本・刊本の編纂過程と書物文化の諸相	中道静香	2018-2022
	基盤研究（C） 一般	セネガル、ニアセン教団における女性の宗教的権威の伸張	盛　恵子	2018-2020
	基盤研究（C） 一般	アフリカの無形文化を対象にした民族誌映画の制作による応用映像人類学的研究	川瀬　慈	2018-2021
	基盤研究（C） 一般	島嶼社会における芸能伝承の課題 ――対話と発見の場としての映像を活用したアプローチ	福岡正太	2018-2020
	基盤研究（C） 一般	ポスト紛争期の水俣における「負の遺産」の生成過程に関する博物館人類学的研究	平井京之介	2018-2021
	基盤研究（C） 一般	米国での認知症高齢者を師とする人生語り・記録の多世代協働とコミュニティ教育の展開	鈴木七美	2018-2021
	基盤研究（C） 一般	無形文化遺産の継承・変容と自然災害による影響の動態的把握――バヌアツ北部事例研究	野嶋　洋子	2018-2020
	基盤研究（C） 一般	アートツーリズムのエスノグラフィー ――地方国際芸術祭の深化と拡充の理論化に向けて	山田　香織	2018-2020
	若手研究（A）	チベット文化圏東部の未記述言語の解明と地理言語学的研究	鈴木博之	2017-2020
	若手研究（B）	現代インドにおける遺伝子の社会的布置に関する人類学的研究	松尾瑞穂	2016-2019
	若手研究（B）	社会をつくる芸術――「ソーシャリー・エンゲイジド・アート」の人類学的研究	登　久希子	2016-2020
	若手研究（B）	エジプト人空手家によるネイションの実践とグローバル化に関する社会人類学的研究	相島葉月	2017-2020
	若手研究（B）	アンデスにおける聖人信仰の展開に関する人類学的研究 ――聖像の所有と継承に注目して	八木百合子	2017-2019
	若手研究（B）	三線が引き出す社会関係、価値、感情 ――大衆楽器が人びとに与える効果の研究	栗山新也	2017-2019
	若手研究（B）	20世紀前半ペルシア湾における「奴隷解放調書」の研究	鈴木英明	2016-2019
	若手研究（B）における独立基盤形成支援(試行)	エジプト人空手家によるネイションの実践とグローバル化に関する社会人類学的研究	相島葉月	2017-2020
	若手研究	現代イランにおける長期的紛争介入構造をめぐる殉教概念の変容と政治言説化の研究	黒田賢治	2018-2020
	若手研究	アフリカ熱帯雨林における狩猟採集民の生態資源獲得の行動に関する人類学的研究	彭　宇潔	2018-2020
	若手研究	身体性を基盤とした他者との共存の可能性を探求する ――ケニアの自転車競技選手を事例に	萩原卓也	2018-2020
	若手研究	近現代の日本と韓国における門付け芸能の変遷 ――伊勢大神楽と韓国農楽を中心に	神野知恵	2018-2021
	挑戦的研究（開拓）	個別文化の標準化問題に関する文化人類学と会計学の学際的共同研究	出口正之	2017-2021
	挑戦的研究（萌芽）	被災後社会の総体的研究 ――被災後をより良く生きるための行動指針の開発	竹沢尚一郎	2018-2019
	挑戦的研究（萌芽）	新手話学の構成素の実証的検証研究	神田和幸	2018-2020
	挑戦的研究（萌芽）	日本手話言語の変質に関する研究	川口　聖	2018-2020

継続	研究活動スタート支援	ヒマラヤ東部地域における輸送インフラの発展と移動する身体に関する人類学的研究	古川不可知	2018-2019
	研究活動スタート支援	食の認識体系とその変容――タイにおけるMSG（グルタミン酸ナトリウム）の消費と拒絶	大澤由実	2018-2019
	研究成果公開促進費	梅棹忠夫資料のデジタルアーカイブズ	久保正敏	2018-2022
	特別研究員奨励費	セルビアにおけるポップフォークと民俗音楽の比較分析による文化的連関の研究	上畑　史	2017-2019
	特別研究員奨励費	贈与交換による平和の構築・維持・再生産に関する人類学研究――ソロモン諸島の事例から	藤井真一	2017-2019
	特別研究員奨励費	高齢期の人間にとっての居住型宗教施設の役割――南インドの事例から	松岡佐知	2018-2020
延長	基盤研究（C）一般	スリランカ系タミル人によるインド舞踊の発展と再々構築化に関する全体関連的研究	竹村嘉晃	2016-2019
	基盤研究（C）一般	1950年代アメリカ海軍のグアム島における風下被ばく調査に関する研究	西　佳代	2016-2019
	国際共同研究加速基金（国際共同研究強化）	日本国内の民族学博物館資料を用いた知の共有と継承に関する文化人類学的研究（国際共同研究強化）	伊藤敦規	2016-2019
繰越	新学術領域研究（研究領域提案型）	人類集団の拡散と定着にともなう文化・行動変化の文化人類学的モデル構築	野林厚志	2016-2020
	基盤研究（A）一般	大規模災害に関する集合的記憶の物象化・物語化と防災教育	林　勲男	2018-2021
	基盤研究（A）一般	アンデスにおける植民地的近代――副王トレドの総集住化の総合的研究	齋藤　晃	2015-2019

受託事業

文化庁　文化遺産保護（ペルー、イラン及びメコン地域諸国）に係るシンポジウム等実施委託業務「日本ペルー交流年における文化遺産保護に係るシンポジウム等実施委託業務」

委 託 者：文化庁

担当教員：關　雄二

実施期間：2019年７月１日～2020年３月31日

目的と概要

2019年は、日本およびペルー両国が「日本ペルー交流年（ペルー日本人移住120周年）」と定めた記念すべき年である。本事業の目的は、この交流年に合わせて、過去60年以上にわたり考古学調査を実施し、現地研究者、ならびに日系人を含む地域住民と交流を続け、さらには対象となる文化遺産の保存と活用に取り組んできた日本調査団の足跡に関するシンポジウムや展示を実施すること、さらにはその後加わる民族学研究についても同様のシンポジウム等を開催することを通じて、日本、ペルー両国の文化交流を促進させることにある。

本事業は、ペルーにおけるシンポジウム４回（リマ市、カハマルカ市、クスコ市、ナスカ市）と展示（カハマルカ市）１回、ならびに日本におけるシンポジウム１回より構成される。

実施状況

１．シンポジウム「文化遺産研究と実践の最前線」

日時：2019年８月13日

会場：国立国民博物館、リマ市

ペルーの首都リマで開催した国際シンポジウム「文化遺産研究と実践の最前線」には、日本人考古学者８名が参加した。ペルー側研究者については、共同研究者（発表者）を含めて７名が参加した。具体的には、日本調査団が60年以上にわたり対象としてきたアンデス文明初期の形成期（前3000年～紀元前後）社会の研究と遺跡の保

護をメインテーマとした。

冒頭、土屋定之駐ペルー日本特命全権大使の挨拶に続き、ペルー文化省ルイス・ハイメ大臣の挨拶があり、これに続いて大貫良夫が、日本人考古学者による過去60年の調査の歩みをテーマとする基調講演を行った。続いて、会場を移し、地域ごとの最新成果を日本、ペルー両国の研究者が発表を行った。さらに、近年、若手研究者が興味を示す形成期以降の時代についても扱った。これらの発表に併せて会場内で２枚のパネルを用いたポスター発表も行った。なお、シンポジウムは、毎年、ペルー文化省が主宰して行われる「ペルー考古学会議」の１日をあて、会場もペルー文化省側が無償で提供した。なおこのシンポジウムは、文化庁、国立民族学博物館、在ペルー日本大使館、ペルー文化省、日本考古学調査団の主催、文化遺産国際協力コンソーシアムの共催、古代アメリカ学会の協力の形で実施した。基調講演にはおよそ200名、シンポジウムには60名の参加があった。

2．展示「カハマルカにおける日本調査団――40年におよぶ考古学調査」

期間：2019年９月５日～

会場：文化省カハマルカ支局、カハマルカ市

ペルー北部高地カハマルカ州の州都カハマルカ市において展示を実施した理由は、カハマルカ州が、1979年以来、日本調査団が継続して調査を実施してきた場所であり、本年で40周年を迎えたためである。会場はペルー文化省が無償で提供する形となったが、展示および警備については日本側が負担することとなった。

文化省カハマルカ支局が事務所を構えるベレン教会複合内の旧男性用病棟という歴史的建造物内を利用した展示では、第１室において、1958年以来の日本調査団の歩みや、過去に調査に加わった両国の団員からのメッセージなどが披露された。展示空間の大半を占める第２室では、40年間の発掘調査によって得られた出土品を展示した。

９月５日の開幕式には、土屋定之特命全権大使、文化省文化遺産課長、カハマルカ州知事、カハマルカ市をはじめとする複数の市長が参列し、挨拶をするとともに、日本調査団に対して数多くの表彰が行われた。引き続き、大貫良夫による記念講演が行われ、土屋定之特命全権大使、文化省文化遺産課長、カハマルカ州知事、關雄二によるテープカットにより展示の公開が開始された。

当初、会期は３ヶ月ほどを予定していたが、2019年11月までの２ヶ月間で３万人の入館者を数え、現地のメディアでも大きく取り上げられるなど反響が大きいため、ペルー文化省側から会期延長の希望が表明され、2020年８月上旬まで延長することが決まった。しかしながら新型コロナウイルス感染症の拡大により、2020年３月13日に会場が閉鎖された。これまでの入館者数は52,184人である。展示は、文化庁、国立民族学博物館、在ペルー日本大使館、ペルー文化省、日本考古学調査団の主催、文化遺産国際協力コンソーシアムの共催、古代アメリカ学会の協力の形で実施した。

3．シンポジウム「過去と現在の狭間で――ペルー北高地・北海岸の文化遺産の研究と保護」

日時：2019年９月６日

会場：文化省カハマルカ支局、カハマルカ市

展示に併せて、シンポジウムを実施した。当初、２日間の予定で実施することになっていたが、週末に会場が利用できないことが判明したため、１日で終えるというタイトなスケジュールに変更した。シンポジウムでは、冒頭、土屋定之特命全権大使の挨拶の後、日本・ペルー両国の考古学者によるカハマルカ地域の考古学調査と文化遺産保護の現状について討議が行われた。一般公開で実施されたほか、文化省のウェブを介して生中継された。現地会場における参加者はおよそ200名であった。

4．シンポジウム「アンデス南部高地における日本人による人類学研究の50年――軌跡、民族誌、文化的再評価」

日時：2019年11月13日

会場：クスコ歴史博物館講堂、クスコ市

本シンポジウムは、アンデスにおける民族学研究をテーマに、同分野の研究の中心地であるペルー南部のクスコ市を舞台に開催した。とくにペルー南部高地は、1960年代から日本人研究者が地元の研究者らと共同で調査研究をおこなってきた地域でもあり、今回は長年にわたる双方の研究成果を地元社会に還元する意味で、両国の関係機関の協力のもと実施された。シンポジウムでは、日本人人類学者３名のほか、日本の共同研究調査への参加実績のあるペルー人人類学者２名が研究発表をおこなった。具体的には、南部高地の農村および牧畜社会におけるアンデス特有の慣習、土地利用、移動形態、儀礼などの無形文化を主題に、これまでの研究の歴史を振り返るとともに、今後の同地域の研究展望について述べられた。また、日本の研究者達が蓄積した画像や標本などの研究資料の活用の可能性等についても扱った。なお、本シンポジウムは文化庁、国立民族学博物館、ペルー文化省

クスコ支局、クスコ市、クスコ大司教府の協力のもと実施した。当日は、研究者、学生、行政関係者や地元市民ら130名の参加があった。また、本シンポジウムの開催に合わせて、関連イベントとして、写真スライド展示「アンデスの伝統：日本人人類学者による1960-1980年代の写真コレクション」も実施した。このイベントは、クスコ市の協力のもと、同市庁舎コンベンションセンターで３日間にわたりおこなった。期間中は、一般市民のほか、同地を訪問する観光客等も数多く足を運んだ。

5．シンポジウム「ペルーの文化遺産保護の最前線――アンデスの黄金、ナスカの地上絵、インカのミイラ」

日時：2019年12月14日

会場：東京文化財研究所、東京

このシンポジウムでは、日本人考古学者が４名参加した。ペルー側研究者については、２名の参加を予定していたが、１名は、来日直前に文化大臣の職に就き、かつまた世界文化遺産の暫定リストに掲載されたクエラップ遺跡周辺の山火事に対処することとなったため、参加が叶わず代読の形となった。

シンポジウムでは、豊城浩行文化庁文化財鑑査官、ハロルド・フォルサイト駐日ペルー大使の挨拶に続き、日本調査団が60年以上にわたり対象としてきたアンデス文明初期の形成期（前3000年～紀元前後）社会の研究と遺跡の保護の歩みについて、加藤泰建（埼玉大学名誉教授）が基調講演を行った。続いて、カルロス・ウェステル・ラ・トレ（国立ブルーニング考古学博物館長）による、ペルー北海岸チョトゥーナ遺跡とチョルナンカップ遺跡における遺跡保存とコミュニティ開発の事例、そして日本側からは、關雄二とダニエルモラーレスが率いるパコパンパ遺跡合同調査における文化遺産の活用、そして坂井正人ら山形大学チームが進めるナスカの地上絵の新発見とそれらの保護についての発表が続いた。

なおこのシンポジウムは、文化庁、国立民族学博物館の主催、文化遺産国際協力コンソーシアム、山形大学、金沢大学超然プロジェクト「古代文明の学際的研究の世界的拠点形成」、科学研究費（基盤研究（A））「アンデス文明における権力生成と社会的記憶の構築」（研究代表者：關　雄二）の共催、古代アメリカ学会、在日本ペルー大使館の協力の形で実施した。一般公開の形で行われ、参加者は約80名であった。

6．シンポジウム「ペルー南海岸・南高地における考古学と文化遺産」

日時：2020年１月11日、12日

会場：アントニーニ博物館、山形大学ナスカ研究所、ナスカ市

本シンポジウムは、当初2019年10月に開催することで準備を進めてきたが、その時期にナスカ市の会場を確保することが難しかったこと、またペルーの入管法の変更により、予定していた時期に、日本人研究者が滞在することが困難になった点などの事情から、2020年１月の開催に変更となった。

シンポジウムの目的は、ペルー南海岸および南高地を調査している日本とペルーの研究者が、ナスカ市に集まり、成果を発信し、情報を共有することにある。ナスカ市で開催した理由は、山形大学が同市に研究施設を設立し、ユネスコ世界文化遺産ナスカの地上絵の研究を推進していることにある。１日目は、「パラカス」、「ナスカ-パルパ」、「ワリ」という３つの異なる文化を扱うセッションによって構成された。またペルー南海岸および南高地で実施された最新の考古学調査の結果を報告するだけでなく、考古学調査を通じて明らかになった文化遺産が抱える諸問題についても議論した。２日目は「世界遺産ナスカの地上絵」を保護するために山形大学とペルー文化省が締結した協定に基づき、ナスカ市近郊のアハ地区に共同で設立した遺跡公園をシンポジウム発表者で視察し、その後、山形大学ナスカ研究所において、文化遺産とコミュニティの共生、文化遺産の持続的活用をめぐって討論を行った。日本人考古学者３名の他、ペルー人考古学者６名、イタリア人考古学者１名が参加し、聴衆は72名を数えた。

またシンポジウムは、文化庁、山形大学、国立民族学博物館の主催、山形大学ナスカ研究所、ペルー文化省ナスカ-パルパ地区管理計画事務所、文化遺産国際協力コンソーシアム、アントニーニ博物館の共催、古代アメリカ学会の協力の形で実施した。なお本シンポジウムの運営については、国立民族学博物館より山形大学に再委託した。

民間などの研究助成金などによる研究活動

・寄附金

末森薫機関研究員研究助成金（鹿島美術財団「美術に関する調査研究」助成）

―― 末森　薫

齋藤玲子准教授研究助成金（公益財団法人アイヌ民族文化財団「アイヌ関連研究助成」）

―― 齋藤玲子
片雪蘭外来研究員研究助成金（公益信託　澁澤民族学振興基金）―――――――― 片　雪蘭
順益台湾原住民博物館研究賛助金 ―――――――――――――――――――――― 順益台湾原住民博物館
奈良雅史准教授研究助成金（一般社団法人日本文化人類学会「植松東アジア研究基金2019年度研究促進事業」）
―――――――――――――――――――――――――――――――――――――― 一般社団法人日本文化人類学会
鈴木英明助教研究助成金（Australian Research Council Discovery-collaboration Projects）
―――――――――――――――――――――――――――――――――――――― 鈴木英明
国立民族学博物館活動助成金 ―――――――――――――――――――――――― 株式会社阪急阪神百貨店
高木仁外来研究員研究助成金（公益財団法人味の素食の文化センター「2019年度食の文化研究助成事業」）
―――――――――――――――――――――――――――――――――――――― 公益財団法人味の素食の文化センター

2-3　文化資源関連事業・情報関連事業

文化資源関連事業

文化資源に関する主な開発研究や事業は、文化資源関連事業として運営される。そのねらいは、目的、計画、経費、責任を明確にし、それぞれの成果を的確に評価して、さらなるプロジェクトの発展を図ることにある。文化資源関連事業は、「文化資源プロジェクト」「文化資源計画事業」「情報管理施設の基盤業務」からなり、文化資源運営会議が毎年募集し、選定する。
また、「文化資源プロジェクト」「文化資源計画事業」は館内外の研究者の運営のもとで遂行されるが、情報管理施設の支援・協力を受けて、効率的かつ機動的に推進されている。
2019年度の文化資源関連事業の概要は以下のとおりである。

1．運営体制

文化資源関連事業

文化資源関連事業について、「文化資源プロジェクト」、「文化資源計画事業」、「情報管理施設の基盤業務」の３種類のカテゴリーによって実施した。また、文化資源共同研究員の制度を運用し、共同利用体制を推進した。さらに外部有識者による意見をプロジェクトの審査に反映させた。

2．文化資源プロジェクト

文化資源プロジェクト（以下「プロジェクト」という。）は、本館あるいは大学等関連機関が所有する学術資源の体系化をすすめ、本館専任教員のイニシアティブにより共同利用を促進し、学術的価値を高めるために、本館専任教員の提案に基づき、期間として実施する研究プロジェクトである。

プロジェクトは、４つの分野（調査・収集、資料管理、展示、博物館社会連携）に関わる研究開発、または研究成果の前記４分野への展開を目的とするもので、その成果は共同利用に供するとともに、社会への還元ができるものであることを前提とする。

1）調査・収集分野

北村繁作「華ひらく」の購入 ――

提案者：日髙真吾

本プロジェクトは、2018年に開催した特別展「工芸継承――東北発、日本インダストリアルデザインの原点と現在」で出展した北村繁氏作の漆工品「華ひらく」を、標本資料として購入したものである。本作品の制作者である北村繁氏は、正倉院や春日大社の漆工品の修理を通じて、奈良時代の漆工技術を活かした作品づくりをおこなっている。

ダーウィンフィンチのタッチカービング（5体）の購入 ――――――――――――――――――――――――――――

提案者：廣瀬浩二郎

内山春雄氏にタッチカービング（ダーウィンフィンチ）５体の制作を依頼し、購入した。これまでにも民博では内山氏のカービング作品を「さわる標本資料」という位置付けで収集してきた。今回、生物進化の歴史を示すダーウィンフィンチが加わることで、一連のコレクションは厚みを増した。鳥の生態を触覚によって理解す

る体験は万人にとって貴重だろう。購入したカービングは、2021年秋の特別展「ユニバーサル・ミュージアム」において展示される予定である。

野生のウミウの捕獲道具一式の購入

提案者：卯田宗平

本プロジェクトは、茨城県日立市十王町において継承されている野生のウミウの捕獲作業を対象とし、捕獲において使用される道具の一式（捕獲用カギ棒やウミウを各地に運搬する籠など）を購入したものである。

「客家と日本」に関する標本資料購入の選定調査

提案者：河合洋尚

提案書の提出時は、2021年の春に企画展「客家と日本」（仮）の開催を想定しており、その収集のための調査をおこなう予定でいた。この企画展は、台湾客家文化センターが2020年に開催する予定であった企画展「台湾客家と日本」（仮）の標本資料を半分以上貸借することを前提としており、そこで収集されないであろう日本国内、中国、香港、東南アジアの資料を、今回の収集プロジェクトにて調査・補足する予定でいた。だが諸々の要因により台湾ではまだ企画展の開催が進んでおらず、2021年春の企画展は実現不可能となった。また、標本資料の保管のありかたを含めて収集や企画展構想を再調整する必要がでてきたため、今回の調査を見送らざるをえなくなった。したがって、本年度は予定していた成果をあげることが困難であると判断し、調査を中止し、調査費を全額返納した。

2）資料管理分野

該当するプロジェクトなし。

3）展示分野

特別展「驚異と怪異――想像界の生きものたち」展示実施

提案者：山中由里子

本展示では、常識や慣習から逸脱した「異」なるもの（異境・異界・異人・異類）をめぐる人間の心理と想像力の働きを解明し、自然界と想像界の相関関係の歴史的変遷とその基層にある心性メカニズムを、学際的・多元的視点から究明した。具体的には、人魚、龍、河童、天狗、狼男など、この世の「キワ」にいるかもしれないと信じられていた驚異や怪異にまつわる民族資料、絵画、書籍などの展示を通して、人類に普遍的な思考回路と文化ごとに異なる事象の関係についての考察を喚起した。

特別展「子ども／おもちゃの博覧会」

提案者：笹原亮二

本プロジェクトは、民博所蔵の「時代玩具コレクション」（多田コレクション）の調査研究や、民博共同研究「モノにみる近代日本の子どもの文化と社会の総合的研究――国立民族学博物館所蔵多田コレクションを中心にして」（研究代表者 是澤博昭）の成果をもとに、2019年３月21日から５月28日まで、本館特別展示館において特別展「子ども／おもちゃの博覧会」を開催した。あわせて、みんぱくゼミナールなどの関連催し物を開催した。

特別展「先住民の宝」

提案者：信田敏宏

世界各地の先住民が大切にしている「宝」をキーワードに、写真や動画、絵画や漫画などのメディアも活用しながら、それぞれの地域の先住民の暮らしや現状を紹介する。「宝」には、狩猟具、装身具、儀礼具、その他の生活用具などの具体物だけではなく、伝統的な生活、森や海などの自然環境、言語、信仰、芸能なども含まれる。先住民運動や文化復興運動などが隆盛し、民族アイデンティティが活性化している状況にも配慮しながら、展示全体のストーリーを構成する。（新型コロナウイルス感染のさらなる拡大の防止のため、臨時休館したことに伴い、開催時期を2020年３月19日～６月２日から2020年10月１日～12月15日に変更した。）

特別展「ユニバーサル・ミュージアム――触文化がいざなう「未開の知」への旅」（仮称）準備

提案者：廣瀬浩二郎

2020年秋の特別展実施に向けて準備を進めた。具体的には以下の４点について取り組んだ。⑴協力アーティストを確定し、各自の出展作品の数、内容に関して打ち合わせを行なった。⑵民博所蔵資料の中で、さわることに適したものを選定し、撮影した。⑶図録の目次案を固め、執筆予定者に原稿依頼状を送付した。⑷展示場全体のレイアウトについて展示デザイナーと議論を重ね、設計図面を完成させた。

特別展「おしゃべりするヒト」（仮称）準備

提案者：菊澤律子

2022年秋（予定）の特別展開催に向けて、展示デザイン基本コンセプト、展示タイトル、構成、コンテンツ、国際巡回展部分関連の変更への対応の検討、展示装置の開発、その他展示協力者、予算関連と資金確保の方法、関連出版物の内容、などについて準備を進めた。

企画展「旅する楽器――南アジア、弦の響き」

提案者：寺田吉孝

企画展「旅する楽器――南アジア、弦の響き」を、2019年２月21日～５月７日の会期で開催し、期間中の関連イベントとして研究公演（１回）とギャラリー公演（３回）を実施した。

沙漠のムスリム女性の暮らしと半世紀の変容に関する企画展

提案者：西尾哲夫

中東における文化人類学的・人文地理学的研究を切り拓いた先駆者である、文化人類学者の片倉もとこによるサウジアラビア現地調査資料（写真ほか）ならびに収集による本館所蔵資料（民具・衣装ほか）と、現地での最新の調査結果にもとづくデータを中心に、物質文化に焦点を当てることで、この半世紀における沙漠環境や社会構造の変化に伴うオアシスでのムスリム女性たちの生活の持続と変容について検証した。

企画展「メキシコのアルテ・ポプラル：暮らし・商品・声」（仮称）

提案者：鈴木　紀

メキシコでは、先スペイン時代に開花したメソアメリカ文明が基盤となり、16世紀以降はヨーロッパ、アフリカ、アジアの文化が流入し、アルテ・ポプラルと呼ばれる独自のものづくりの伝統が生まれた。これには、先住民族が儀礼に用いる仮面から、観光用の工芸品、政治的メッセージを込めたストリートアートまで、多様な物が含まれる。企画展では、アルテ・ポププラルの特徴として①人々の日常生活が反映されていること、②商品として国内外で流通していること、および③人々の主張が表現されていることの３点に着目し、展示を構成した。

梅棹忠夫生誕100年記念企画展「知的生産のフロンティア」準備

提案者：小長谷有紀

初代館長であった梅棹忠夫（1920-2010）の生誕100年にあたる2020年を機に、梅棹アーカイブズとして整理されてきた資料、とりわけ近年研究費を用いて整理されてきた資料を中心に公開する。

企画展「サウジアラビア、オアシスに生きる女性たちの50年――『みられる私』より『みる私』」の巡回展

提案者：西尾哲夫

企画展「サウジアラビア、オアシスに生きる女性たちの50年――『みられる私』より『みる私』」を横浜ユーラシア文化館にて開催した。文化人類学者片倉もとこによるサウジアラビア現地調査資料（写真ほか）ならびに収集による本館所蔵資料（民具・衣装ほか）と、現地での最新の調査結果にもとづくデータを中心に、物質文化に焦点を当てることで、この半世紀における沙漠環境や社会構造の変化に伴うオアシスでのムスリム女性たちの生活の持続と変容について検証した。

国立民族学博物館・国立科学博物館共同企画展「ビーズ――自然をつなぐ、世界をつなぐ」

提案者：池谷和信

本計画では、民博所蔵の標本資料を中心に活用して、世界における多様な素材で作られたビーズや社会的役割を持つビーズを展示した。これらをとおして、私たち人類ホモ・サピエンスの文化の特質を理解する機会となった。つまり今回の展示は、特定の地域の文化に焦点を当てたものではなく、地球上に普遍的にみられるビーズ

というものをとおして、「人類とは何か」という人類学の基本課題を正面から追求したものである。

国立民族学博物館コレクション「世界の衣装」

提案者：上羽陽子

国立民族学博物館所蔵の標本資料を活用し、写真資料や映像資料とともに世界の衣装の多様性と豊かな手仕事の世界を紹介する展示を2019年11月13日（水）～25日（月）まで、阪急うめだ本店「阪急うめだギャラリー」において実施した。

特別展関連企画展「見てわかること、さわってわかること――ユニバーサル・ミュージアム再考」（仮称）

提案者：廣瀬浩二郎

本プロジェクトは2019年度途中での提案・採択だったため、実際に企画展準備に取り組んだのは2020年１月～３月の３か月間である。展示の実施に向けて、主に以下の４点を中心に活動した。①民博所蔵資料の選定（出展の可否について、各展示プロジェクトチームと調整）。②協力アーティストの作品内容（大きさと個数）の確定。③展示レイアウト、設計図面の検討。④一部の出展予定資料の撮影（図録・リーフレット掲載用）。

4）博物館社会連携分野

知的障害者の博物館活用モデル構築に関する実践的研究

提案者：信田敏宏

昨年度に引き続き、知的障害者を対象とした試行的ワークショップ「みんぱく Sama-Sama 塾」を開催した。知的障害者にとっても分かりやすく、楽しめる博物館の活用モデルを目指し、知的障害者が博物館を活用する際に必要とされる支援や改善点などを検討しながら実施した。

小・中学生用パンフレット改訂

提案者：樫永真佐夫

本館展示場新構築以前の2009年に作成されたパンフレットは、展示場の現状との間に齟齬が生じていた。そのため内容を精査し、小・中学生の利用者による主体的な学びと展示場の有効利用を促すための新しい情報を追加するなど、改訂を行った。

3．文化資源計画事業

文化資源計画事業は、本館の共同利用基盤を整備・強化することを目的として、継続性の高い事業、または計画的に実施する事業で、３つの分野（資料関連、展示、博物館社会連携）に分けられる。

1）資料関連分野

標本資料の撮影等業務

本事業は、標本資料を研究、展示、情報提供等に有効利用するために、標本資料の撮影、計測、及びそれらに付随する業務をおこなうものである。標本資料の正確かつ詳細な画像情報を記録し、標本資料を有効に活用するための基礎的データの蓄積を目的としており、大学共同利用機関として資料に付随する情報の公開等に供するデータを作成する基盤的な事業である。

研究資料整理・情報化及び利用管理業務【標本資料関連】

本事業は、本館が所蔵する標本資料に関する情報の作成及び資料の整理等を行うとともに、当該資料に関する情報サービス、展示準備・展示運営のための資料管理及び情報の作成・管理等を行うものである。

研究資料整理・情報化及び利用管理業務【データベース関連】

本事業は、本館が所蔵する標本資料に関する情報の作成及び資料の整理等を行うとともに、当該資料に関するデータベース掲載情報の作成、更新作業及び「人類の文化資源に関するフォーラム型情報ミュージアムの構築」に係るデータ整理業務を行うものである。

有形文化資源の保存・管理システム構築

本館所蔵資料の保存と活用の両立を目的に、その保存・管理システムを緊急度に応じて構築することを目的にしている。本事業では、①有形文化資源の保存対策立案：総合的有害生物管理（IPM）の考えに基づいた生物被害の防除・殺虫対策、②資料管理のための方法論策定：博物館環境調査の分析および収蔵資料の収納改善と再配架、③資料の科学的調査の推進、これら資料管理に関わる研究と事業を、総合的かつ長期的視点のもと、

企画、実施、統括した。

トーテムポールの新規製作

2017・2018年度の台風により屋外に展示してあるトーテムポールの両翼が破損したため、新たなトーテムポールを製作することとなった。2018年度に、カナダ・バンクーバー島の先住民族クワクワカワクゥのアーティスト、ビル・ヘンダーソン氏にトーテムポールの製作を依頼し、2020年２月に完成した。完成したトーテムポールは、３月に日本へ向け発送された。

標本資料「東北六県の伝統こけしコレクション」の寄贈受入

本事業は、東北六県の伝統こけし232点の寄贈を受け入れるものである。このこけしコレクションは、寄贈者が平成元年から３年間にわたり、「伝統こけし工人手帳」をガイドブックに、東北六県の各工人工房を訪ね、その工人の自薦の「こけし」を収集したもので、おおよその点数の収集地、工人がリストにまとめられている。散逸を防ぐ意味でも、また個人が所有するよりも、公共に資するのが良いと考え寄贈を望まれた資料群である。

標本資料「日本の備中神楽面」の寄贈受入

本事業は、岡山県で使用されていた神楽の面９点の寄贈を受け入れるものである。この神楽面は、寄贈者の父が収集したもので、40～50年前のものと考えられる岡山の備中神楽面である。

標本資料「インドネシア刀剣」の寄贈受入

本事業は、第二次世界大戦期に今日のインドネシア・タラカン島にて従軍した故岡田清氏が、1975年に戦没者遺骨収集団の一員としてインドネシアに赴いた際にインドネシア政府の軍関係者より贈られた刀を民博が受け入れ、東南アジア標本資料および本館の刀剣類の標本資料の充実を図るものである。

標本資料「ブータン刀剣」の寄贈受入

栗田靖之民博名誉教授が所蔵していた、ブータンのダショという称号を与えられた人が腰に提げる刀、中国リス族の鉈、ネパールの刀剣（ククリ）等の寄贈を受け入れ、標本資料として整備した。刃渡りの長い刀剣類、とくにダショの刀は、国内で入手することが困難であり、稀少な資料が展示や共同利用で活用できるようになった。

標本資料「インドの仮面劇チョウで使用する面」の寄贈受入

インド音楽・芸能の研究者である田中多佳子氏（京都教育大学教授、民族音楽学者）が、1984年にインド、デリーで入手したチョウ（Chhau）仮面劇に用いる仮面１点を寄贈資料として受け入れた。

標本資料「フィリピン華僑の食物入れ用手提げ篭」の寄贈受入

本事業は、1980年までにフィリピンの首都マニラの華人たちが使用していた食物入れ用手提げ篭を受け入れるものである。今日では入手が困難な資料で、近現代の東南アジアと華僑文化を理解するのに重要な資料であり、特にフィリピン華僑の標本資料が不足している本館にとって貴重な資料である。

標本資料「中国のプイ族の絞り染め」の寄贈受入

本事業は、現代中国の絞り染めの文化を理解するのに重要なものであり、特に中国のプイ族の標本資料が不足している本館にとって、貴重な資料である。この絞り染めの画は、貴州省黔南プイ族ミャオ族自治州龍里洗馬店平坡村在住の女性（彦群花）による手作りのものであり、プイ族の人びとが笛の伴奏の下に歌ったり、踊ったりする様子を表現するものである。

標本資料「中国の女児用衣装」の寄贈受入

本事業は、1980年代に中国で入手した女児衣装を受け入れたものである。今日では入手が困難な資料で、現代中国の庶民の服飾文化を理解するのに重要なものであり、特に中国地域の子どもの標本資料が不足している本館にとって、貴重な資料である。

標本資料「中国の麺棒」の寄贈受入

本事業は、中国安徽省宿州市の董欣栄（主婦）が1990年代後半から使用していた麺食の道具である麺棒を受け入れたものである。ナツメの木材よりつくられたこの麺棒は、入手が困難である。現代中国の庶民の暮らしと食文化の変化を理解するのに重要なものであり、特に中国地域の食文化の標本資料が不足している本館にとって、貴重な資料である。

標本資料「タイの彫像『象』」の寄贈受入

本事業は、タイのランナー・タイ地域の芸術家が子象の塑像に彩色した彫像を受け入れるものである。タイの文化においては象という動物が大切な象徴であり、それを現代のアーティストが表現した本資料を受け入れることで、当館の象文化に関する資料の充実をはかることができる。

標本資料「中華人民共和国成立五十周年切手」の寄贈受入

本事業は、1999年に中華人民共和国建国50周年を記念して中央民族大学より発行された天安門、北京市内の風

景及び56の民族衣装からなる記念切手のセットを受け入れたものである。今日では入手が困難である。現代中国の国家と社会を理解するのに重要なものであり、特に切手の標本資料が不足している本館にとって、貴重な資料である。

標本資料「毛沢東小型銅像」の寄贈受入

本事業は、2000年代に湖南省韶山市韶山村で製造された毛沢東小型銅像を受け入れたものである。中華人民共和国初代指導者である毛沢東生誕110周年記念につくられた観光みやげ品であり、今日では入手が困難である。現代中国の国家と社会を理解するのに重要なものであり、特に近代社会の指導者に関わる標本資料が不足している本館にとって、貴重な資料である。

標本資料「北米太鼓関連ポスター」の寄贈受入

提案者（寺田吉孝）が北米音楽文化研究の一環として収集したタイコ（和太鼓）演奏グループのポスター28点を寄贈受入した。本資料は民博特別展「越境する民族文化――いきかう人びと、まじわる文化」（1999年９月９日～2000年１月11日開催）の準備調査中に収集した資料である。

標本資料「日本の押し絵屏風」の寄贈受入

本事業は、押し絵屏風２点の寄贈を受け入れるものである。押し絵は、布細工による貼り絵の一種であり、近年では製作者も減少している。本資料は、祖母の後を継ぎ「押し絵の会」を主催していた寄贈者が制作した押し絵屏風で、祖母の作品は1988年に本館に寄贈されている。布の入手や作画が困難になってきたことから会の運営を断念することとなったが、江戸時代から続く押し絵（特に浮世絵）を残したいと思い寄贈を望まれたものである。

標本資料「沖縄の身分証明書」の寄贈受入

本事業は、戦後アメリカの統治下にあった沖縄在住の寄贈者の身分証明書（身分証明書、旅券、予防接種記録等）10点の寄贈を受け入れるものである。戦後、アメリカの統治下にあった沖縄で発行された身分証明書と、沖縄返還後に日本政府により発券された旅券は、当時の沖縄在住の人々の社会的立場や様相等が窺える資料として、戦後史の研究に資するものと考える。

標本資料「山形県のやっさら人形」の寄贈受入

本事業は、山形県遊佐地区直世地区につたわる「やっさら人形」の寄贈を受け入れるものである。やっさら人形を流し雛として川に流す「やっさら藁人形流し」は、2019年現在では山形県直世地区の中川及び樽川の２地区でしか行われていない。本資料は、寄贈者が2015年頃に、流し雛行事参加者の農家の方が自作されたものを譲り受けたもので、伝統文化を伝える資料として、本館の人形や日本の伝統行事に関係する資料の充実を図るものとして貴重である。

標本資料「マッチ箱・駅弁・たばこ・乗車券・入場券のパッケージのスクラップブック」の寄贈受入

旧蔵者が、昭和10年頃から平成年にかけて収集したマッチ箱・駅弁・たばこ・乗車券・入場券などを添付し整理したスクラップブックを受け入れる。同資料は関西在住の旧蔵者が通勤通学や旅行の際に各地で自ら収集したもので、当時の学生や労働者や都市生活者の生活の様々な側面を具体的にうかがうことができる。

標本資料「中国ナシ族のトンパ文字」の寄贈受入

本事業は、雲南省北部ナシ族に伝わる、象形文字の一種であるトンパ文字による手書きの対句である（「布鳥啼叫、伝来佳音」）を受け入れたものである。世界で唯一の「生きた象形文字」とされ、ナシ族の中でもごく少数の「トンパ」と呼ばれる司祭によってのみ受け継がれているこのトンパ文字は、今日では入手が困難な資料でもあり、現代中国の少数民族を理解するのに重要なものであり、特に象形文字の標本資料が不足している本館にとって、貴重な資料である。

標本資料「中国の春聯」の寄贈受入

本事業は、総研大の韓国人留学生である金桂淵氏が2010年に韓国大邱の華僑会館で収集した春聯を受け入れたものである。今日では入手が困難な資料であり、韓国華僑の暮らしを理解するのに重要なものであり、特に海外華人の春節の標本資料が不足している本館にとって、貴重な資料である。

標本資料「中国の文鎮（覇王項羽）」の寄贈受入

本事業は、2016年に楚の覇王項羽（232–202 BC）が漢の劉邦に敗れ、最期を迎えた場所である安徽省和県烏江鎮で入手した文鎮の寄贈を受け入れるものである。文鎮は、記念品として烏江鎮にある覇王祠で販売され、その両面は、項羽の略歴と司馬遷の『史記・項羽本紀』の中で記載された項羽のことばが明記されている。中国人の歴史記憶を理解するのに重要なものであり、特に文鎮の標本資料が不足している本館にとって、貴重な資料である。

標本資料「中国のボールペン」の寄贈受入

本事業は、岳飛（1103～1141年）が埋葬されている浙江省杭州市西湖近くの岳王廟で収集したボールペンを受け入れたものである。ボールペンの表には、彼の背中で刺された「尽忠報国」と岳飛自筆の「還我山河」の文字が明記されている。中国人の歴史記憶を理解するのに重要なものであり、特に中国地域の文具の標本資料が不足している本館にとって、貴重な資料である。

標本資料「中国の陝北漢画像石拓本」の寄贈受入

本事業は、2003年に中国の陝西省北部楡林市で収集した、楡林市米脂県官庄で出土された漢代の墓の画像石拓本を受け入れたものである。画像石は三つの部分からなり、上は孔雀（朱雀）、中間は幕が張ってある馬車に乗る貴族の女性、下は馬を飼育する御者、まぐさ桶と木が描かれている。今日では入手が困難な資料であり、漢代の美術史および当時の生活史を理解するのに重要なものであり、特に古代拓本や墓の標本資料が不足している本館にとって、貴重な資料である。

標本資料「中国陝西省北部の切り紙コレクション」の寄贈受入

本事業は、2003年に中国の陝西省延安市で収集した、陝西省北部切り紙の第一人者である白鳳蓮女史（1931年生まれ）の切り紙作品のコレクションを受け入れたものである。今日では入手が困難な資料であり、中国の切り紙の伝統文化を理解するのに重要なものであり、特に中国西北地域の標本資料が不足している本館にとって、貴重な資料である。

標本資料「中国の書籍『毛主席語録』他」の寄贈受入

本事業は、中国瀋陽で使用していた文化大革命時期の学習資料を受け入れたものである。当時、小中高校、大学、さまざまな民族、職場や農村においてもっとも広く使用された、『毛沢東語録』（1963年発行）、『学習毛主席著作輔導読物』（「為人民服務」、「愚公移山」、「紀念白求恩」を収録した読本1967年発行）、『毛主席的五篇哲学著作』（1970年発行）の三種類である。これらは、当時の学習資料としてのみならず、さまざまな儀式等においても使用されるものであり、今日では入手が困難な資料である。近代中国の社会変化を理解するのに貴重な資料である。

標本資料「中国福建省の斗美宮（三王府）の護符」の寄贈受入

本事業は、福建省石獅市祥芝村の「斗美宮」により発行され、2003年にSARSが流行したときに使用されていた護符を受け入れたものである。護符には、守り神の王爺や、毛沢東の詩歌「送疫神」が印刷されている。今日では入手が困難な資料である。福建南部、台湾および東南アジアで篤く信仰されている王爺信仰の歴史とその伝播を考えるのに貴重な資料である。

標本資料「中国福建省の斗美宮（三王府）の霊籤解説書」の寄贈受入

本事業は、2010年に福建省石獅市祥芝村の「斗美宮」で収集された神籤の解説書を受け入れたものである。この神籤の解説書は、手書きのものであり、「斗美宮」で長年聖職者によって使用されていたものであり、今日では入手が困難な資料でもある。現代中国の宗教的実践を理解するのに重要なものであり、特に南部中国および東南アジアの王爺信仰の標本資料が不足している本館にとって、貴重な資料である。

標本資料「中国の孔子肖像玉ペンダント」の寄贈受入

本事業は、2010年に福建省泉州市、学問の神様である孔子を祀る孔子廟（別名、文廟）で収集した孔子肖像玉ペンダントを受け入れたものである。この孔子肖像玉ペンダントは、孔子廟によって縁起物、お守りとして発行されたものである。社会主義体制の中国において、儒教の創始者である孔子が一般の人々や宗教施設によってどのように認識されているのかを考える上で、貴重な資料である。イデオロギーの規制が厳しい今日では入手が困難な資料でもあり、本館で所蔵する意義がある。

標本資料「中国の紙銭セット」の寄贈受入

本事業は、タイのバンコクで収集されて、タイの華人が使用する死者供養の紙銭セットを受けいれたものである。この紙銭セットは、死者があの世で不自由なく暮らすために用意された航空券、パスポートや、通帳、クレジットカード、テレホンカードを含む。今日では入手が困難な資料であり、タイの華人を考える上で、貴重な資料であり、特に現代の死者供養の標本資料が不足している本館にとって、貴重な資料である。

標本資料「中国の字牌（玩具）」の寄贈受入

本事業は、中国地域の伝統的遊びの一つである字牌を受けいれたものでする。本資料は、2010年に福建省泉州で収集され、泉州海外交通史博物館長である王連茂の母親（当時93歳）が、長年自宅で遊んでいた玩具である。今日では入手が困難な資料であり、伝統的中国の娯楽文化を考える上で、貴重な資料であり、特に娯楽の標本資料が不足している本館にとって、貴重な資料である。

標本資料「中国の新聞『石獅僑報』・『石獅日報』」の寄贈受入

本事業は、華僑の故郷と見なされている福建省南部で発行された地方新聞紙である『石獅僑報』（2012年３月15日）、『石獅日報』（2012年３月19日）を受け入れたものである。本新聞は、華僑の専門新聞であり、2012年に福建省石獅市で収集したものである。中国福建地元の人々と東南アジアの華僑との文化的、経済的なつながりを考える上で、貴重な資料であり、本館で所蔵する意義がある。

標本資料「中国の泉州海外交通史博物館発行の記念切手・絵葉書・しおり」の寄贈受入

本事業は、中国唯一の航海と海のシルクロードを展示する国立泉州海外交通史博物館が発行した記念切手・絵葉書・しおりを受け入れたものである。資料は、マルコ・ポーロの『東方見聞録』、と14世紀のイブン・バットゥータの『三大陸周遊記』で、「世界最大の港」として記された国際的港である、泉州外交通史博物館で2010年に収集したものであり、当時、遠洋航海に使用された船、ヒンズー教の神々やキリスト教天使の石彫刻などが記録されている。中国福建と、南アジアや世界とのつながりを考える上で、貴重な資料であり、特に海のシルクロードの標本資料が不足している本館にとって、貴重な資料である。

標本資料「中国の経典『道徳経』」の寄贈受入

本事業は、福建省泉州市の道教的施設が発行された道教の経典である『道徳経』を受け入れたものである。資料は、2010年福建省泉州市道教の寺院で収集した老子の道徳経のテキスト全文及びその現代語による解釈を含む。『道徳経』は、春秋時代の思想家老子が書いたと伝えられる本書は道家の代表的書物であり、社会主義体制の中国において、この道教的古典がどのように利用され、解釈されているのかを考える上で、貴重な資料である。イデオロギーの規制が厳しい今日では入手が困難な資料でもあり、本館で所蔵する意義がある。

標本資料「中国の銅製やかん」の寄贈受入

本事業は、内モンゴル地域で使われている伝統的な飲食道具である銅製やかんを受け入れたものである。本資料は、2017年内モンゴル自治区フフホト市で収集したものであり、このようなやかんは農耕民との茶馬交易を営んできた遊牧民によって、湯沸かしや水やお茶の容器として使われてきた。機械による大量生産の今日、この地域では、このような職人による手作りの銅製やかんがまだ見かけられる。今日では入手が困難な資料であり、現代中国のモンゴル族の暮らしを理解するのに貴重な資料である。

標本資料「米国先住民ホピ製アート３点（絵画、土器椀、ステンドグラス）」の寄贈受入

2019年４月から７月にかけて科研費で渡米した際に、申請者が先住民ホピのアーティスト複数名から民博への寄贈を前提として自作アート作品を託された。本計画事業により、それら３点を民博に寄贈する手続きを完了させた。寄贈した３点は、絵画１点（Ed Kabotie 作『A Tewa Migration Story』）、土器椀１点（Gwen Setalla 作『Mimbres Nectar Gatherers』）、ステンドグラス１点（Ramson Lomatewama 作『Mimbres Connection』）である。これらは、2017年８月28日から９月２日まで米国ニューメキシコ州立大学附属博物館などで開催した国際ワークショップの成果として制作された。

標本資料「ソマリの容器、屋根資料」の寄贈受入

本事業は、現在本館にはほとんど収蔵されていないソマリの民族資料として、ミルク容器・食物入れ・屋根を受け入れるものである。ソマリは、ラクダ遊牧民として知られる。今回の受入によって、食物入れやミルク容器から遊牧生活の一部を知ることができ、またこれまでほとんど収蔵されていなかった民族・地域の資料の充実を図ることができる。

標本資料「ペルーの帽子」の寄贈受入

本事業は、ペルー南高地で使用されていた女性用帽子１点の寄贈受入をおこなうものである。形と装飾から判断して、ケチュア語話者に民族集団カバナが使用するものと推測され、本資料を受けいれることで、南米アンデス地方の帽子資料の充実を図ることができる。

標本資料「日本のふくさ」の寄贈受入

本事業は、結納の際に使用されたふくさ等10点のふくさの寄贈を受け入れるものである。本資料群には、寄贈者の両親が結婚された際に実際に使用した結納の品の上にかぶせる「ふくさ」３点を含む。1929～1930年前後に入手された品で、鳳凰柄の大小（男性用、女性用）と、鶴亀柄の計３枚、ふくさを収める木箱が付属されており、経年しているにも関わらず保存状態がきわめて良好で、織物としての資料価値が極めて高い資料である。

標本資料「ミャンマーのぞうり（パナッ）」の寄贈受入

本事業は、ミャンマーの男性用ぞうり（パナッ）１点を受け入れるものである。本館は、ミャンマーで用いられる衣装ロンジーを複数所有しており、それに合わせて用いられるパナッも何点かあるが、男性がフォーマルな場で用いるパナッはなかった。今回あらたに寄贈を受けたことで、ミャンマーの伝統的衣装のバリエーションを把握できるようになる。

標本資料「大韓民国の衣服」の寄贈受入

本事業は、大韓民国で使用されている改良韓服や学生服、校章など29点を受け入れるものである。韓国の現代の改良韓服も学生服も、本館展示「朝鮮半島の文化」にて展示されている。校外学習で訪れた中高生やその関係者から、自分たちに身近な制服にも地域による差があることがわかったと好評を得ており、共同利用にもより深く寄与できる。

標本資料「ケニアの盾」の寄贈受入

本事業は、アフリカ・トゥルカナ族の戦闘用盾１点を受け入れるものである。アフリカンバッファローの革で作られた物は現在では入手困難であることから、貴重な資料であり本館のアフリカ関係資料の充実を図ることができる。

標本資料「南アジアの弦楽器および付属品」の寄贈受入

2019年度企画展「旅する楽器-南アジア、弦の響き」に借用した楽器および楽器の付属品の中から計20点の寄贈を受け入れた。内訳は、人類学者の田森雅一氏が1980年から1990年代にかけて収集した弦楽器とそれらの付属品18点、およびインド音楽の演奏家ガーヤトリ・カセバウム氏の私蔵資料２点である。

標本資料「アイヌの工芸品」の勘定科目替え受入

2020年開催の特別展「先住民の宝」に展示するために、消耗品として購入したアイヌの現代の工芸品（財布、ID カードホルダー、ペンケース、小銭入れ）について、展示終了後も活用できるよう、標本資料への勘定科目替えをおこなった。

標本資料「サーミの工芸および観光産業資料」の勘定科目替え

特別展「先住民の宝」に向けた2019年10月の現地調査において、庄司博史民博名誉教授と提案者が入手した、ノルウェーとフィンランドのサーミ工芸資料と観光産業資料（消耗品）を、標本資料として受け入れた。資料の多くは現地でしか入手できず、付帯情報も充実している。現代サーミの生業や先住民運動を推し量る貴重な資料として、展示や共同利用で活用できるようになった。

２）展示分野

コレクション展示　「日本から遠く離れて――朝枝利男の見たガラパゴス」

本館所蔵の映像音響資料である朝枝利男コレクションにもとづく展示を開催した。朝枝利男とは、アメリカの学芸員で画家・写真家・剥製師でもあった人物であり、本展示では、その中でもアメリカの探検隊に同伴して撮影したガラパゴス関係の写真を中心に、彼のアルバム・探検日記・魚類の水彩画について紹介した。

新型コロナウイルス感染のさらなる拡大の防止のため、国立民族学博物館が臨時休館されたことに伴い、当初予定していた期日（2020年３月24日（火））より早い２月27日（木）に閉会した。

３）博物館社会連携分野

ボランティア活動支援

国立民族学博物館におけるボランティア活動者の受入要項に基づき、登録したボランティア団体である MMP（みんぱくミュージアムパートナーズ）の活動支援をおこなった。

ワークショップの実施ならびにワークシートの運用

ワークショップ実施をとおして利用者からの様々な意見や要望を聞くことができた。また、社会連携事業検討ワーキングにおいて作成した６種類の新規ワークシートは、みんぱく展示場におけるあたらしい資料の見方を提示できる内容となった。

音楽の祭日2019 in みんぱく

社会連携活動の一環として、出演者229名（28組）が特別展示館およびエントランスホールにて演奏する音楽イベントを開催した。

みんぱっく「エチオピアをまとう――アムハラの装い」の制作

本館の教育機関向け貸出キット「みんぱっく」に関して、アフリカ地域を知りたいという教育現場からの要望が多いため、エチオピアの生活文化に焦点をあてたパックを新たに制作した。2019年度運用開始に向け準備を進めていたが、2018年６月18日に発生した大阪府北部を震源とする地震により、制作作業に必要な燻蒸庫（カポックス）が一時停止したため運用開始時期を半年延長した。

カムイノミ及び「アイヌ古式舞踊」演舞の実施

当館が所蔵するアイヌの標本資料に対して、安全な保管と後世への確実な伝承を目的に、祈りの儀式（カムイノミ）をおこない、あわせてアイヌ古式舞踊の演舞を、一般公開で実施した。初の試みとして、本館１階エン

トランスホールに大型モニターを設置して、カムイノミと古式舞踊の演舞の中継映像を流した。また、工芸品製作の実演「アイヌ工芸 in みんぱく」をおこなった。

みんぱっくの改訂版制作（アイヌ文化にであう）

学校機関や各種社会教育施設を対象に貸出を行う学習キット「みんぱっく」は、パック制作後10年を耐用年数とし、また、時代に即した内容にするためにも改訂を行う必要がある。2019年度は内容物についての新規制作と、それらについての情報の更新等の最終調整を行った。2020年４月より運用を開始することができる準備が整っている。

情報関連事業

情報関連事業は、2016年度まで文化資源関連事業として実施してきた事業の一部を再編し、2017年度から実施している事業である。本事業は、「情報プロジェクト」「情報計画事業」からなり、情報運営会議が募集し、選定する。2019年度の情報関連事業の概要は以下のとおりである。

１．情報プロジェクト

情報プロジェクトは、本館又は大学等関連諸機関が所有する学術資源の情報化をすすめ、本館専任教員のイニシアティブにより共同利用を促進し、学術的価値を高めるために、本館専任教員の提案に基づき、実施する研究プロジェクトである。

情報プロジェクトは、３つの分野（取材・収集、展示情報化、情報化）に関わる研究開発、または研究成果の展開を目的とし、その成果は共同利用に供するとともに、社会への還元を前提としている。

その選定においては、提案者が作成した提案書に対して館外の研究者や専門家から意見を聴取している。その意見書と提案者が行うプレゼンテーションに基づいて、情報運営会議の委員が審査し、委員の審査結果と評価指標を基に情報運営会議での審議を経て採択している。

１）取材・収集分野

●エチオピア、ティグライ州の女性の門付け儀礼“アシェンダ”の映像民族誌制作

提案者：川瀬　慈

映像民族誌「アシェンダ！エチオピア北部地域社会の女性のお祭り」の編集を行った。編集過程において、館内の教員、館外の有識者と構成について議論を重ね、最終的に37分の作品にまとめた。

●みんぱく映像民族誌「オアシス都市の暮らし――ウズベキスタン・サマルカンドの食文化」の制作

提案者：寺村裕史

ウズベキスタン共和国のサマルカンド周辺において2018年度に映像取材・撮影を実施した成果を素材に、みんぱく映像民族誌「オアシス都市のくらし――ウズベキスタン・サマルカンドの食文化」として約58分の長編映像１本を制作した。

●みんぱく映像民族誌「王の祭り――仮面の王国・マンコン、カメルーン高地」の制作

提案者：飯田　卓

研究公開利用の必要から仮編集されていた民族誌映像を、みんぱく映像民族誌の一編として公開するため、映像と情報を確認点検し、あらためて映像民族誌「王の祭り――仮面の王国マンコン、カメルーン高地」として完成させた。

２）情報化分野

●チベット宗教図像（白描画）データベース作成プロジェクト

提案者：三尾　稔

2015～2018年度に実施した共同研究『チベット仏教古派及びポン教の護符に関する記述研究』（代表者：長野泰彦）の成果公表の一部として、その結果を種々のレファランスと写真とともにデータベースとして整備し、共同利用に資する一助とした。

2．情報計画事業

情報計画事業は、本館の共同利用基盤を整備・強化することを目的として、計画的に実施する事業であり、所掌事務又は本館専任教員からの提案を基に、情報運営会議で実施するか否かを審議する。

1）特別展・企画展パノラマ映像制作

●特別展「驚異と怪異――想像界の生きものたち」
●企画展「サウジアラビア、オアシスに生きる女性たちの50年――『みられる私』より『みる私』」
●企画展「アルテ・ポプラル――メキシコの造形表現のいま」
●コレクション展示「朝枝利男の見たガラパゴス――1930年代の博物学調査と展示」

2）ビデオテーク番組制作

●「王の祭り――仮面の王国マンコン、カメルーン高地」
制作監修：飯田　卓、端　信行
●「民博でのカムイノミ――2016年度『ミンパク　オッタ　カムイノミ』の記録」
制作監修：齋藤玲子

2-4　人間文化研究機構　基幹研究プロジェクト

人間文化研究機構　基幹研究プロジェクト

人間文化研究機構総合人間文化研究推進センターは、2016年度より６ヵ年にわたり、国内外の大学等研究機関や地域社会等と組織的に連携し、現代的諸課題の解明に資する「基幹研究プロジェクト」を推進し、人間文化の新たな価値体系の創出を目指している。基幹研究プロジェクトは、（Ⅰ）機関拠点型、（Ⅱ）広領域連携型、（Ⅲ）ネットワーク型（地域研究および、日本関連在外資料調査研究・活用）の、３類型から構成され、その研究成果については、出版、データベース、映像および展示の制作等を通じて、学界や社会に広く発信するとともに、大学における新たな教育プログラムとして活用をはかる計画である。
本館が担当しているプロジェクトは以下のとおりである。

●広領域連携型
日本列島における地域社会変貌・災害からの地域文化の再構築
みんぱくユニット「日本列島における地域文化の再発見とその表象システムの構築」――――――――――――
代表者：日髙真吾

1．プロジェクト概要

日本列島は、南北に長く、海岸部から平野部、そして中山間部に居住地が広がり、それぞれの環境に適応させた多様な地域文化を育んできた。一方で、これらの地域文化は、グローバル化する社会変容のなかで、地域特有の文化が見えにくくなり、表面的には日本社会全体で画一化されたような印象を私たちに感じさせている。また、多発する大規模災害からの復興で、コミュニティの再編を余儀なくされた地域は、それまで受け継がれてきた地域文化を再構築せざるを得ない状況になることもしばしば見られる現状がある。

そこで、本研究では、地域文化に着目し、さまざまな地域でどのような文化が継承され、新たな文化が構築されているのかの実情を明らかにする。また、これらの動向に人間文化研究がいかに貢献しうるのかを考察し、現在（いま）への社会貢献、未来への社会貢献を視野に入れた研究成果を目指す。

具体的には、「地域文化の再発見」、「地域文化の保存」、「地域文化の活用」という３つの視点から研究を展開する。その上で、平常時において埋没している地域文化を再発見し、その文化をそこに住まう地域住民と外部社会の双方にとって地域文化を有意義な形で表象するためのシステムを構築する。

2．研究概要（研究目的、基本計画における当該年度の目的）

地域文化の保存を軸とした研究活動として、寺社で管理される文化財の保全を目的とした環境調査を実施し、よりよい保存環境の創出のための収蔵庫等の運用について助言をおこなう。また、地域文化の活用をテーマに台北芸術大学との共同主催で国際フォーラムを蘭陽博物館で実施するとともに、多言語による展示解説が可能な電子ガイ

ドおよび展示ツールを秋に開催されるICOM京都大会で展示する。

3．年次計画の進捗状況及び今後のプロジェクトの推進方策

年次計画の進捗状況

地域文化の保存を軸とした研究活動として、寺社で管理される文化財の保全を目的とした環境調査を大徳寺で実施し、蔵のなかでよりよい保存環境を創出するため、換気の時期について助言をおこなった。また、滋賀県日野町の馬見岡綿向神社祭礼渡御図絵馬の保存修復事業のなかで、蛍光X線分析による絵馬の顔料調査を実施し、修復支援をおこなった。地域文化の活用をテーマとした研究活動では、台北芸術大学との共同主催で国際フォーラムを蘭陽博物館で実施し、182名の参加を得た。本フォーラムでは、地域文化の活用について、日本の民俗学や台湾における地方学がどのような役割を果たすのか、また、実際に地域文化の活用を企画する博物館や市民がどのように連携できるのかについて、地域研究を専門とする研究者をはじめ、保存科学者や保存修復家、博物館学芸員や市民から、それぞれの実践活動について講演をおこない、効果的な地域文化の活用について議論を深めた。特に日本の文化財保護法の改正のポイントに観光資源として文化を積極的に活用する動きがあることについて、この改正が活用対象となる文化を生み出した地域にどこまで留意したものなのかを注視する必要があることを確認した。また、地域文化の活用について、地域文化の理解、保存、活用というプロセスを経ることで、地域振興や地域活性の可能性が広がっていくことを明らかにした。さらに、今年度は地域文化の活用を視野に、多言語による展示解説が可能な電子ガイドおよび展示システムを開発し、秋に開催されたICOM京都大会で展示した。電子ガイドは、民博の展示場をフィールドにして、展示観覧をサポートする機器である。この機器は、展示資料にまつわる日本語の動画番組に国連公用語とハングル、繁体字の字幕をつけることで海外からの来館者が展示を楽しむための支援をおこなうものである。ICOM京都大会でも展示するとともに、大会後、民博でのデモンストレーションをおこない、好評を得た。また、「Dr.みんぱこ」は健常者、視覚障害者、聴覚障害者が平等に展示資料の情報を得ることできる展示システムである。本システムは、「博物館・展示を活用した最先端研究の可視化・高度化事業」（人間文化研究機構）のなかで開発を進めた民博版モバイルミュージアム「トラベリングディスプレイシステム」を応用し、資料を触りながら、音声・字幕の入った解説映像から資料情報を得ることができるシステムである。次世代型のユニバーサルな展示システムとしての可能性について高い評価を得た。なお、本システムで応用した「トラベリングディスプレイシステム」は2019年9月13日に特許が認められ、登録されたことを追記しておく。

今後のプロジェクト推進方策

今年度にまとめた鹿児島大学大学院人文社会科学研究科との連携授業の報告書を2020年度に出版社から出版する予定である。また、2021年3～6月に各ユニットが参加して、民博において特別展「復興を支える地域の文化――3.11から10年」（仮題）を開催する予定である。さらに、2021年度にシンポジウムを開催し、報告書およびブックレットを刊行する予定で、これらを通じて研究成果を地域に還元する。

●広領域連携型

アジアにおける「エコヘルス」研究の新展開

みんぱくユニット「文明社会における食の布置」

代表者：野林厚志

1．プロジェクト概要

本研究の目的は、食の概念とその体系的な実践とを、文明社会を支える文化装置としてとらえ、食の社会的機能や歴史動態を解明し、食をめぐる社会的共存や衝突の原理を探究することである。

食は個体の生命を維持するための基本的な営みであると同時に、文化や経済と深く関わる行為としてとらえられてきた。一方で食糧資源の大量生産、大量廃棄、地球規模の人口増加と数億人にもおよぶ飢餓人口は、生態学的適応に乖離した現代社会の食の実態を物語っている。

こうした現代社会の食に関わる諸問題を超域的な視点で連結させるとともに、異なる視点をもつ研究分野の協働として、人類史の視点からの文明の盛衰と食との関係、生態学的アプローチからの食の機能等を議論に組み込み、文明社会の中における食の健全なありかたを探究していくことも本研究の狙いである。

なお、本研究プロジェクトは総合地球環境学研究所が中心となり推進する「アジアにおける『エコヘルス』の新展開」の一つのユニット研究として実施する。「エコヘルス」は、医療や疾病研究の視点で捉えられてきた「健康」を、社会変容と環境変化が急速に進む近現代における、暮らしや生態環境、生業、食生活等との関わりから探究し

ようとする新たな研究の視座である。

２．研究概要（研究目的、基本計画における当該年度の目的）

ユニットプロジェクトを構成する身体、生態、文化・制度の３つのグループで、それぞれの強みを活かした野外調査を実施するとともに、昨年度に構築したTEMS（The Eating Motivation Survey）のWeb調査ツールの試行を開始する。具体的な実施内容は、1）３つのグループがそれぞれの課題にしたがって、インドネシア、ラオス、日本、タイ、台湾、中国等のアジア各地域を中心に野外調査を行う。2）研究会の実施：年に２回、実施し、各グループの調査の進捗状況を確認し、研究進展のための意見交換を行う。また、各グループにおける研究会合を実施し、成果の共有をはかる。3）初年度に実施したアジア食論壇の成果刊行物の編集作業、昨年度に開催した国際シンポジウムの成果刊行論集の編集を行う。

３．年次計画の進捗状況及び今後のプロジェクトの推進方策

年次計画の進捗状況

【研究成果の公開・可視化】

- 『民博研究報告』特集「地域社会における食の構築」（査読付）を刊行した。
- 査読付き論文６本（前掲特集収録を含む）、査読なし論文・分担執筆論文２本等を刊行した。
- Association for the Study of Food and Society（ASFS）and the Agriculture, Food and Human Values Society（FFHVS）2019 の年次大会において、Critical Seafood Studies: Taste and Politics of Wilderness in the North Pacific. のパネルを組織し、研究発表を実施した。実施日と場所：June 28 2019, The University of Alaska Anchorage, Alaska
- ワークショップ「食資源の利用と移動ドメスティケーションの視点から」を実施した。
  実施日と場所：2020年２月９日（日）13:00～17:00、国立民族学博物館第６セミナー室
- 大手町アカデミアにおいて、当該ユニットからの平成31年度NIHU若手研究者海外派遣プログラムにおける調査成果の一般公開として「食べるフィールド言語学――『Food ×風土』の視点から」を実施した。
  実施日と場所：2020年２月13日（木）18:30～20:15、読売新聞ビル

【若手研究者の人材育成の取組み】

- 修士課程、博士課程の論文作成の支援として「若手研究者セミナー」を開催し、ユニットに参加している修士課程、博士課程の学生ならびに助教の研究発表と議論を行った。本年度はこのセミナーの参加者のうち、修士論文、博士論文の提出を１名ずつ達成した（いずれも学位取得）。
  実施日と場所：2019年11月16日（土）13:00～17:00、東京大学医学部
- 2019年度NIHU若手研究者海外派遣プログラムへ、機関の教員の推薦を行い、派遣プログラムによる海外調査を実施した。

今後のプロジェクト推進方策

COVID-19の感染対策のため、年度末に予定していたいくつかの海外調査を次年度以降に持ち越すことになった。世界的な状況を見ながらこれらに対応する必要があり、柔軟に計画を進めていく予定である。国際シンポジウム‘Making Food in Human and Natural History’の成果論文集の編集を完了した。現在、Springer社と出版に関わる交渉を進めている。TEMS（The Eating Motivation Survey）のWeb調査ツールの試行については、TEMSのアンケート票開発者との連絡が遅延し、質問項目の使用の正式な許可が得られなかった。このため、ユニットで独自の調査票を開発する等の対応が必要である。中期計画前半に実施した国際シンポジウム（アジア食論壇）の成果はすべて刊行し、当初の研究計画は達成している。次年度以降はプロジェクト全体の成果を発信するための出版計画を進める予定である。

●ネットワーク型：北東アジア地域研究

北東アジアにおける地域構造の変容――越境から考察する共生への道

中心拠点「自然環境と文化・文明の構造」

代表者：池谷和信

１．プロジェクト概要

国立民族学博物館北東アジア地域研究拠点は、民博館内の文化人類学・民族学およびその隣接分野の研究者、お

よび連携機関である国立歴史民俗博物館の考古学の研究者を中心に構成され、北東アジアを対象に、人とモノの移動と交流、政治及び経済のシステムの導入と影響に着目して、先史時代から現代に至るまでの長期的な時間幅の中で、自然環境と文化、文明の構造と変容の解明を目指している。

ここでの北東アジア地域とは、国・地域で言えばロシアのシベリア及び極東地域、モンゴル、韓国、北朝鮮、中国、日本に広がる空間を対象としている。従来は国家の枠組みにおいて研究が行われてきたが、これらの国・地域を横断的に捉える新たな試みである。

なお本拠点は、北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター、東北大学東北アジア研究センター、富山大学極東地域研究センター、島根県立大学北東アジア地域研究センター、早稲田大学総合研究機構現代中国研究所の各拠点とともに、中心拠点として本プロジェクトを推進している。

２．研究概要（研究目的、基本計画における当該年度の目的）

本プロジェクトは「北東アジアにおける地域構造の変容：越境から考察する共生への道」という中心研究テーマを設定し、各拠点にて研究活動を行っている。国立民族学博物館拠点では、「自然環境と文化・文明の構造」というテーマを掲げ、本年度は、調査研究を継続するとともに、最終年度における成果出版を見据えつつ、これまでの調査の結果を踏まえて研究成果の公開を進めた。

３．年次計画の進捗状況及び今後のプロジェクトの推進方策

年次計画の進捗状況

国立民族学博物館拠点では、館内研究会（６回）、ハンガリーのツングース研究者を交えた国際セミナー、熊本県球磨郡五木村において自治体と共催で国内セミナーを開催した。また、ヒトと動物の関係学会・関西シンポジウムの共催、国立科学博物館における展示への協力を行った。

今後のプロジェクト推進方策

特にプロジェクトとしての最終的な研究成果の提示を意識していくことになる。各拠点が研究成果を共有していくとともに、当該分野でインパクトのある提示方法を模索していくつもりである。

研究を推進していくための連携についてであるが、感染症対策を考慮したうえで可能な限り、これまで通り拠点間の連携と、国外ネットワークのさらなる拡充、強化を図りたい。

また、これらの研究成果と国内外の協力関係を教育に生かしていくことも重要である。研究成果を大学教育の場や社会に還元していくことはもちろんのこと、国内外の研究機関との協力関係を若手研究者が研究をするための資源として活用できるようにしておきたい。

●ネットワーク型：南アジア地域研究

グローバル化する南アジアの構造変動――持続的・包摂的・平和的発展のための総合的地域研究中心拠点「南アジアの文化と社会」

代表者：三尾　稔

１．プロジェクト概要

急速な経済発展とともに社会文化も大きく変りつつある南アジア地域の現状は、わが国にとっても到底無視できるものではない。本事業は、人文・社会諸科学を中心に自然科学分野とも協働して、地域的一体性の強い南アジア全体の総合的・俯瞰的な理解を深める研究プログラムを推進している。このプロジェクトには、副中心拠点である国立民族学博物館をはじめ、京都大学（中心拠点）、東京大学、広島大学、東京外国語大学、龍谷大学の６拠点が参加し、ネットワーク型の共同研究事業を行っている。

民族学博物館拠点では、南アジア発の人や文化・価値の環流状況の解明や社会変化の中でも維持される南アジア的な社会結合の特性の解明を通じ、地域固有の社会的レジリエンスの特徴を抽出し、グローバル化の中で生ずる社会的リスクへの対応という問題解決に貢献する。また、国際シンポジウムの開催、研究成果の英文叢書の刊行、国際学術協定の拡大、アジアにおける南アジア研究センター・コンソーシアムの構築など、拠点事業全体の国際化の推進を担っている。

２．研究概要（研究目的、基本計画における当該年度の目的）

本拠点の重点テーマは「南アジアの文化と社会」である。調査研究活動は、「南アジアにおける社会的レジリエン

ス」を扱う研究ユニット１（「移動・移民」研究班と「社会変動と親密圏」研究班）、「環流する南アジア」を扱う研究ユニット２（「音楽・芸能」研究班と「布」研究班）、そして両ユニットを橋渡しする「宗教」研究班という研究体制を軸に、南アジアの文化と社会の動態の長期的・総合的観点からの解明に取り組んでいる。また副中心拠点として、国際シンポジウム主催や開催支援、事業の研究成果の英文叢書等刊行支援、国際学術交流協定関係の拡大、国際南アジア研究センター・コンソーシアムの構築など、拠点事業の国際化の推進を行っている。

【調査研究活動】

南アジアをはじめ海外の各地に拠点メンバーを派遣し、南アジア発の文化の動態やグローバル化の中で維持される南アジア社会のレジリエンスの実態を調査する。調査成果は、拠点独自で編集する成果論文集の刊行を念頭に、昨年度同様、「移民・移動」、「音楽・芸能」、「社会変動と親密圏」、「宗教」、「布」の５つのテーマ別研究会を年に数回開催するほか、拠点全体でユニット２のテーマ「還流する南アジア」に関する合同研究会を１回開催して議論を深め、メンバー間で知見の共有を図る。また、外国人研究者を招聘したMINDAS-South Asia国際セミナーを複数回開催する。さらに、研究交流協定を結んでいるエジンバラ大学との研究協同を推進するため、拠点メンバーを派遣して研究発表の機会を提供し、今後の共同的研究の発展に関して意見交換を行う。

国際的な南アジア研究センター間の連携やネットワーク化を目指して2016年度に発足させたACSASの第３回国際シンポジウムをシンガポール国立大学と共催（11月）し、日本から研究者を派遣して研究発表の機会を提供するとともに、シンポジウム後に行う運営会議で今後の共同的研究ネットワークの発展に関して意見交換を行う。また12月には、龍谷大学と京都大学との共催による第11回INDAS全体国際シンポジウムを開催していく。

【研究成果の公開・可視化】

⑴　報告書・成果論集、シンポジウム、データベース等

①　第１回ACSAS（2017年度）の成果をWorld Scientific社（シンガポール）から刊行し、第２回会議（2018年度）の成果の刊行に向けた作業も進めた（韓国外国語大学南アジア研究センター発行の学術雑誌Journal of South Asian Studiesの特集号として刊行予定）。

②　2018年１月にネパール・カトマンズで開催したINDAS South Asia/Martin Chautari共催の国際シンポジウム（第９回INDAS全体国際シンポジウム）に関する成果論集の取りまとめ・編集作業を引き続き支援し、年度内にRoutledge社から刊行を目指した。

③　INDAS-South Asia全体および各拠点が中心となった英文の研究成果に対して校閲の補助を行った。

⑵　教育プログラム等

①　国立民族学博物館と大学の連携に向け、主に関西圏の大学で拠点メンバーがそれぞれ担当する授業等において、同館の活用方法および南アジア展示に関する解説を行い、南アジア地域の理解を促した。

②　社会人向けセミナー等への出講を積極的に行い、南アジア地域に関する研究成果の普及に努めた。

③　南アジア研究の若手研究者育成の重要な機会となっている「南アジア研究集会」の第52回大会を共催し、本拠点の「布」班の研究成果公開の一環とするとともに、研究集会で若手研究者に研究発表や研究交流の機会を与え、研究者育成を促進した。

⑶　展示等

①　国立民族学博物館の南アジア展示コーナーに関して、「躍動する南アジア」の現在を念頭に置きつつ、随時展示替えや一部改修を行った。

②　本拠点「布」班を中心として企画を進めている、2021年度開催予定の企画展開催の準備を支援した。

③　同館に寄贈されたブータン民族資料の調査とデータベース化を支援し、南アジアの文化と社会に関するモノ資料の更なる充実を図った。

【研究プロセスの国内外に向けた情報発信】

拠点が運営するホームページからの情報発信を積極的に進めるとともに、本プロジェクトの国際化をさらに推進すべく、英文情報ページの充実を図った。

【若手研究者の人材育成の取組み】

拠点が主催する個別・合同研究会等で博士後期課程・PDレベルの若手研究者に研究発表の機会を積極的に与え、研究ネットワークの拡充を図る。また若手研究者のフィールドや国際学会への派遣に努め、調査・研究活動を支援する。これらを通じて若手研究者の研究能力の育成に取り組んだ。

３．年次計画の進捗状況及び今後のプロジェクトの推進方策

年次計画の進捗状況

【調査研究活動】

本拠点メンバーの中から計11名の研究者をインド（ムンバイ、ラージャスターン、グジャラート）、スリランカ、シンガポール、アメリカ、フランス等に派遣し、南アジア発の文化の動態やグローバル化の中で維持される南アジア社会の実態について、個別の事例を比較検討するために現地滞在調査を行った。最終年度の成果発信に向けて、各々の研究の進展に貢献した。

昨年度に引き続き、研究ユニット１「南アジア社会におけるレジリエンス」を「社会変動と親密圏」「宗教」「布」、研究ユニット２「環流する南アジア」を「音楽・芸能」「移民・移動」という各班にわけ、具体的なテーマに絞った個別の研究会を計７回（計44名が参加）と各班を統合した合同研究会を１回、国際セミナーを２回、本拠点独自の成果論文集の出版（2021年度刊行予定）に向けた問題意識の共有と議論をさらに深めた。拠点全体としての研究活動の一体性が増す効果が得られた。（３月７日の宗教班研究会は新型コロナウイルス感染症拡大の影響により延期）

本プロジェクトの国際化を担う当拠点の活動として、国際的な（特にアジア圏）南アジア研究センター間の連携やネットワーク化を目指して、2016年度に発足させたACSASの第３回国際シンポジウムを国立シンガポール大学と共催で開催し（シンガポール、11月22・23日）、発表者をプロジェクト内から公募で募り、４名の研究者を派遣して研究発表を行った。また、シンポジウム後に開いたコンソーシアム運営会議において、研究成果の刊行や共同的研究ネットワークのさらなる発展に関して意見交換を行った。

南アジアのグローバルな重要性が高まるなかで、アジア諸国には南アジア（またはインド）研究センターが次々に設立されつつあるが、各研究センター間を横断した連携は皆無に等しかった。本コンソーシアムは南アジア研究の厚い蓄積を有する日本を基軸として、アジアにおける南アジア研究の連携を図り、欧米によるコロニアル／ポストコロニアルな枠組みとは異なる関係を育んできたアジア諸国の歴史的経験に立脚した南アジアへの視点を新たに確立することで、南アジア研究の国際的な活性化を狙う特色がある。運営面では、第１期事業以来ネットワーク型地域研究の経験を積み重ねてきた本研究プロジェクトが主導し、とくに本プロジェクトの国際化を担う国立民族学博物館拠点がハブとしての役割を果たし、参加各国持ち回りでのシンポジウムの開催やその成果論文集の編集、さらにはメーリングリストを通じた情報共有などを行って、アジア圏を中心に本プロジェクトの存在を広く海外に発信することに貢献している。

英国・エジンバラ大学南アジア研究センターとは第１期事業以来研究交流協定を結び、研究者を相互に派遣して国際セミナー等を開催してきたが、2020年５月に協定の期限を迎える。そこで先方の代表と交渉して協定の継続について原則合意する一方、来年度本拠点の構成員の派遣に伴う共同的研究の実施についても意見交換を行った。

くわえて、第11回INDAS全体国際シンポジウム（龍谷大学大宮学舎開催、12月14・15日）を龍谷大学拠点および京都大学拠点との共催で実施し、拠点メンバーが企画・運営にあたるとともに、メンバーの中から２名が発表を行った。全体集会の企画・運営・成果において、拠点も一定の貢献を果たすことができた。

東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所に外国人研究員（４～７月）として来日していたインド人研究者を本拠点主催の国際セミナー（６月20日）に招へいし、独立運動期のインド社会学の言説構築に関して知見を共有した。さらに日本とバングラデシュの国際結婚カップルに関するドキュメンタリー映像作品を制作したバングラデシュ人研究者を、本拠点主催の国際セミナー（10月13日）に招いて、同映像の上映と日本のバングラデシュ移民に関する知見を共有した。これらを通じて、拠点の国際的ネットワークの深化に貢献した。

【研究成果の公開・可視化】

⑴　報告書・成果論集、シンポジウム、データベース等

「報告書・成果論集」

2018年１月にネパール・カトマンズで開催した第９回、2019年12月に龍谷大学で開催した第11回のINDAS全体国際シンポジウムの英文での成果論集をRoutledge社から刊行する予定であり、編集作業を進めた。第９回会議の成果の刊行は、2020年度になる。なお、同出版社は海外の大学・研究機関でも高く評価されており、研究成果の国際的な発信に大いに貢献できるものである。

当初計画を変更し、2017年11月にタイ・バンコクで開催したACSAS第１回、2018年11月韓国・ソウルで開催した第２回、および2019年11月シンガポールで開催した第３回国際シンポジウムの成果論集について、Journal of Indian and Asian Studiesからの刊行を目指して編集作業を進めた。同雑誌は韓国外国語大学インド研究所とWorld Scientific社（シンガポール）が共同発行する査読誌で、研究成果のグローバルな発信が期待される。

⑵　教育プログラム等

① 国立民族学博物館と大学間の連携促進にむけ、本拠点メンバーが関西圏の大学で担当する南アジア関連の授業において、同館が収蔵する文献・映像資料の活用方法や南アジア展示に関する解説を行い、学生にとって馴染みのない南アジア地域に対する理解を促した。また、同館にて受講学生（日本人および外国人留学生）を対象とした博物館実習も実施し、南アジア社会の暮らしをモノから体験する機会を提供することで、南アジア地域をより身近に感じさせることに貢献した。

② 同館が定期的に開催するウィークエンドサロンおよび公開講演会にて本拠点のメンバー複数名が講義を行い、南アジア地域の文化について参加者の理解を図った。

③ 全国市町村国際文化研究所にて、本拠点メンバーが全国の地方公務員研修者に対して、インドの暮らしと文化に関する講義を行い、地方行政における南アジアを中心とした国際交流の推進に貢献した。

④ 第52回南アジア研究集会（犬山国際ユースホステル、７月14・15日）および国際ファッション専門職大学シンポジウム「インド・ファッションの世界――素材から考える装い」（同名古屋キャンパス、７月13日）を共催で開催し、本拠点「布」班の研究成果の一部を公開するとともに、研究集会で若手研究者に研究発表や研究交流の機会を与え、研究者育成の推進に貢献した。

⑶ 展示等

① 国立民族学博物館の南アジア展示コーナーに関して、「躍動する南アジア」の現在を念頭に置きつつ、展示品の収集作業を支援した。将来的な展示コーナー改修に貢献した。

② 国立民族学博物館にて2019年８月から11月まで開催された特別展「驚異と怪異――想像界の生きものたち」で、南アジア関連の研究会実施の補助等を通じ、同展の開催を支援した。本特別展は非常に多く来場者に恵まれ、学術面でも高く評価された。そのうち南アジア関連展示には本拠点も大きく貢献した。

③ 本拠点「布」班の研究成果の一端を国立民族学博物館の企画展として2021年度に開催する計画を立て、本拠点「布」班を中心に企画を進めた。最終年度の企画展に向けて、準備は順調に進んだ。④同館に寄贈されたブータン民族資料の受け入れと今後の展示やデータベース化の可能性に向けて、同資料の研究を支援した。将来的な社会的発信に貢献した。

【研究プロセスの国内外に向けた情報発信】

本拠点が運営するホームページをリニューアルし、より分かりやすく、魅力的な掲載方法を検討するなどして、研究情報の国内外への発信をより一層強化した。

【若手研究者の人材育成の取組み】

本拠点メンバーや他大学のPD、助教、講師、准教授レベルの若手研究者に対して、本拠点が主催する班別および合同研究会での発表機会（のべ12名）を提供し、学際的な視点をふまえた研究能力の育成に務め、ワーキング・ペーパーや論文などの研究成果に結びつくよう働きかけた。加えて、国際学会（アメリカ、10月６日～10月22日）や、ACSAS第３回国際シンポジウム（シンガポール、11月22・23日）では発表者の公募と研究発表に伴う旅費の支援を行い、国際的な学術交流の機会を提供することに取り組んだ。

今後のプロジェクト推進方策

当初、「現代インド地域研究」プロジェクト第二期が2015年度から始まった時点では、2019年度までの５年間でINDAS全体国際シンポジウムを５回開催し、うち３回は「持続的発展」、「包摂的発展」、「平和的発展」を全体テーマとして、３冊の英文叢書をRoutledge社から刊行する計画を立てた。しかしその後、2019年度からあとまだ３年間を残すことになったため、国際シンポジウムをあと３回続け、それぞれの成果をベースとする、さらに３冊の英文叢書の刊行をめざすことにした。その基本思想は、「問題解決志向型研究」を持続的、包摂的、平和的発展の３つのテーマで研究を終えた今、INDAS-South Asiaの全体テーマの主題「グローバル化する南アジアの構造変動」に今一度立ち戻り、構造変動の様態をもう一度しっかりと分析して見据え、その上で一段高い視点から「問題解決」を考えてみようということである。

具体的には、2019年度の国際シンポジウムについては上述の通りであるが、2020年度は「経済」の構造変動、最終2021年度は「政治」の構造変動を取り上げ、それぞれ、東京大学経済班＋広島大学＋京都大学資源環境グループ、東京大学その他＋東京外国語大学＋京都大学政治グループ、が共同で担当することにしている。2020年度は、神戸大学にて “Understanding the Transitional Process from Agrarian to Industrialized Economy in South Asia: With a Focus on Employment and Labor Markets” をテーマとしてINDAS全体国際シンポジウムを開催することが決まっている。なお、英文叢書の出版は、INDAS-South Asiaプロジェクト終了後、2022年度、2023年度まで

ずれ込むことを見込んでいる。

次に、ACSASについて、2019年度のシンガポールでの国際会議については上述の通りであり、2020年度はベトナム、2021年度は日本で開催する予定である。成果論集の出版については、Journal of Indian and Asian Studiesからの刊行を予定している。なお、2022年度以降、INDAS-South Asiaプロジェクトが終了後もACSASへの主導的参画を続ける予定であるが、日本全体としての制度的枠組みや予算措置など、今後、詰めていく必要がある。

南アジアセミナーは2019年度は広島大学を幹事拠点とし、「南アジア地域研究のフロンティア――時空間のダイナミクス」を共通テーマに９月17日～19日まで開催し、５名の院生やポスドクレベルの研究者が参加・発表を行った。同セミナーにはプロジェクト第二期となった2015年度以降で、計36本の研究発表があり、のべ137名が参加し、次世代研究者の育成に大きく貢献してきた。この南アジアセミナーも、あと２年間は従来通り継続する。開催地は、2020年度が龍谷大学、最終2021年度が京都大学となる予定である。

また2020年度からは、その準備作業も含め、NIHUネットワーク型基幹研究プロジェクト「現代中東地域研究」および「北東アジア地域研究」の２つの地域研究プロジェクトとの間の本格的な連携事業の企画・運営に積極的に参画し、協力する所存である。INDAS-South Asiaはすでに、研究会や大学院生等の教育・育成プログラム（南アジアセミナー）で、他の２つの地域研究プロジェクトとの連携を行った実績がある。

●ネットワーク型：現代中東地域研究

地球規模の変動下における中東の人間と文化――多元的価値共創社会をめざして

中心拠点「中東地域における文化資源の現代的変容と個人空間の再世界化」

代表者：西尾哲夫

１．プロジェクト概要

現代中東地域研究では、国立民族学博物館拠点を中心拠点とし、その他国内の四拠点と共同で研究活動を進めている。端的に述べると現代中東地域研究とは、中東地域における「個」と社会（共同体）のあり方の現代的動態に基づき、グローバル化と地域をめぐる双方向の複眼的な分析ベクトルをもって、人類や人間文化という普遍的な価値を視野に入れた研究である。

本拠点では、現代的諸問題を解決するための基盤形成のために中東地域における社会構築のプロセスを、文化知識の資源化プロセスに着目して研究している。中東地域を基点として広がる空間においては、世界を形成・構想するうえで、生身の個人が経験する未知なる人・場・情報との遭遇が重要な役割を担っている。流動する諸個人が暫定的に構築してゆく場の継起・累積から社会を構想する方法を、文化知識の資源化という側面から検討することで、個人が織りなす世界の特質を解明することが可能となる。そこで⑴「個」から世界への視点による他者観と、⑵社会的心性としての世界観にかかるサブプロジェクトを連携させた活動を実施している。

２．研究概要（研究目的、基本計画における当該年度の目的）

中東地域の現代的動態について、資源をめぐる問題系として①文化資源（文化遺産、個人と世界観、宗教とマテリアリティなどの問題群）、②自然資源（生態系と生活空間、環境問題と人間、資源と環境ガバナンスなどの問題群）③知的資源（情報環境、コミュニケーションと社会空間、伝統知と教養などの問題群）④人的資源（高齢化、障害者、女性・子ども・若者、経済的弱者やマイノリティ、難民などの問題群）として整理し、それぞれの問題群の検討を通じて、人間文化や人類の普遍性への地平を拓く新たな価値創出を目指す。

国立民族学博物館現代中東地域研究拠点（担当分野：文化資源）では、「個人空間の再世界化」をテーマとし、文化知識の資源化に焦点をあててきた。

基本計画では、プロジェクト４年度目の本年には、1)各研究拠点の研究推進（本調査）、2)若手研究者による公募型共同研究の成果発表及び推進（１年次）、3)展示活動による研究成果の発信、4)研究成果の公刊（日本語・英語・仏語・アラビア語等）の四つを柱として設定した。ただし当初の基本計画では公募型の若手共同研究は運用について計画変更を行っており、第２年次として東京外国語大学拠点での若手共同研究事業を継続して行いつつ、上智大学拠点、秋田大学拠点で若手共同研究事業を開始した。

３．年次計画の進捗状況及び今後のプロジェクトの推進方策

年次計画の進捗状況

プロジェクト前半の研究成果を刊行物としてとりまとめを行いつつ、プロジェクト後半の研究体制を整えながら、博物館検索データベースに新たに湾岸諸国編を編集したことに加え、これまでの各国のデータを横断して検索可能

なプラットフォームへと変更するなど利便性の高い研究インフラの整備を進めた。初年度から行ってきた日本語・英語でのレクチャーシリーズを継続的に実施したほか、プロジェクトのプレゼンスを国内外で高めるとともに国内外の大学等研究機関との連携強化を目的に、一般市民に向け日本出身の世界的なイスラーム学者であった井筒俊彦に焦点を当てたドキュメンタリー『シャルギー（東洋人）』（4月27日）のフィルム上映ワークショップを龍谷大学で開催したことに加え、国外でもオックスフォード大学で国際ワークショップ（“Neither Near Nor Far: Encounters and Exchanges between Japan and the Middle East” 5月24・25日）を開催した。また研究分担者でもあるマギル大学のサルヴァトーレ・アルマンド氏が2018年に刊行した *Wiley Blackwell History of Islam* の合評会を4月に開催し、国際学術雑誌への投稿の準備をすすめた。

さらに秋田大学拠点と協力しながら、片倉もとこ本館名誉教授が行った調査への追跡調査によるソースコミュニティとの協業に基づいた企画展示「サウジアラビア、オアシスに生きる女性たちの50年――『みられる私』より『「みる私』」を国立民族学博物館（6月6日～9月10日入館者数34,180名）と横浜ユーラシア文化館（10月5日～12月22日10380人）にて開催し、ワークショップ、ギャラリートーク、講演会などの関連行事を通じて、日本の一般社会と研究成果を共有することができた。また秋田大学で開催された日本中東学会年次大会（5月12・13日）において、同大学拠点協力しながら大会運営を行った。

今後のプロジェクト推進方策

各拠点が各分担テーマについて研究を深めていくことはもとより、現代中東地域研究全体での研究成果の発信を進めていきながら、プロジェクトで当初から設定してきた人類や人間文化という普遍的な価値を提供することが可能であるようなグローバル化時代の中東地域研究へと議論を高次に発展させていく。

国立民族学博物館拠点においては、継続して行ってきたレクチャーシリーズなどの研究会を通じて方法論的深化を進めていくとともに、京都大学拠点と協力しながら日本語での現代中東地域研究全体での研究叢書の刊行に向け、編集作業を進める。

なお新型コロナウイルス感染症の世界的な流行にともない、移動制限をはじめとした研究活動への影響も予測されるなか、オンラインによる研究会の開催など、これまで構築してきた研究体制を資本としながら新たな社会的状況に対応した研究活動も推進していく。

2-5　研究成果の公開

刊行物

●国立民族学博物館研究報告

44巻1号（2019年7月25日発行）

• 論文

国立民族学博物館における大阪府北部を震源とする地震による収蔵庫の被害と対応 ―――― 園田直子
大阪府北部を震源とする地震で被災した国立民族学博物館の復旧活動 ―――― 日髙真吾
アグリビジネスから食の民主主義へ――岐路にある日本とフランスの食と農 ―――― 竹沢尚一郎
参加と競争のはざまにおけるテクノロジーをめぐって
――スペイン・カタルーニャ州の人間の塔を事例に ―――― 岩瀬裕子

44巻2号（2019年10月29日発行）

• 論文

The Decay and Reconstruction of Nominal Classes in Srinagar Burushaski ―――― Noboru Yoshioka
工場生産の現場にみる身体――機械の関係性 ―――― 日比野愛子

• 特集「地域の食の形成――日本を中心とした産業化の脈略のなかで」

序 ―――― 野林厚志
変容する伝承食の真正性――福井県嶺南地方沿岸部のサバのヘシコナレズシを事例として ―――― 濵田信吾
戦後日本における鯨肉の変遷――工業化時代の代替肉からポスト工業化時代の伝統食へ ―――― 若松文貴
アメリカ合衆国，日本のローカルフードの成長と緊張 ―――― イーサン・D・スクールマン／アレクサンダー・ホー
現代日本におけるうま味の認識とその構築 ―――― 大澤由実
台湾社会における甘味を嗜好した飲食文化の形成――砂糖の歴史生態から考える ―――― 野林厚志

44巻 3 号（2020年 1 月 6 日発行）

• 論文

普遍主義の饗宴――アナガーリカ・ダルマパーラと神智協会 ―― 杉本良男

Nomadic Storytellers: Scottish Traveller Self-Representation in Stanley Robertson's *Exodus to Alford* ―― Ryo Yamasaki

• 研究ノート

日本手話，台湾手話，韓国手話の二桁から四桁の数の表現における変化
――「10」「100」「1000」に着目して ―― 相良啓子

44巻 4 号（2020年 3 月16日発行）

• 論文

海域世界の鼓動に耳を澄ます――19世紀インド洋西海域世界の季節性 ―― 鈴木英明

1930年代のアメリカにおける私的探検の考察
――朝枝利男が参加した探検隊の旅程と経路の分析から ―― 丹羽典生

• 研究ノート

ソニンケ民族の文化運動と地域ラジオ局――「文化週間」をめぐる民族誌的考察 ―― 三島禎子

●Senri Ethnological Studies

No.101（2019年 6 月21日発行）

Ritsuko Kikusawa, and Fumiya Sano（eds.）*Minpaku Sign Language Studies 1*

No.102（2019年12月 9 日発行）

Naoko Sonoda（ed.）*Conservation of Cultural Heritage in a Changing World*

●Senri Ethnological Reports（国立民族学博物館調査報告）

No.149（2019年 6 月24日発行）

岸上伸啓編『世界の捕鯨文化――現状・歴史・地域性』

No.150（2020年 3 月31日発行）

河合洋尚・張　維安編『客家族群與全球現象――華僑華人在「南側地域」的離散與現況』

●民博通信 Online

No.1（2020年 3 月31日発行、旧『民博通信』通巻165号）

真実と虚偽の狭間に措定された「史実性」の追究 ―― 風間計博

なぜ公共空間の生態学なのか――「潜在的なもの」に目を凝らし、耳を澄ますために ―― 内藤直樹

伝統染織とは何か――伝統と革新、そして継承 ―― 中谷文美　など

●TRAJECTORIA

No.1（2020年 3 月31日発行）

• Article

Creatively Utilising the Encyclopaedia Cinematographica Film Project: Visual Repatriation of the Masakin ―― Isao Murahashi

• Special Theme

Introduction ―― Atsunori Ito

Decolonizing Museum Catalogs ―― Kelley Hays-Gilpin, Atsunori Ito, and Robert Breunig

Demonstrational Lecture of the Collections Review Research ―― Cynthia Chavez Lamar and Jim Enote

Database as Collaborative Environment ―― Robin Boast

Collaboration Is Only a Tool to Decolonize the Museum ―― Chip Colwell

●研究年報2017 改訂版（2019年３月30日発行）

●外部出版

森　明子編『ケアが生まれる場 他者とともに生きる社会のために』ナカニシヤ出版（2019年４月26日刊行）

石森大知・丹羽典生編『宗教と開発の人類学――グローバル化するポスト世俗主義と開発言説』春風社（2019年６月３日）

池谷和信編『ビーズでたどるホモ・サピエンス史――美の起源に迫る』昭和堂（2020年３月31日刊行）

国立民族学博物館学術情報リポジトリ

「みんぱくリポジトリ」は、2010年１月12日に一般公開され、10年が経過した。2019年度は、館内出版物『国立民族学博物館研究報告』、『国立民族学博物館調査報告（Senri Ethnological Reports）』『民博通信』の登録を行った。また、今年度新しく刊行された電子ジャーナルの登録を開始した。

2019年度新たに登録したコンテンツは169件で、2019年度末のコンテンツ登録数は4,934件となった。コンテンツのダウンロード数は、年間540,384件に達している。

学術講演会

●みんぱく公開講演会

「アニメ『聖地』巡礼――サブカルチャー遺産の現在」

実 施 日　2019年11月15日（金）
場　　所　日経ホール（東京）
共　　催　日本経済新聞社
参 加 者　340名
概要説明　「遺産観光におけるバーチャリティ」
講　　師　飯田　卓（国立民族学博物館・教授）
内　　容　テーマ設定のきっかけとなった「文化遺産の人類学」について述べたあと、この分野が直面する課題として、インターネット上でおこなわれる不可視のコミュニケーションとその表面化のプロセスを把握することの重要性を指摘した。また、アニメのモチーフは観光資源になりうるにもかかわらず、場所とは結びつかない点で特殊である点を指摘した。
講 演 1　「聖地巡礼のラビリンス――現代日本における旅・キャラクター物語」
講　　師　川村清志（国立歴史民俗博物館・准教授）
内　　容　アニメや漫画の舞台となった場所を巡る「聖地巡礼」は、2000年代以後に大きく展開した。聖地の中には、地方の自治体や企業を巻き込み、国際的な観光地に成長する一方で、ファンと地域社会が物語を超えた新たな関係性を築くケースもみられる。地域社会の実情に対応した関係性の深化に注目しながら、聖地の現在を考えた。
講 演 2　「アニメのある景観――中国地域の客家文化継承をめぐって」
講　　師　河合洋尚（国立民族学博物館・准教授）
内　　容　台湾や香港では、近年、アニメ・キャラクターを描いた建造物が注目を集めている。この動きは、観光客を集めること以上に、若い世代が文化遺産に関心を持つことを意図しているという。客家の人びとがアニメを景観デザインに集める事例を報告し、変わりゆく文化遺産の現状を議論した。

パネルディスカッション

川村清志×河合洋尚　司会：飯田　卓

2-6　学会開催

学会開催

2019年度　なし

2-7　若手研究者奨励セミナー

若手研究者奨励セミナー

国内の大学院博士課程在籍者及びPD（ポストドクター）などの若手研究者を対象として、2009年度から「みんぱく若手研究者奨励セミナー」の名称のもと、本館教員の講演の後、参加者が特定のテーマで研究発表を行うセミナーを行っている。2017年度からは、研究部改組に伴い、新しく再編された各研究部のミッションに沿った形で当該研究部が年度毎に本プログラムを担当する体制を整えた。2019年度は超域フィールド科学研究部が担当し、「ゆらぐマジョリティ／マイノリティ」というテーマが設定され、国公私立大学の大学院生を含む若手研究者８名が参加した。教員による講演に続き、参加者による研究発表が行われ、優秀発表者に「みんぱく若手研究者奨励セミナー賞」が授与された。同時に、図書室、展示場などの施設見学や、アイヌのカムイノミ（神への祈り）見学を実施した。

2-8　研究員制度

外来研究員

BAE JINSUNG　裵 眞晟（ペ　ジンソン）韓国　釜山大学校人文大学考古学科教授
　研究課題：支石墓と民間信仰

BAI FUYING　白　福英（ハク　フクエイ）中国
　研究課題：中国・内モンゴルにおける漢民族の牧畜活動に関する研究――オラド後旗の事例から

CHE Sohee　諸　昭喜（チェ　ソヒ）韓国　奈良女子大学大学院人間文化研究科博士後期課程修了
　研究課題：アジアの民族特有の産後の病いに関する比較研究

De Antoni Andrea（デ・アントーニ　アンドレア）イタリア　立命館大学国際関係研究科准教授
　研究課題：現代日本とイタリアにおける憑依と除霊の体験――宗教・生物医療を感じる身体とジェンダー

Elnzeer Tirab Abaker Haroun（アルナジール　ティラブ　アバカール　ハロン）スーダン　National Corporation for Antiquities and Museums
　研究課題：「博物館とコミュニティ開発」コース

GAO Qian（カオ　チエン）中国
　研究課題：中国南西部の少数民族地域における芸術・文化の変容に関する研究

GHAZAL Walaa A.A.（ガザル　ワラ）パレスチナ　Ministry of Tourism and Antiquities
　研究課題：「博物館とコミュニティ開発」コース

HAKOOLA Alfred（ハコラ　アルフレッド）ザンビア　Lusaka National Museum
　研究課題：「博物館とコミュニティ開発」コース

HOFER Theresia（ホーファー　テレジア）オーストリア　Senior Lecturer in Social Anthoroplogy, University of Bristol
　研究課題：人類学におけるユニバーサル・ミュージアム・デザイン

KARAPETYAN Julietta（カラペティアン　ジュリエッタ）アルメニア　History Museum of Armenia
　研究課題：「博物館とコミュニティ開発」コース

MAISARAH Sarona（マイサラ　サロナ）インドネシア　Aceh Tsunami Museum
研究課題：「博物館とコミュニティ開発」コース

MARZEC AGNIESZKA（マジェッツ　アグネシカ）ポーランド
　研究課題：異文化接触場面におけるコミュニケーション・ストラテジー――在日外国人を中心に

MOHAMED Alzahraa Saifeldien Selim（モハメッド　アルザハラ　セイフディン　サリン）エジプト　Egyptian Museum / Ministry of Antiquities
　研究課題：「博物館とコミュニティ開発」コース

MWIINDE Shamu Ephason（ムインデ　シャム　エファソン）ザンビア　Livingstone Museum
　研究課題：「博物館とコミュニティ開発」コース

NAMUJIAFU（ナムジャウ）中国　総合研究大学院大学文化科学研究科博士後期課程修了
　研究課題：モンゴル国におけるオイラドの宗教復興に関する人類学的研究

PYEON Seollan（ピョン　ソラン）韓国　大阪大学大学院人間科学研究科博士後期課程修了
　研究課題：チベット難民の越境と第３国への再移住に関する人類学的研究

SAUCEDO SEGAMI Daniel Dante（サウセド　セガミ　ダニエル　ダンテ）ペルー　立命館大学言語教育センター外国語嘱託講師
　研究課題：現代ペルーにおける文化遺産の活用に関する研究

SHUR Bold（シュル　ボルド）モンゴル エドヴェシュ・ローランド大学モンゴル・中央アジア研究科博士後期課程
　研究課題：国立民族学博物館におけるモンゴル有形文化財の保管整備状況

TASHI Sangay（タシ　サンゲイ）ブータン　The Royal Heritage Museum
　研究課題：「博物館とコミュニティ開発」コース

VAVALOA William Southwick（ババロア　ウィリアム　サウスウィック）フィジー　Fiji Museum
　研究課題：「博物館とコミュニティ開発」コース

Wang Xiyan（オウ　シ　エン）中国　フランス社会科学高等研究院社会人類学博士課程
　研究課題：金門島（台湾）の自然・文化遺産――中国のフロンティアにおける集団的アイデンティティの構築

Yimin　伊敏（イミン）中国
　研究課題：中国における少数民族言語地名の漢字表記にみる歴史と文化――内モンゴル地域におけるモンゴル語と満洲語の地名を中心に

ZHAO Furong　趙　芙蓉（チョウ　フヨウ）中国
　研究課題：チベット仏教とモンゴル・シャマニズムの関係性に関する研究――モンゴル地域の土地神信仰をめぐって

ZONG Xiaolian　宗 暁蓮（ソウ　ギョウレン）中国　西南大学国際文化学部非常勤講師
　研究課題：日中相互間における社会イメージの形成および社会記憶の構造に関する研究――訪日旅行者のインタラクティブな文化交流と相互理解への影響を事例として

ZULU Betty（ズル　ベティ）ザンビア　Choma Museum and Crafts Centre
　研究課題：「博物館とコミュニティ開発」コース

秋保　さやか（アキホ　サヤカ）日本
　研究課題：内戦後のカンボジア農村開発に関する民族誌的研究

荒田　恵（アラタ　メグミ）日本　天理大学附属天理参考館学芸員
研究課題：アンデス形成期の祭祀遺跡における工芸品製作

伊藤　悟（イトウ　サトル）日本
研究課題：中国西南タイ民族における詩的オラリティの継承と創造的実践に関する研究

伊藤　渚（イトウ　ナギサ）日本
研究課題：布と人の関わりを通じた身体観の変遷に関する人類学的研究――ラオス北部タイ系民族の女性の織る布と紋様に注目して

稲井　啓之（イナイ　ヒロユキ）日本　日本学術振興会特別研究員 / 京都大学アフリカ地域研究資料センター・特任研究員
研究課題：アフリカ内水面における「よそ者」に着目した持続的水産資源管理構築に関する研究

井家　晴子（イノイエ　ハルコ）日本
研究課題：妊娠・出産の異常とその対処法に関する文化間比較研究

井上　航（イノウエ　コウ）日本
研究課題：ブラウクルン語の表出的な言葉と声についての民族誌的研究

今井　彬暁（イマイ　アキトシ）日本
研究課題：ベトナムのモン社会における死者のエージェンシーの研究

上畑　史（ウエハタ　フミ）日本　日本学術振興会特別研究員
研究課題：セルビアにおけるポップフォークと民俗音楽の比較分析による文化的連関の研究

浮ヶ谷　幸代（ウキガヤ　サチヨ）日本　相模女子大学人間社会学部教授
研究課題：現代日本における「看取り文化」の再構築に関する人類学的研究

内田　修一（ウチダ　シュウイチ）日本
研究課題：都市的環境におけるソンガイの精霊憑依の実践の研究

緒方　しらべ（オガタ　シラベ）日本　大阪大学非常勤講師
研究課題：感性と制度のつながり――芸術をめぐる「喚起」と「評価」のプロセスから考える

岡本　尚子（オカモト　ナオコ）日本　洗足学園音楽大学音楽学部非常勤講師 / 実践女子大学非常勤講師
研究課題：未発表原稿分析による J.-C. マルドリュスの執筆過程の解明

奥村　京子（オクムラ　キョウコ）日本　日本学術振興会海外特別研究員
研究課題：1980年代の以降のジェルジ・リゲティ作品における異文化表象

風間　計博（カザマ　カズヒロ）日本　京都大学大学院人間環境学研究科教授
研究課題：オセアニア・東南アジア島嶼部における他者接触の歴史記憶と感情に関する人類学的研究

川口　聖（カワグチ　キヨシ）日本
研究課題：日本における手話の言語変化に関する研究

神田　和幸（カンダ　カズユキ）日本　中京大学名誉教授 /NPO 手話技能検定協会理事長
研究課題：新手話学の構成素の実証的検証研究

工藤　さくら（クドウ　サクラ）日本　東北大学大学院文学研究科専門研究員
　研究課題：現代ネワール社会における儀礼の変容と≪テーダヴァーダ≫――ダルマ、ジェンダー、ダリット

工藤　由美（クドウ　ユミ）日本　東邦大学看護学部非常勤講師 / 慶應義塾大学法学部非常勤講師 / 江戸川大学社会学部非常勤講師 / 明海大学外国語学部非常勤講師
　研究課題：チリ先住民マプーチェの民族医療の都市的展開に関する人類学的研究

栗山　新也（クリヤマ　シンヤ）日本　沖縄県立芸術大学付属研究所共同研究員
　研究課題：三線が引き出す社会関係、価値、感情――大衆楽器が人びとに与える効果の研究

児玉　徹（コダマ　トオル）日本　筑波大学准教授（筑波会議・TGSW 推進ユニット ユニット長兼務）/ 一般財団法人国際貿易投資研究所客員研究員
　研究課題：産官学民連携のもとで文化ツーリズム推進策の人類学的な分析――ワインツーリズム推進政策の国際比較を中心に

小美浪　フミ（コミナミ　フミ）日本　アイヌ工芸家
　研究課題：アイヌの編み袋（サラニプ）の研究

佐川　徹（サガワ　トオル）日本　慶応義塾大学文学部准教授
　研究課題：統治のフロンティア空間をめぐる人類学――国家・資本・住民の関係を考察する

崎田　誠志郎（サキタ　セイシロウ）日本　日本学術振興会特別研究員
　研究課題：東地中海域における小規模漁業の漁場利用生態と漁場管理制度の統合的解明

佐藤　浩司（サトウ　コウジ）日本
　研究課題：オーストロネシア語族の建築に関する比較研究

佐藤　吉文（サトウ　ヨシフミ）日本　神戸市外国語大学非常勤講師
　研究課題：ティワナク国家とケヤ文化：先スペイン期アンデスにおける初期国家形成プロセスに関する研究

新本　万里子（シンモト　マリコ）日本　広島大学アクセシビリティセンター
　研究課題：生理用品の受容によるケガレ観の変容に関する文化人類学的研究

杉本　敦（スギモト　アツシ）日本　東北学院大学文学部・法学部非常勤講師 / 盛岡大学文学部非常勤講師
　研究課題：農の「EU 化」に伴うトランシルヴァニア牧畜の再編に関する文化人類学的研究

次下　利春人（ズグスタ　リチャード）日本
　研究課題：西部ボルネオ島のダヤク系民族に関する歴史人類学研究

鈴木　博之（スズキ　ヒロユキ）日本　オスロ大学人文学部ポスドク研究員
　研究課題：チベット文化圏東部の未記述言語の解明と地理言語学的研究

高木　仁（タカギ　ヒトシ）日本
　研究課題：人とウミガメの民族誌(2)

高橋　晴子（タカハシ　ハルコ）日本
　研究課題：服装・身装文化デジタルアーカイブの国際化および標準化の検討と実践

竹村　嘉晃（タケムラ　ヨシアキ）日本
　研究課題：移民の身体ポリティクス――インド舞踊のグローバル化とエージェンシー

田沼　幸子（タヌマ　サチコ）日本　東京都立大学大学院人文科学研究科准教授
　研究課題：ネオリベラリズムの中のモラリティ

田村　卓也（タムラ　タクヤ）日本
　研究課題：東アフリカ沿岸部の小規模漁業者による水域環境の利用に関する研究

辻本　香子（ツジモト　キョウコ）日本　大阪芸術大学芸術学部非常勤講師 / 京都精華大学非常勤講師 / 近畿大学非常勤講師
　研究課題：都市における芸能を主としたイベントの構築にみる音環境の研究

東城　義則（トウジョウ　ヨシノリ）日本
　研究課題：日本社会における狩猟の現代化に関する民族誌的研究

常田　夕美子（トキタ　ユミコ）日本　大阪大学人間科学部非常勤講師 / 京都女子大学大学院現代社会研究科非常勤講師
　研究課題：インド・オディシャーにおける親密圏の変容――恋愛・婚姻・家族をめぐる情動と経験

内藤　直樹（ナイトウ　ナオキ）日本　徳島大学大学院社会産業理工学研究部社会総合科学学域准教授
　研究課題：カネとチカラの民族誌――公共性の生態学にむけて

仲尾　友貴恵（ナカオ　ユキエ）日本　京都大学大学院文学研究科非常勤講師 / 大阪行岡医療専門学校長柄校非常勤講師
　研究課題：タンザニア・ダルエスサラームにおける身体障害者の生活基盤

中川　敏（ナカガワ　サトシ）日本　大阪大学大学院人間科学研究科教授
　研究課題：文化人類学を自然化する

中川　渚（ナカガワ　ナギサ）日本　総合研究大学院大学文化科学研究科博士後期課程修了
　研究課題：先史アンデス形成期における社会動態

永田　貴聖（ナガタ　アツマサ）日本　大阪国際大学国際教養学部非常勤講師
　研究課題：京都市東九条における日本人・在日コリアン・フィリピン人の関係形成についての人類学

中田　梓音（ナカタ　シオン）日本
　研究課題：対人関係の構築過程における言語コミュニケーション研究

中谷　文美（ナカタニ　アヤミ）日本　岡山大学大学院社会文化科学研究科教授
　研究課題：伝統染織品の生産と消費――文化遺産化・観光化によるローカルな意味の変容をめぐって

中野　歩美（ナカノ　アユミ）日本　関西学院大学先端社会研究所専任研究員
　研究課題：インド北西部に暮らす移動民の比較研究

中道　静香（ナカミチ　シズカ）日本　大阪大学非常勤講師 / 天理大学非常勤講師
　研究課題：『千夜一夜』をめぐる写本・刊本の編纂過程と書物文化の諸相

中村　真里絵（ナカムラ　マリエ）日本　園田学園女子大学シニア専修コース非常勤講師 / 大谷大学文学部非常勤講師 / 大阪国際大学国際教養学部非常勤講師 / 神戸女子大学非常勤講師 / 桃山学院大学非常勤講師 / 龍谷大学非常勤講師
　研究課題：世界文化遺産バンチェン遺跡の遺物の古美術品化とその価値づけをめぐる文化人類学的研究

二階堂　祐子（ニカイドウ　ユウコ）日本　明治学院大学社会学部非常勤講師
　研究課題：出生前検査の「対象となる妊婦」に関する人類学的研究――サブスタンスの地域性と動態

西　佳代（ニシ　カヨ）日本
　研究課題：1950年代アメリカ海軍のグアム島における風下被ばく調査に関する研究

西　真如（ニシ　マコト）日本　京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科特定准教授
　研究課題：心配と係り合いについての人類学的探求

額田　有美（ヌカダ　ユミ）日本　日本学術振興会特別研究員 / 同志社大学グローバル地域文化学部非常勤講師 / 大阪大学人間科学部非常勤講師
　研究課題：ラテンアメリカ地域における「先住民性」についての民族誌的研究――コスタリカを中心に

野澤　豊一（ノザワ　トヨイチ）日本　富山大学人文学部准教授
　研究課題：音楽する身体間の相互作用を捉える――ミュージッキングの学際的研究

野嶋　洋子（ノジマ　ヨウコ）日本
　研究課題：無形文化遺産の継承・変容と自然災害による影響の動態的把握――バヌアツ北部事例研究

登　久希子（ノボリ　クキコ）日本
　研究課題：社会をつくる芸術――「ソーシャリー・エンゲイジド・アート」の人類学的研究

萩原　卓也（ハギワラ　タクヤ）日本　京都コンピュータ学院非常勤講師 / びわこ成蹊スポーツ大学非常勤講師
　研究課題：身体性を基盤とした他者との共存の可能性を探求する――ケニアの自転車競技選手を事例に

早川　真悠（ハヤカワ　マユ）日本　摂南大学外国語学部非常勤講師 / 神戸女学院大学文学部非常勤講師 / 関西大学社会学部非常勤講師 / 久米田看護専門学校非常勤講師
　研究課題：レソトにおけるジンバブエ移民行商人の会計方法にかんする人類学的研究

平田　晶子（ヒラタ　アキコ）日本　日本学術振興会特別研究員（京都文教大学　総合社会学部）/ 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所ジュニア フェロー
　研究課題：テクノロジー利用を伴う身体技法に関する学際的研究

廣川　和子（ヒロカワ　カズコ）日本　アイヌ工芸家
　研究課題：アイヌ衣服の仕立て方について

福間　真央（フクマ　マオ）日本　メキシコ北部国境大学院大学ポスドク研究員
　研究課題：境界域の先住民――モビリティ、記憶、境界

藤井　真一（フジイ　シンイチ）日本　日本学術振興会特別研究員 / 天理大学国際学部非常勤講師
　研究課題：贈与交換による平和の構築・維持・再生産に関する人類学研究――ソロモン諸島の事例から

藤田　瑞穂（フジタ　ミズホ）日本　京都市立芸術大学学芸員
　研究課題：拡張された場における映像実験プロジェクト

松岡　佐知（マツオカ　サチ）日本　日本学術振興会特別研究員 / 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科研究員
　研究課題：高齢期の人間にとっての居住型宗教施設の役割――南インドの事例から

松田　有紀子（マツダ　ユキコ）日本

研究課題：花街の担い手コミュニティによる「伝統」継承をめぐる歴史人類学的研究

盛　恵子（モリ　ケイコ）日本
研究課題：セネガル、ニアセン教団における女性の宗教的権威の伸張

山　泰幸（ヤマ　ヨシユキ）日本　関西学院大学人間福祉学部教授
研究課題：グローバル時代における「寛容性／非寛容性」をめぐるナラティヴ・ポリティクス

山田　香織（ヤマダ　カオリ）日本　追手門学院大学基盤教育機構常勤講師
研究課題：アートツーリズムのエスノグラフィー――地方国際芸術祭の深化と拡充の理論化に向けて

山本　文子（ヤマモト　アヤコ）日本　和歌山県立医科大学保健看護学部非常勤講師
研究課題：都市における精霊信仰の人類学的研究――ミャンマー・ヤンゴンの事例から

横田　浩一（ヨコタ　コウイチ）日本　亜細亜大学国際関係学部非常勤講師 / 聖心女子大学文学部非常勤講師 / 川村学園女子大学非常勤講師 / 東洋大学生命科学部非常勤講師
研究課題：潮州系華人の宗教領域における統治と放縦に関する研究

吉直　佳奈子（ヨシナオ　カナコ）日本　東京大学大学院総合文化研究科超域文化科学専攻 文化人類学コース博士課程単位取得退学
研究課題：生殖技術における＜自然＞の一考察――法制化を巡る日本の論争事例から

渡辺　裕木（ワタナベ　ユキ）日本　フェリス女学院大学非常勤講師（スペイン語）
研究課題：メキシコ先スペイン期の遺跡に与えられた自国のアイデンティティー形成に果たす役割

特別共同利用研究員

本館は、大学共同利用機関として研究活動を展開すると同時に、大学院教育の一環として、全国の国公私立大学の博士後期課程に在籍する学生を、当該大学院生の所属する大学院研究科からの委託を受けて特別共同利用研究員として受け入れ、一定の期間、特定の研究課題に関して研究指導をおこなっている。

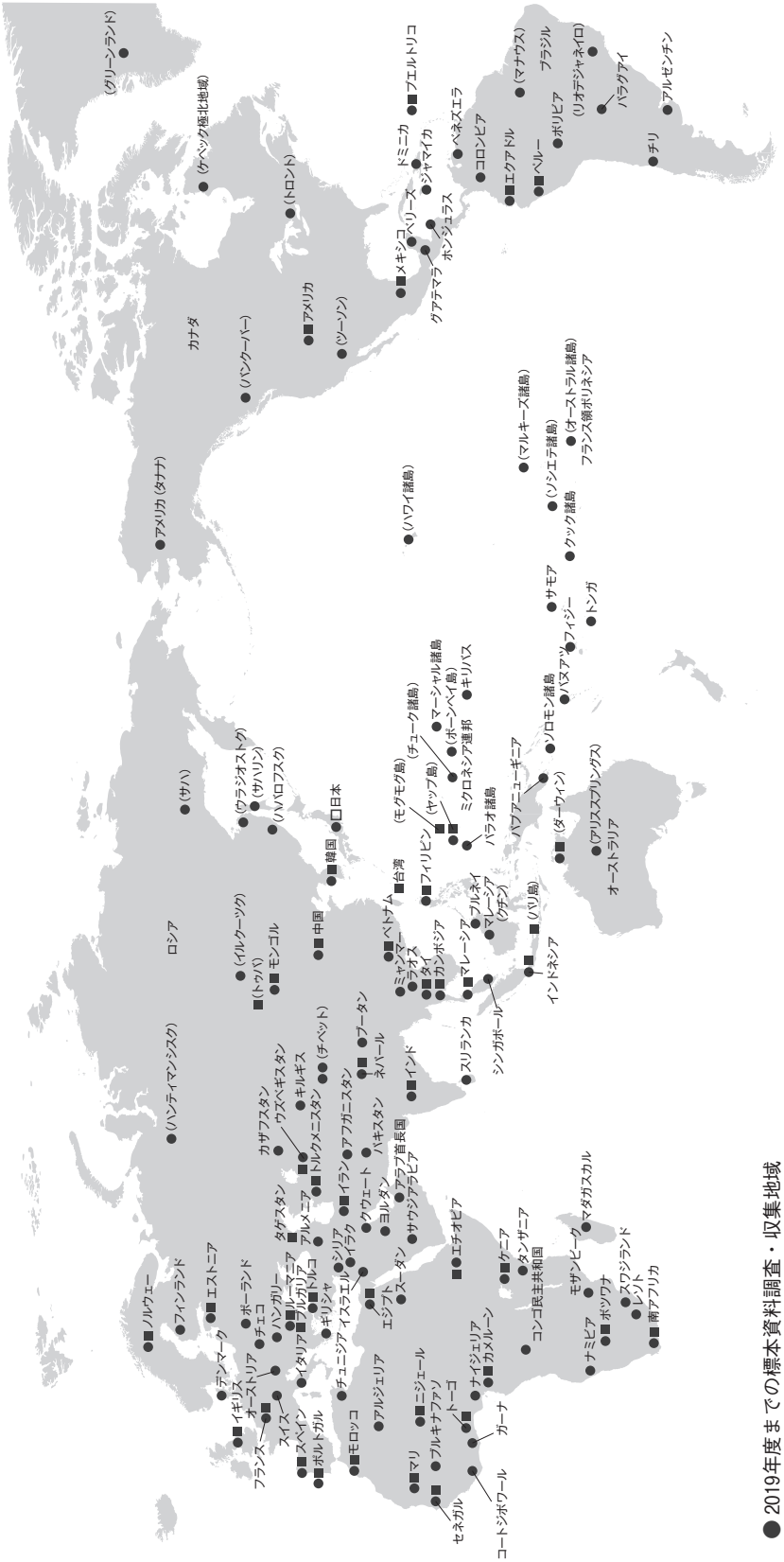
特別共同利用研究員は、各々の特定の研究課題に応じて指導教員から研究指導を受け、本館の諸施設を利用し研究を遂行するだけではなく、本館に設置されている、総合研究大学院大学文化科学研究科の講義を受けることができる。

2019年度は、国立大学３人、私立大学１人、計４人の大学院生を受け入れた。

2-9　データの利用

標本資料および映像音響資料に関するデータ

●標本資料および映像取材地域



● 2019年度までの標本資料調査・収集地域
○ 2020年度の標本資料調査・収集計画地域

■ 2019年度までの映像取材地域
□ 2020年度の映像取材計画地域

●標本資料の収集・利用状況

・2020年３月31日現在の収蔵資料数（未登録資料含む）

海外資料／179,256点（未登録資料含む）　国内資料／165,878点（未登録資料含む）　総点数／345,134点（未登録資料含む）

・大学・博物館等への貸し出し

総点数／594点

●映像音響資料の収集・利用状況

・取材

2019年度該当無し

・2020年３月現在の収蔵資料数

映像資料／8,223点　音響資料／62,651点　総点数／70,874点

・資料の利用

利用総件数／153件（内、大学47件）　資料利用総点数　6,004点（内、大学218点）

館内利用など

利用件数／82件　資料利用点数／1,255点

特別利用（館外での上映・試聴など）

利用件数／52件　資料利用点数／228点

文献図書資料の収集・整理・利用状況

●2019年度図書室の活動

１．利用者サービス

利用者支援の一環として、図書室案内・見学対応等を行った。

① 外来研究員オリエンテーション
② 総研大生新入生ガイダンス
③ 民博新任職員研修
④ JICA 委託事業「博物館とコミュニティ開発」
⑤ 若手研究者奨励セミナー
⑥ みんぱくディスカバリーツアー

＊その他、他大学等からの見学対応

２．資料整備関連

1）遡及入力事業として、国立情報学研究所 NACSIS-CAT（全国規模の総合目録データベース）への登録作業を推進している。2019年度はマイクロ資料について図書2,607件、新聞雑誌２タイトル（141件）の遡及入力を行った。

2）資料整備関連事業として、書庫・探究ひろばの約22万冊の蔵書点検を行った。

3）購読雑誌について、教員への希望調査に基づき継続図書を削減した経費から新規に３タイトルの購読を決定した。

３．広報、社会貢献その他

中学生の職場体験学習を受け入れた。

吹田市立古江台中学校　２名（2019年11月７日）

豊中市立第二中学校　２名（2019年11月13日）

●2019年度新規受入数

日本語図書 2,046点　外国語図書 1,499点

AV 資料他　34点　製本雑誌　678点　合計4,257点

●2019年３月末現在の収蔵図書数

日本語図書 268,282点　外国語図書 413,897点　合計 682,179点
日本語雑誌　10,144種　外国語雑誌　7,051種　合計　17,195種

●利用状況（2019年度）

入室者	全体	10,072人
	館外者	1,543人
時間外入室者		179人
うち日曜、祝日		70人
貸出	図書	12,516冊
	雑誌	257冊
うち館外貸出図書		2,793冊
HRAF　利用受付		0件 （カウンター受付件数）

文献複写	受付	国内（うち謝絶）	1,283（191）件
		国外（うち謝絶）	12（12）件
		来室	2,916　件
	依頼	国内	214（24）件
		国外	15（0）件
現物貸借	受付	国内	496（27）件
	依頼	国内	379（15）件
		国外	0（0）件
事項調査		受付	13件

民族学資料共同利用窓口

2006年度に、本館が所蔵する民族学資料の利用に関する問合せ窓口として「民族学資料共同利用窓口」を設置した。本館の民族学資料が、館内外における各分野の研究・教育において有効利用され、社会に還元されることを目的に、問合せ窓口を一本化したものである。

2019年度の問合せ件数は、283件であった。

問い合わせ者別	（件）
教員（大学）	59
大学院生	3
大学生	3
教員（小・中・高）	1
学生（小・中・高）	0
博物館・美術館関係	14
図書館	11
教育・研究機関	4
マスコミ関係	0
会社・団体	48
一般	55
民博教職員	85
計	283

問い合わせ者の所属機関別		（件）
公的機関	大学・大学図書館	68
	博物館・美術館	36
	小・中・高	2
	その他教育機関	1
	研究機関	7
	公共図書館	2
	地方公共団体	8
	各種団体	4
民間	研究機関	1
	会社	22
	団体	14
個人	館外	55
	館内	63
	不明	0
計		283

資料の利用目的　（件）

調査・研究	研究*1	91
	論文作成	5
	学習*2	0
	図書館から	11
	授業で利用	45
	その他	16
	小計	168
館内利用	刊行物作成	3
	館の事業	32
	参考資料	1
	資料の複製	0
	小計	36
業務用	展示用	37
	番組制作	4
	出版物作製	27
	参考資料	2
	入手方法	1
	その他	4
	小計	75
その他	寄贈申出	6
	その他	0
	小計	6
合計		285*3

注）*1 大学生以上の調査を「研究」とする
*2 高校生以下の調査を「学習」とする
*3 問合せ件数よりも利用目的の件数が２件多いのは、１件に複数の利用目的の問合せがあったため。

民族学研究アーカイブズの構築事業

本館には発足以来、民族学者の研究ノートや原稿、フィールドワークで生成、収集された映像・録音記録など、さまざまな資料が蓄積されている。2005年、民博創設30年を迎えるにあたり、民族学研究の拠点である本館が備えるべき機能の一つとして、アーカイブズ管理体制整備の必要性が検討され、かつ、これらの資料・情報を公開し、研究・教育での共同利用や社会還元に供してその価値を再認識しようと、「民族学研究アーカイブズ」の構築事業が開始された。

2007年度に、民族学研究アーカイブズ Home Page を立ち上げ、これまで青木文教、石毛直道、泉靖一、岩本公夫、内田勣、梅棹忠夫、江口一久、大内青琥、沖守弘、桂米之助、鹿野忠雄、木内信敬、菊沢季生、栗田靖之・別府春海、篠田統、杉浦健一、西北ネパール学術探検隊1958年データカード、土方久功、馬渕東一、丸谷彰、及び「日本文化の地域類型研究会」アーカイブの資料目録の作成等を行い、その成果を順次公開している。

2019年度は、昨年度に引き続き資料の整理作業を行い、「西北ネパール学術探検隊1958年データカードアーカイブ」、「木内信敬アーカイブ」、「石毛直道アーカイブ」の３件の目録を Web 公開した。また、アーカイブズ文書資料の特殊性に鑑み、複写にあたっては申請者の研究内容との関連性等を総合的に判断した上で許可することや、複写の申請は原則として来館時に限ること等を明記することなど、利用方法について再検討を行い、規程改正の準備を進めた。また、近年国外からの来館者の利用申請が増加傾向にあることを踏まえ、利用申請書の英語版作成のための翻訳案検討を行った。

目録を公開し、利用に供しているアーカイブは22件である。2019年度の利用状況は閲覧・視聴が71件、特別利用が13件、事業利用が10件であった。

データベースの作成・利用状況

●館外公開しているデータベース

・標本資料目録

本館が所蔵する標本資料（生業や生活、儀礼、製作技術にかかわる用具類など）の情報（画像あり）。ほぼすべての資料について、標本名、地域、民族、寸法・重量、受入年度などの基本情報を収録。

2018年度までの作成件数	286,297
2019年度の作成件数	134
2019年度のアクセス件数	75,939

・標本資料詳細情報

本館が所蔵する標本資料（生業や生活、儀礼、製作技術にかかわる用具類など）の情報（画像あり）。標本名、現地名、訳名、収集地、使用地、使用民族、使用年代、用途・使用法、製作地、製作法・材料など、より詳しい情報を収録。

2018年度までの作成件数　73,393
2019年度の作成件数　3,866
2019年度のアクセス件数　8,795

• 標本資料記事索引

本館関連出版物に掲載された所蔵標本資料の解説について、その書誌事項を標本資料別に整理したデータベース。

2018年度までの作成件数　67,426
2019年度の作成件数　1,838
2019年度のアクセス件数　4,078

• 韓国生活財

ソウルの李さん一家の生活財を網羅した情報。アパートの中にあったすべての物について、配置と入手方法、物にまつわる家族の思い出を記録（画像あり）。

2018年度までの作成件数　7,827
2019年度の作成件数　0
2019年度のアクセス件数　1,834

• ジョージ・ブラウン・コレクション（日本語版、英語版）

宣教師であり神学博士でもあったジョージ・ブラウン氏が19世紀末から20世紀初頭にかけて南太平洋諸島で収集し、現在、本館に収蔵されている民族誌資料の基本情報（画像あり）。

2018年度までの作成件数　2,992
2019年度の作成件数　0
2019年度のアクセス件数　428

• 映像資料目録

本館が所蔵する映画フィルム、ビデオテープ、DVD など映像資料の情報。

2018年度までの作成件数　8,223
2019年度の作成件数　0
2019年度のアクセス件数　2,304

• ビデオテーク

本館展示場で提供しているビデオテーク番組の情報。番組をキーワードで検索したり、ビデオテークブースと同じメニューから探すことができる。

2018年度までの作成件数　775
2019年度の作成件数　0
2019年度のアクセス件数　3,580

• 音楽・芸能の映像

本館が世界各地で取材したビデオ映像から、音楽演奏や芸能に関係する部分を、１曲または１テーマごとに抽出した動画データベース。映像は館内限定公開。

2018年度までの作成件数　849
2019年度の作成件数　0
2019年度のアクセス件数　266

• 松尾三憲旧蔵絵葉書コレクション

松尾三憲（みのり）氏が、1919年から1923年までの海軍在職中に、訓練航海の途上訪れた現地で買い求めた絵葉書の情報（画像あり）。

2018年度までの作成件数　170
2019年度の作成件数　0
2019年度のアクセス件数　391

• 京都大学学術調査隊写真コレクション

「京都大学カラコルム・ヒンズークシ学術探検隊」（1955年）、「京都大学探検部トンガ王国調査隊」（1960年）、「京都大学アフリカ学術調査隊」（1961年～1967年）、および「第二次京都大学ヨーロッパ学術調査隊」（1969年）が撮影した写真の情報（画像あり）。

2018年度までの作成件数　22,361
2019年度の作成件数　0
2019年度のアクセス件数　1,081

• 西太平洋およびインド洋を中心とする海洋民族写真資料――大島襄二写真コレクション

大島襄二氏が、1967年から1991年にかけてアジアやオセアニアなどの調査で撮影した写真の情報（画像あり）。

2018年度までの作成件数	7,889
2019年度の作成件数	0
2019年度のアクセス件数	965

• アフリカ　カメルーン民族誌写真集――端信行コレクション

端信行本館名誉教授が1969年から90年代初頭にかけて行った、おもにアフリカのカメルーン共和国での民族学的調査のなかで撮影した写真の情報（画像あり）。

2018年度までの作成件数	6,530
2019年度の作成件数	0
2019年度のアクセス件数	993

• 沖守弘インド写真（日本語版、英語版）

写真家沖守弘氏が1977年から1996年にかけてインド全域で撮影した、宗教・祭礼・民俗画・芸能・生活文化に関する写真の情報（画像あり。）

2018年度までの作成件数	21,971
2019年度の作成件数	3
2019年度のアクセス件数	2,016

• ネパール写真（日本語版、英語版）

「西北ネパール学術探検隊」（1958年）に参加した高山龍三氏（当時大阪市立大学大学院生）らがネパールで撮影した写真、および、同隊が収集し、現在本館に収蔵されている標本資料の情報（画像あり）。

2018年度までの作成件数	3,879
2019年度の作成件数	0
2019年度のアクセス件数	13,041

• 音響資料目録

本館が所蔵するレコード、CD、テープなど音響資料の情報。

2018年度までの作成件数	62,651
2019年度の作成件数	0
2019年度のアクセス件数	1,783

• 音響資料曲目

本館が所蔵する音響資料について、音楽の曲単位、昔話の一話単位で収録した情報。

2018年度までの作成件数	351,802
2019年度の作成件数	0
2019年度のアクセス件数	785

• 図書・雑誌目録

本館が所蔵する図書・雑誌資料（マイクロフィルムなどを含む）の書誌・所蔵情報。

2018年度までの作成件数	647,344
2019年度の作成件数	3,266
2019年度のアクセス件数	694,993

• 梅棹忠夫著作目録（1934～）

著書・論文をはじめ本の帯の推薦文にいたるまで、梅棹忠夫本館初代館長のあらゆる著作を網羅した目録情報。

2018年度までの作成件数	6,725
2019年度の作成件数	186
2019年度のアクセス件数	3,363

• 中西コレクション――世界の文字資料

世界のさまざまな文字で書かれた図書・新聞・手稿・標本などの資料に関する分析情報と書誌情報、文字サンプルの画像。これらの資料は、中西印刷株式会社・故中西亮氏が世界各地で収集。

2018年度までの作成件数	2,729
2019年度の作成件数	0
2019年度のアクセス件数	68,948

• 吉川「シュメール語辞書」

吉川守氏（広島大学名誉教授）が40年ほどの年月をかけて完成させた、シュメール語の研究ノート。親字33,450語をキーワードに検索・閲覧できる。

2018年度までの作成件数　33,450語（40,596頁）
2019年度の作成件数　0
2019年度のアクセス件数　842

• Talking Dictionary of Khinina-ang Bontok（ボントック語音声画像辞書）

Lawrence A. Reid氏（ハワイ大学名誉教授）が編集した、フィリピン・ルソン島北部で話されるボントック語のギナアン方言の辞書。語の派生関係、例文、音声・画像などのデータを結びつけたマルチメディア・データベース辞書。

2018年度までの作成件数　7,717
2019年度の作成件数　0
2019年度のアクセス件数　3,785

• 日本昔話資料（稲田浩二コレクション）

稲田浩二氏（当時京都女子大学教授）らのグループが、1967年から1978年にかけて日本各地29道府県で現地録音取材した日本昔話資料（446本のテープ・約190時間）の情報（音声あり）。音声は館内限定公開。

2018年度までの作成件数　3,696
2019年度の作成件数　0
2019年度のアクセス件数　1,725

• rGyalrongic Languages（ギャロン系諸語）［英語、中国語］

長野泰彦本館名誉教授とMarielle Prins博士が編集した、中国四川省の西北部で話されるギャロン系諸語のデータベース（音声あり）。83の方言ないし言語それぞれについて、425または1200の語彙項目と200の文例を収録している。

2018年度までの作成件数　41,078語（文例：15,706件）
2019年度の作成件数　0語（文例：0件）
2019年度のアクセス件数　24,238

• 衣服・アクセサリー

本館が所蔵する衣服標本資料とアクセサリー標本資料の詳細分析情報、および関連フィールド写真の情報（画像あり）。

2018年度までの作成件数　31,430
2019年度の作成件数　266
2019年度のアクセス件数　19,872

• 身装文献

身装文化に関する雑誌記事、図書の索引情報。1）服装関連日本語雑誌記事（カレント）、2）服装関連日本語雑誌記事（戦前編）、3）服装関連外国語雑誌記事、4）服装関連日本語図書、5）服装関連外国語民族誌で構成。

2018年度までの作成件数　179,794
2019年度の作成件数　1,976
2019年度のアクセス件数　8,383

• 近代日本の身装電子年表

洋装がまだ日本に定着していなかった1868年（明治元年）から1945年（昭和20年）の日本を対象とした身装関連の電子年表。「事件」と「現況」、「その年の情景」、「回顧」、テキスト画像で構成される。当時の新聞記事と身装関連雑誌から情報を収録。

2018年度までの作成件数　11,905
2019年度の作成件数　0
2019年度のアクセス件数　1,012

• 身装画像――近代日本の身装文化

和装と洋装が拮抗していた1868年（明治元年）から1945年（昭和20年）までの日本を対象とした身装関連の画像データベース。当時の新聞小説挿絵、写真、図書中の図版、ポスターなどから画像を収録。

2018年度までの作成件数　6,740
2019年度の作成件数　1

2019年度のアクセス件数　28,040

• 津波の記憶を刻む文化遺産――寺社・石碑データベース

日本の沿岸部に残されている、地震や津波災害の記憶を伝える寺社や石碑、銘板などの情報（画像あり）。

2018年度までの作成件数　378
2019年度の作成件数　62
2019年度のアクセス件数　78,730

• 3次元CGで見せる建築――東南アジア島嶼部の木造民家

佐藤浩司本館准教授が1981年以来調査してきた東南アジア各地の木造建築物の情報。民家の3次元CGから作成したgifアニメーションにより建築物内外を巡回して見ることができる。

2018年度までの作成件数　36地点　57棟
2019年度の作成件数　0地点　0棟
2019年度のアクセス件数　592

• 焼畑の世界――佐々木高明のまなざし

佐々木高明（本館元館長）が、調査で撮影・記録した写真の中から、特に日本の焼畑に関するものを収録（画像あり）。

2018年度までの作成件数　454
2019年度の作成件数　0
2019年度のアクセス件数　4,224

• 平成の百工比照コレクションデータベース

金沢市政120周年記念事業として、加賀藩の文化奨励政策の象徴的存在である「百工比照」の現代版をめざし、平成21（2009）年度から金沢市と金沢美術工芸大学が共同で制作した「平成の百工比照」の情報（画像あり）。

2018年度までの作成件数　――
2019年度の作成件数　553
2019年度のアクセス件数　245

●館内で利用できるデータベース

• 標本資料詳細情報（館内専用）

本館が所蔵する標本資料（生業や生活、儀礼、製作技術にかかわる用具類など）の情報（画像あり）。標本名、現地名、訳名、収集地、使用地、使用民族、使用年代、用途・使用法、製作地、製作法・材料など、より詳しい情報を収録。

2018年度までの作成件数　277,624
2019年度の作成件数　773
2019年度のアクセス件数　41,285

• カナダ先住民版画

本館が所蔵する代表的なカナダ先住民版画の基本情報と解説（画像あり）。特別展「自然のこえ 命のかたち――カナダ先住民の生み出す美」（2009年）の展示資料を中心に収録。

2018年度までの作成件数　158
2019年度の作成件数　0
2019年度のアクセス件数　110

• 音楽・芸能の映像

本館が世界各地で取材したビデオ映像から、音楽演奏や芸能に関係する部分を、1曲または1テーマごとに抽出した動画データベース。

2018年度までの作成件数　849
2019年度の作成件数　0
2019年度のアクセス件数　89

• 京都大学学術調査隊写真コレクション

「京都大学カラコルム・ヒンズークシ学術探検隊」（1955年）、「京都大学探検部トンガ王国調査隊」（1960年）、「京都大学アフリカ学術調査隊」（1961年～1967年）、および「第二次京都大学ヨーロッパ学術調査隊」（1969年）が撮影した写真の情報（画像あり）。

2018年度までの作成件数　42,195

2019年度の作成件数　0
2019年度のアクセス件数　445

• 梅棹忠夫写真コレクション
梅棹忠夫本館初代館長が、世界各地における調査研究活動の過程で撮影した写真の情報（画像あり）。
2018年度までの作成件数　35,481
2019年度の作成件数　0
2019年度のアクセス件数　10,290

• オーストラリア・アボリジニ研究フィールド写真
小山修三本館名誉教授が、1980年から2004年にかけて、オーストラリア・アボリジニ文化の調査で記録した、儀礼から風景までの多彩な写真の情報（画像あり）。
2018年度までの作成件数　7,999
2019年度の作成件数　0
2019年度のアクセス件数　145

• 朝枝利男コレクション
朝枝利男氏が1930年代にアメリカの学術調査団に数回にわたり同行し撮影した、南太平洋の人々や動植物の写真の情報（画像あり）。
2018年度までの作成件数　3,966
2019年度の作成件数　0
2019年度のアクセス件数　180

• 西太平洋およびインド洋を中心とする海洋民族写真資料――大島襄二写真コレクション
大島襄二氏が、1967年から1991年にかけてアジアやオセアニアなどの調査で撮影した写真の情報（画像あり）。
2018年度までの作成件数　8,842
2019年度の作成件数　0
2019年度のアクセス件数　21

• 沖守弘インド写真（日本語版）
写真家沖守弘氏が1977年から1996年にかけてインド全域で撮影した、宗教・祭礼・民俗画・芸能・生活文化に関する写真の情報（画像あり。）
2018年度までの作成件数　22,120
2019年度の作成件数　0
2019年度のアクセス件数　13

• 西北ネパール及びマナスル写真
「西北ネパール学術探検隊」（1958年～1959年）が撮影した写真の情報（画像あり）。一部に「日本山岳会第一次マナスル登山隊」（1953年）科学班の写真（推定）を含む。本館に移管された旧文部省史料館資料の一部。
2018年度までの作成件数　620
2019年度の作成件数　0
2019年度のアクセス件数　2

• タイ民族誌映像――精霊ダンス
田邉繁治本館名誉教授が調査したタイの精霊ダンスの写真情報（画像付き）。精霊ダンスの系統、開催地域、祭主から写真群を閲覧できる。写真は調査報告（タイ語）とも関連づけられている。
2018年度までの作成件数　写真：10,082　調査報告：41
2019年度の作成件数　0
2019年度のアクセス件数　16

• 東南アジア稲作民族文化綜合調査団写真
日本民族学協会が1957年から1964年にかけて三次にわたり東南アジアに派遣した調査団のうち、第一次調査団（1957年）と第二次調査団（1960年）が記録した写真の情報（画像あり）。
2018年度までの作成件数　4,393
2019年度の作成件数　0
2019年度のアクセス件数　27

• 日本昔話資料（稲田コレクション）
稲田浩二氏（当時京都女子大学教授）らのグループが、1967年から1978年にかけて日本各地29道府県で現地録

音取材した日本昔話資料（446本のテープ・約190時間）の情報（音声あり）。

2018年度までの作成件数	3,696
2019年度の作成件数	0
2019年度のアクセス件数	51

・国内資料調査報告集

日本国内における、1）民具などの標本資料類の所在、2）伝統技術伝承者の所在、3）民族・民俗映像記録の所在、4）民族・民俗関係出版物の所在、に関する情報。本館が委嘱した国内資料調査委員による調査報告集（1980年～2003年）をデータベース化。

2018年度までの作成件数	21,373
2019年度の作成件数	0
2019年度のアクセス件数	3

●2019年度に館外公開されたデータベース

・焼畑の世界――佐々木高明のまなざし（2019年５月16日公開）

・平成の百工比照コレクションデータベース（2019年５月16日公開）

2-10　みんぱく施設の利用

博物館施設の利用状況

●民博（展示場）を利用した大学・研究機関等（50音順、カッコ内は人数）

愛知教育大学(4)、追手門学院大学(250)、大阪大学(122)、大阪大谷大学(80)、大阪学院大学(61)、大阪芸術大学(17)、大阪工業大学(20)、大阪国際大学(14)、大阪樟蔭女子大学(16)、大阪城南女子短期大学(26)、大阪成蹊大学(45)、大阪人間科学大学(23)、岡山理科大学(10)、沖縄県立芸術大学(29)、追手門学院大学(60)、尾道市立大学(29)、金沢学院大学(8)、金沢星稜大学(102)、関西大学(123)、関西学院大学(69)、岐阜大学(17)、岐阜女子大学(52)、京都大学(15)、京都産業大学(27)、京都市立芸術大学(2)、京都精華大学(126)、京都造形芸術大学(70)、京都橘大学(175)、京都府立大学(40)、近畿大学(61)、高知大学(11)、甲南大学(75)、甲南女子大学(66)、神戸大学大学院(10)、神戸芸術工科大学(47)、神戸女学院大学(120)、神戸女子大学(80)、国際ファッション専門職大学(49)、滋賀県立大学(42)、実践女子大学(25)、四天王寺大学(6)、杉野服飾大学短期大学部(41)、杉野服飾大学(9)、スタンフォード大学　日本センター(7)、成安造形大学(32)、成蹊大学(4)、摂南大学(56)、園田学園女子大学(14)、拓殖大学(6)、中国学園大学(54)、中国短期大学(60)、筑波大学(9)、帝塚山学院大学(57)、東海大学(36)、東京大学(11)、東京藝術大学(18)、同志社大学(25)、東北学院大学(70)、東北芸術工科大学(9)、東北生活文化大学(26)、獨協大学(12)、奈良教育大学(27)、奈良芸術短期大学(21)、奈良県立大学(13)、梅花女子大学(55)、阪南大学(27)、姫路獨協大学(1)、兵庫県立大学(19)、福知山公立大学(6)、平安女学院大学(23)、別府大学(12)、法政大学(20)、桃山学院大学(27)、龍谷大学(170)、早稲田大学(14)

＊注　利用申請手続をおこなった大学・研究機関等

□来館目的（アンケート回答より、順不同抜粋）

・70名近い学生を天候に関わりなくつれていける場所として、最も適合的である
・学科の性格に最も合った展示内容を有している
・セミナー室の利用を認めていただけるのでとても使いやすい
・企画展「旅する音楽」を見学するため
・造形美術に関連して、世界各地の文化を学ぶことができるため
・本学から近く、雨天でも活動が可能で、団体で利用できる食堂があるから
・周辺に太陽の塔や大阪日本民芸館などがあるから
・学芸員資格科目の見学実習のため
・日本にある博物館の中でも最大級の規模を持ち、設立の理念と経緯、研究・教育・展示の各方面における現在に至るまでの様々な取組など、国内の博物館のありようを学習するうえで民博は必ず見学しておくべき存在だと考えたため
・特別展「子ども／おもちゃの博覧会」を見学し、日本のおもちゃや子ども文化に対する学生の理解を促すため

- 「比較文化研究」という講座なので、異文化理解の最適の場所として選んだ
- 博物館実習の授業の一環で見学
- 異なる世界の文化について理解を深めるため
- 展示が質量ともに豊富であること
- 今回の課外授業をきっかけに博物館への関心を高めることができそうな施設であること
- 博物館資料保存論の授業として、保存・活用・収蔵の実際を見学・体験できるため
- 大学から至便であり、世界各地の民族文化に関する資料が豊富である
- 民族衣装や染織品の展示方法を拝見させていただく場として利用
- 学生のリサーチのため図書室と展示場を使用したかったため
- アイヌ民族や琉球民族等の日本のマイノリティーグループについて学ぶため
- デザイン、イラストレーションの授業のインスピレーションになりそうと考えたから
- 海外の文化について広範に学ぶことができるため
- 社会学を専攻する学生なので、文化人類学的な素養を学ぶ必要があるため。

●国立民族学博物館キャンパスメンバーズ利用実績（カッコ内は人数）

大阪大学、京都文教学園［大学・短期大学］、同志社大学［文化情報学部・文化情報学研究科］、千里金蘭大学、学校法人立命館［立命館大学］、学校法人塚本学院［大阪芸術大学・大阪芸術短期大学・大阪芸術大学付属大阪美術専門学校※通信課程含む］、京都大学、京都市立芸術大学、同志社大学［グローバル地域文化学部］（3,985）

施設の整備状況

博物館施設の整備状況

1）既存施設・設備の有効活用への取組状況

- 施設の有効利用及び適切な管理のための施策の検討を行うために、施設マネジメント委員会を2019年度は10回開催した。

2）施設の維持管理の取組状況

- 現行の建築関係基準に適合しておらず（既存不適格）、安全性に問題があった講堂（1981年建設）の客席ホール（450席）の吊り天井を現行基準に適合した構造とするため耐震改修工事を行った。
- 本館４階屋上の劣化した防水層の改修及び４階への夏場の断熱、遮熱効果を意図した対策等の屋上改修工事を行った。
- 自主点検及び保全業務の報告書に基づいて、予防保全・不良箇所を含めて計画的に改修計画を推進し、修繕経費の抑制を図った。
- 安全対策として、館内（展示場・収蔵庫除く）の状況調査を行い、防災管理点検、安全巡視点検の結果と照合し、危険箇所の改善を行った。
- 衛生的環境を確保するため、2019年度も館内害虫駆除を行った。

※館内害虫駆除については、調達係へご確認ください。

3）省エネルギー対策等や地球温暖化対策に対する取組状況

- 昨年に引き続き、夏季及び冬季における省エネルギーへの取組について館内に周知した。

2-11　受賞・特許

受賞

●2019年度の職員受賞者

園田直子	2019年６月23日	文化財保存修復学会　第13回学会賞
末森　薫	2019年６月23日	文化財保存修復学会　第13回奨励賞
川瀬　慈	2019年７月15日	第６回鉄犬ヘテロトピア文学賞

鈴木英明　　2019年11月２日　第９回地域研究コンソーシアム研究作品賞

知的財産形成・特許出願など

●特許登録

発明の名称：案内装置
登　録　日：2019年５月24日
登 録 番 号：特許第6528306号
発　明　者：平井康之、冨本浩一郎、吉田憲司、日髙真吾、山中由里子

発明の名称：展示台
登　録　日：2019年９月13日
登 録 番 号：特許第6583878号
発　明　者：日髙真吾、上まり子、小谷竜介、和髙智美